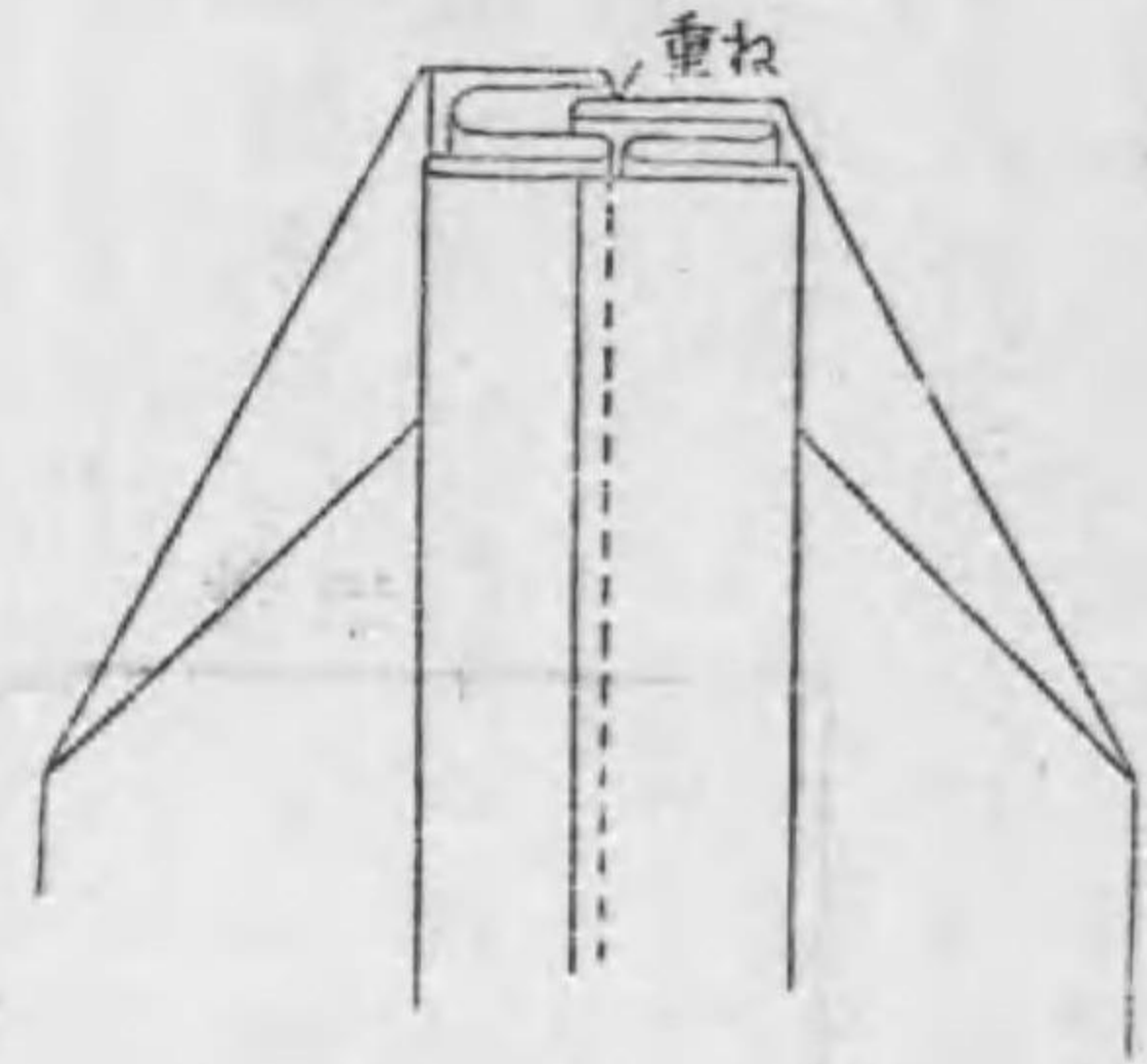


後襷のたゝみを裏から見たる圖

第二百二十九圖

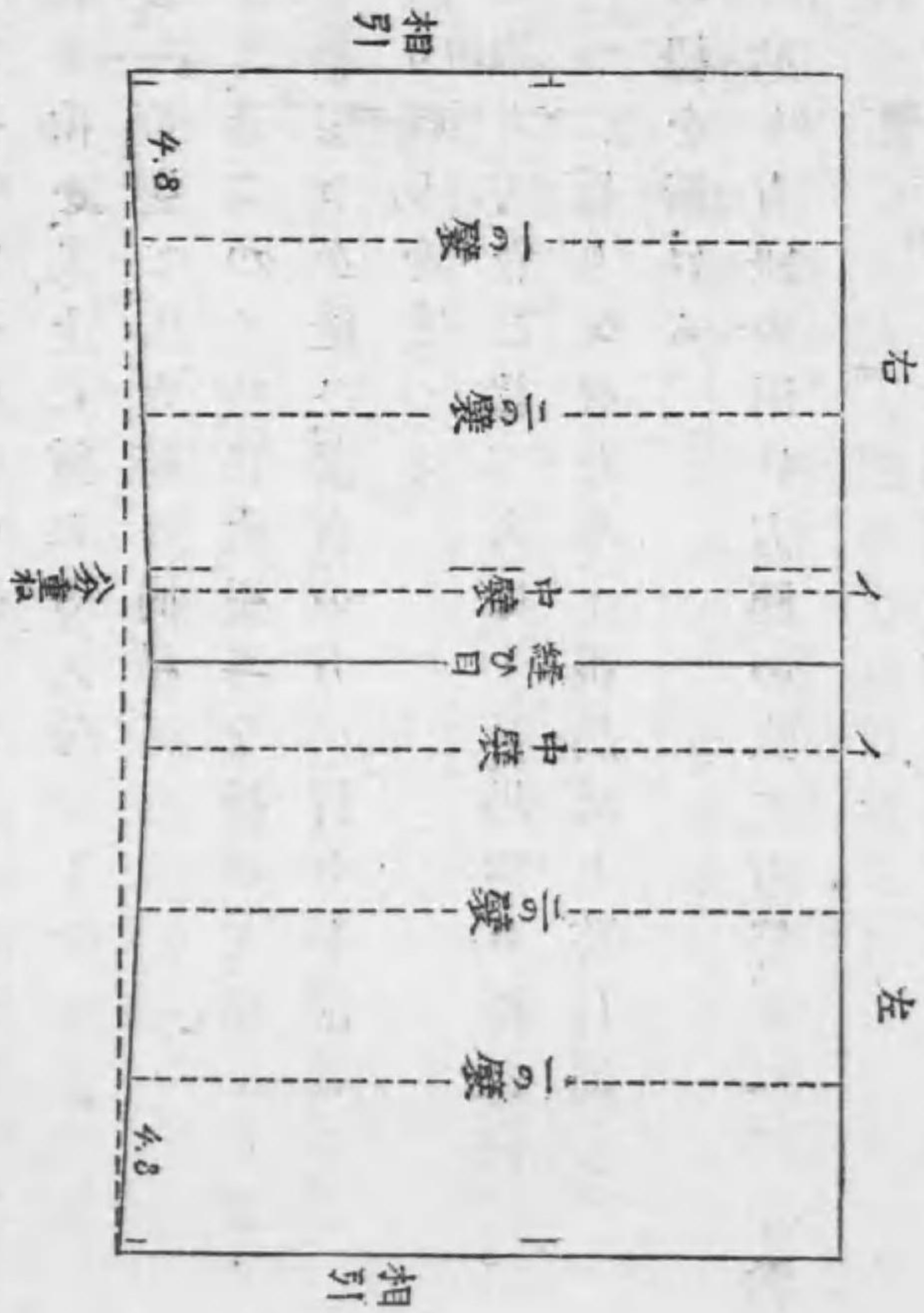


圖の様に標の所を折る(折りの附き
 にくいものは、襷けを掛ける)。
 (へ) 左右とも、(イ)の折り山を中央の縫ひ
 目に、突き合せる。
 (ト) 左の(ロ)の折り山を、前のつき合せた
 襷より(中央)八分出し、其上に右脚の
 (ロ)の折り山を重ねて位置を定め、襷
 けにて押さへ置く。

備考 布幅の廣い時は、以上の様に、二重襷にするが、布幅の狭い
 時は、外襷のみ折る、又二重襷の仕方は、前の様につき合せにする
 時と、好みによつては、外襷の仕方と同じ様に、八分重ねて取る事
 もある。
 (チ) 前襷の取り方。

(リ) 後襷の様に標の所を折る。

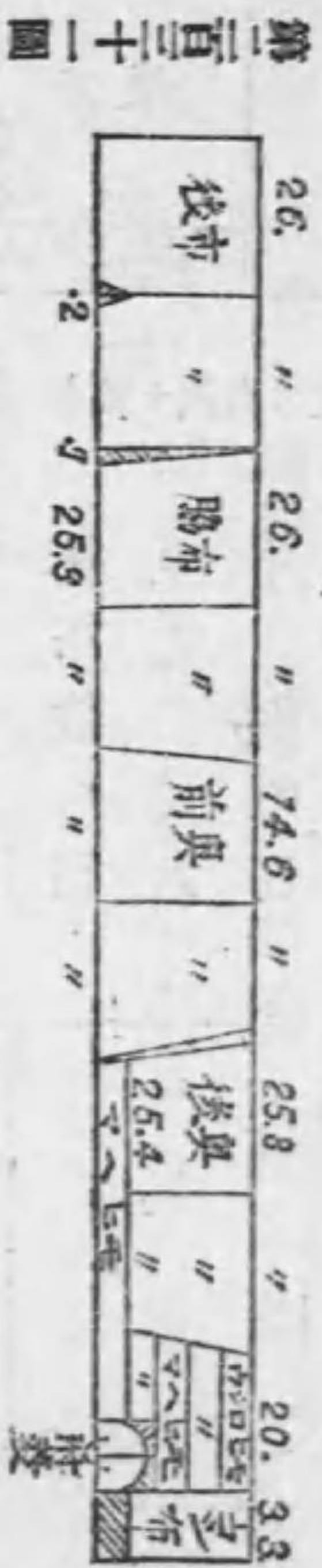
前襷の取り方
第二百三十圖



- (又) 右の(イ)の折り山を、中央の縫ひ目より、八分左に重ね代を出し
- (イ) 左の折り山を、其上に重ねる(八分)。
- (ル) 二の襷、一の襷とも、女袴と同様。
- (チ) 前後とも、落ちつく様に、火熨斗を掛けて、押しを置く。
- (ワ) 左右の相引きを縫ひ、前布の方に折りを附ける。
- (カ) 裾の纏り残りをまつる。
- (ヨ) 笹髷の取り方、及び綴ち方は、十番馬乗り袴に同じ。
- (タ) 丈を三つに折りて、疊む事、十番馬乗り袴に同じ。
- (レ) 前後の紐を新ける。
- (ツ) 後腰の貼り方、紐の附け方、腰の立て方等、すべて十番馬乗り袴に同じ。
- (ネ) (ツ) 前紐の附け方も、十番馬乗り袴に同じ。
- (ネ) 仕上げ。薄く霧を吹いて、火熨斗を掛けるか、アイロンを掛け

るかして、疊み、前後の紐を、紙で封じ置く事等、十番馬乗り袴と同様である。

常幅の布を以つて、大人襦無し袴の裁ち方。
 後布裁ち切り寸法二尺六寸 裾の切り上げ、後六分(後布二分奥布四分) 前一寸四分 (脇布七分前奥七分)。



裁交 2.9
 前奥 1.4 前奥 1.1 襷り方公式 後布裁切丈×布敷+後紐+腰布一裁交=總尺
 後奥 1.1×2 回 算 式 26×8+20+6-2.9=231.1

幅二尺の布を以つて、大人襦無し袴の裁ち方。
 後布裁切り丈、二尺六寸 裾の切り上げ、後五分、前一寸四分。

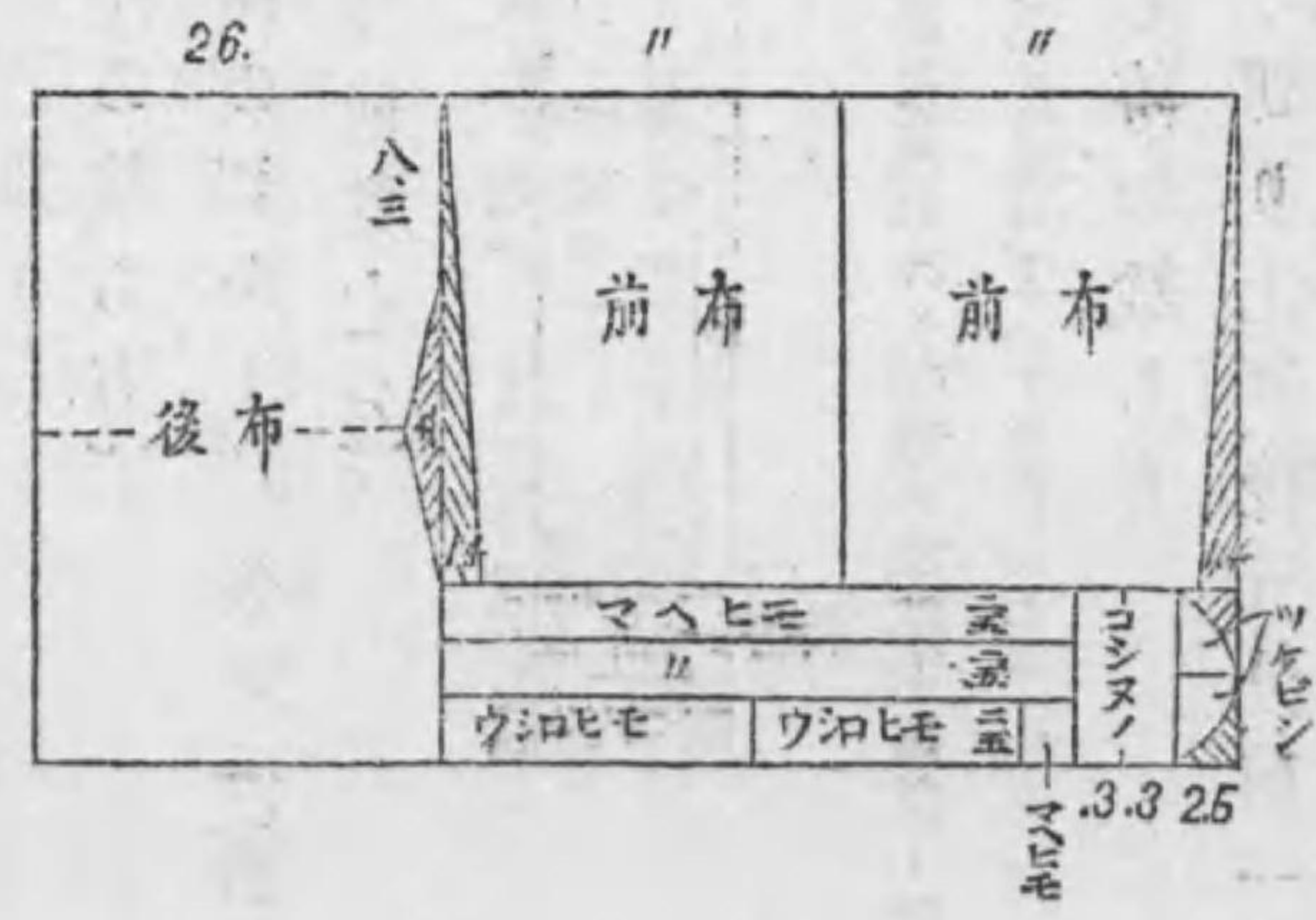
第二百三十二圖



積り方公式 後布裁切丈×布數+腰布+附菱=總尺
 同算式 $26 \times 4 + 6 + 2.5 = 112.5$

幅三尺六寸の布を以つて、大人襠無し袴の裁ち方。後布裁ち切り丈、二尺六寸、裾の切り上げ、後五分、前一寸四分。

第二百三十三圖



積り方公式 後布裁切丈×布數=總尺
 同算式 $26 \times 3 = 78$

種類。 帶

- 女帶 Ⅱ 丸帶 腹合せ帶 半幅帶 鏡帶 單帶 袋帶 文化
- 帶 比翼帶 掛下帶等。
- 男帶 Ⅱ 角帶 單帶 袋帶 折帶 兵子帶 三尺帶等。

女帶

丸帶。帶側の幅が一尺九寸位、丈一丈〇五寸から、一丈一尺で、幅を二つに折つて仕立てたものである、又尺三と云つて、一尺二寸幅、丈九尺位のもの、尺五と云つて一尺三寸五分幅、丈一丈位のものがある、これは女子七歳の帯解き、又は紐解きの祝といつて、初めて附け紐を取り去つて、帯を用ひる祝に締める

もので、十一二歳まで用ひられる、近來大人も、夏帯に輕裝帯こ呼んで、尺五の幅を用ひる。

腹合せ帯。鯨帯、晝夜帯など、も云ふ、兩側違ふ帶側を縫ひ合せたもので、兩側が異なるところから、此名が附けられたのである、本來は一方に必黒縹子、一方に薄色のものを合せたものである、現今常用として専ら用ひられる。

半幅帯。並幅の帶側を、幅二つに折つて、丸帯の様に仕立てたもので、子供老人が用ひる。

鏡帯。表側に、並幅、又は中幅の帶側を使ひ、裏に半幅の布を附けたもので、幅の兩端で、表が裏に折り返るやうになる、それが鏡の縁のやうなところから、名づけられたものである、又半幅の布を幅の一方にかたよせて、仕立てる事もある、好みにより半幅の布を附けた方を、表に締める場合ひがある、これを特にお

染帯ぞも云ふ。

單帯。夏季用として、博多、厚板、唐織、糸錦、綴織、綴錦等の、特に厚織にしたものを、そのまま、單で用ひる。

袋帯。兩側の帶を、初めより幅の兩端を、輪にして織つたもので、そのまま、用ひる、地質は八端、博多等である。

文化帯。名古屋帯昔にもこの名があつたが、今のは違ふ、改良帯こも云ふ、後に結ぶ所だけ並幅に仕立て、他を半幅に仕立てたもので、輕いのは、布の經濟な爲めによつて、作られたものである。

比翼帯。文化帯こ大略同じで、違ふ所は、幅の縫ひ目に幅二寸位の別布を入れ、片側がついて居る様に、仕立てたものである。

掛下帯。襦褌の下に締める帶で、上り幅七寸位、丈一丈位で、丸帯の様に仕立てたものである、帶地は縹子、鹽瀨、綴子等に刺繡、金

銀箔で模様を置いたもの、又地紋を織り出したものを用ひる。

(以上女帯)

角帯。帯側の幅五寸五分より六寸、丈一丈五寸内外で、幅を二つに折つて仕立てたものである。

單帯。幅二寸六分内外、丈一丈五寸内外で、普通の角帯地より厚く織つたもので、そのまま、單で用ひる。

袋帯。女物の袋帯と同じで、幅及び丈は、男單帯地と同じである。折り帯。八寸幅に織つたものと、五寸四分幅のものとあつて、前者は

幅を三重に、後者は二重に、疊んでそのまま、用ひる。

兵子帯。並幅、又は中幅で、丈六尺、又は八尺五寸内外で、丈の裁ち目を、一分位の三つ折りにして縮け、そのまま、用ひる。地質は木綿、金巾、メリンス、繭紬、羽二重、縮緬、錦紗等である。これはもご九州地方の風俗であつたが、明治戊申以後、官吏、書生間に盛んに

行はれ、現今では、上下を通じて常用とされて居る。

三尺帯。職人、労働者等の用ひるもので、幅二寸位、丈三尺で、木綿、

八端、博多、真田打ち等を用ひ、前に結ぶ。(以上男帯)

腹合せ帯。

地質。メリンス、羽二重、鹽瀬、縹子、博多、緞子、八端、御召、琥珀、縹珍、厚

板、唐織、大和錦、綴錦、綾織、倭文織、精好織、紹紗、麻、縮、紙布等。

芯地。三河木綿、ゴム芯、真岡木綿(一枚芯にする時)等。

仕立て上げ寸法。

幅、七寸五分より八寸五分、長さ一丈五寸より、一丈一尺。

地直じ。

(1) 帯側の裏から火熨斗をかけて、緯の布目を真直に直し、布全體を平にする。

(2) 耳を鋏で(地厚の時は、少し波立つ位に、薄地は少し)伸ばす、伸び

ぬ耳は、斜に耳の深さだけに、二寸おき位に切り込みを入れ、又極地厚で、耳の伸びぬ場合ひは、耳だけ切落し、地直しが一通り出来たならば、幅を二つに軽く折つて、兩耳の伸び加減を調べ、又布全體が平か否かを調べる。帯は締めるものであるから、締め居る内に、布の狂ひが出ぬ様に、特に地直しを十分にせねばならぬ。

各種帯側の地直しに就いての注意。

(1) 絞りの帯側は、裏から弱い火熨斗を當て、絞りを、必要な幅及び丈に伸ばす。鹿の子絞り等の細かきものには、新モス等の、軟い布で裏打ちをする。其仕方は、裏打ち布の幅と、丈とを定め置き、それに合せて帯側を重ね、周圍を熨けて綴ち合せ、なほ横に一寸五分おき位に、絞りに應じて、縫ひ目の距離を斟酌する。同色の継ぎ糸で、絞りの山に針をかけぬ様に、表に小針を出して、一

目落しに綴ちつける。總べて絞りの趣きのある所は、絞つた形にあるのであるから、平に伸ばし切らぬやうに注意せねばならぬ。

(2) 紗等の帯で、模様を染めた眞岡木綿などを、裏打ちにして、表に模様を透す場合ひがある。これは十分注意して、表と裏打ち布との、釣り合ひを平に取り、周圍を熨けて綴ち合せる。

(3) 繻珍、厚板、博多等の、模様を織り出したもので、裏の緯糸が釣れて居る事があるが、此時は、鍔でよく伸ばし、なほ伸びぬ時は、糸の中央で切り、其糸が表に抜け出ぬやうに、極薄い糊で裏に貼つて置く。

(4) 金通し(金糸を多く使つた、繻珍、錦の類) 金糸、銀糸を使つて居るものには、霧を吹いたり、濡れ手で撫でたりすると、箔が剥げ、又高熱の鍔、火熨斗を多く使ふ時は、金銀の色を變じる。

(5) 近來の博多は、非常に伸び易く、仕立て、居る間も、狂ひが出る、又模様や、獨鉗を織り出した所が、平でない事が多いから、よく火熨斗を掛け、布全體を平に伸ばし、且耳を十分伸ばして置く、又水氣を與へると、汚點を生じ易い。

(6) 縹子は、緯の布目が曲つて居る事が多いから、斜に手で引いて直すここが必要である、又この織物は、總じて伸び易いものであるから、よく火熨斗をかけねばならぬ。

芯も、表と同様に、布目を正しく直し、全體に薄く霧を吹き、耳の伸びて居る時は、特に耳に濃く霧を吹いて、巻き棒に正しく固く巻き、二三時間置いた後、ひろげて乾かす。

兩側の釣り合ひの取り方。

(1) 帶側の地厚の方を、下に平に置き、地薄の狂い易い方を、其上に中表に重ね、兩側の織り出しを合せて、待ち針をうち、次に幅の

中央で、一尺五寸位づつ、下の帶側を平になし、其上に、上の帶側を、平に釣り合ひを取つて重ね、待ち針を打つて行く、釣り合ひを取り終つたならば、下側の方を上置き換へて、緩みがないか、否かを調べる(お太鼓の方から、さきに釣り合ひを取る)。

(3) 幅の中央に打つた待ち針を辿つて、緯の布目を曲げない様に、耳の方に待ち針を打ち直す、此時兩側の幅の釣り合ひに注意する。

(3) 躰け糸で、幅及び丈を、縫ひ込みに入る所を、針目八分位に、兩側を綴ち合せて置く(丈をさきに、布目眞直に綴ち、次に幅を綴ちる)。

標の附け方。

幅の兩端の縫ひ代を、同じ様に取り、豫帶幅を當つて置き、次に耳の一方に、縫ひ代を度つて、通し篋をする。

縫ひ方。 両端は、第一の織り出しが、縫ひ込まれるやうに、標を附ける。

地質によつて、半返し、又は抜き針にする。

角は、丈幅とも、二分位縫はないで、丈幅ともに二寸位手前から、斜に五厘縫ひ出す(縫ひこみが重なるから、自然幅が狭なるからである)。

(イ) 標通りに幅の一方を縫ひ、次に幅標を、出来上りに一分加へて、通し篋をなし、前と同じに縫ふ、この時丈の中央から、手の方に九寸縫ひ残す。

丈の両端を、布目のまがらぬ様に縫ふ。

(ロ) 縫ひ込みの折り方。

さきに綴ちたる綴ち糸をぬき取り、縫ひ目に平鋏を當て、丈の縫ひ目には一分、幅の方には五厘のきせをかけて、地の厚い方

に縫ひこみを、指で軽く折り返し、表に返してから、ゆるみの出ぬ様に、丈の縫ひこみの幅を、少しつらせ加減にして、幅の縫ひ目のきわに綴ち附け、其上に幅の縫ひ込みを折つて、角を正しくして綴ち附ける。

極地厚のもの時は、極細の絹糸で、全部半返しに縫ひ、幅の縫ひ目を割る事もある。

帯側に裏打ちをした場合ひは、丈幅とも、縫ひ目から裏打布の縫ひこみを切り取る。

(ハ) 芯布の幅の裁ち方。

芯の幅は、上り帯幅(折りを附けてから、きせの山から、きせの山までを度る)より、五厘詰めた寸法に、通し篋をして、兩耳を裁ち落す、幅は始めに芯の一方を裁ち落とし、それからその裁ち目から、幅をはかりて、通し篋をして裁ち落す。

極地厚の時は、幅丈とも縫ひこみだけ詰めて裁つ。

地薄の帯地で、二枚芯にする時は、一枚は、上り幅より五厘つめた寸法に裁ち、一枚はそれより縫ひ込みだけ詰めて裁ち、二枚の芯を平に重ね、躰けて幅の中央を、綴ち合せて置く。

（一） 兩側とも、紗、絹等の、下の透く帯地の場合ひは、二枚の芯を平に重ねて、帯幅より二寸位入りたる所を、兩端とも躰け糸で綴ち置き、それより幅を定めて裁ち落す（この躰け糸は、芯布を帯側に綴ち附けてから抜きこる）。

（二） 帯側と芯布との釣り合ひ。

帯側を平に置き、帯側の丈のきせの山と、芯の裁ち目（芯布の端は、一尺位の所から幅を揃へて軽く折り返し、其折り返し山から、兩端同寸法に度り、これを伸ばして、通し篋をして裁ち切る、又幅を軽く二つに折つて、裁ち目の方に標を附け、幅を伸ばして標

から標まで通し篋をして裁つてもよい）を揃へて、待ち針をうち、帯側の幅の中程で、少し引つぱり加減にして、よく伸ばし、其上に芯をゆるめ加減に合せて、待ち針をうち、同じ加減にして一尺五寸位づつ、釣り合ひを取つて、針をうつ。

待ち針をうち終つたならば、芯布を下に、帯側を上になる様に置き換へ、帯側の方からなで、芯との釣り合ひを見る（双方に皺の出ぬ様になればよい）。

（ホ） 芯の綴ち附け方。

幅の中央で、芯の釣り合ひを取つて、打つた待ち針を辿つて、幅の兩端に待ち針を打ち直し、幅の縫ひ目から一分入つた所を、七八分位の針目で、芯を縫ひこみに綴ち附ける（但し縫ひ残した所には、綴ち附けぬ）。

縫ひ目を割つた時は、割り目に芯の入る様に、綴ち附け、厚地で

縫ひこみと、芯を突き合せにする場合ひは、重ならぬ様に、注意して、躰け糸で、突き合せ接ぎにする。

紗、絹等の二枚芯の時は、芯で縫ひこみをはさんで、芯を綴ちた糸の透かぬ様に、大針を縫ひこみの中に通し、芯の上には、小針を出して、綴ちつける。

尙眞綿を引く時は、一方の芯を綴ち附けたならば、これを兩方に開き、芯の上に、眞綿を引き、平に帶側の上に乗せて、一方を綴ち附け、綴ち終りたらば、その上に又眞綿を引きて表返す、眞綿は、帶側と芯とが離れぬためと、堅い芯が帶皮に當つて、損じぬためとに引くのである。

但し、絹、紗等、透くものには用ひぬ。

(へ) 四つの角を、先に表に返し置き、角の所の芯の、折りまがらぬ様に、よく角を押し出し置く、端よりかるく巻き、縫ひ残した所か

ら表に返す、兩方とも返し終つたならば、芯が平になる様に、文をよく引き合せ、次に縫ひ残した所の一方の縫ひ込みに、芯を綴ち附ける。

(ト) 躰けの掛け方。

厚地の者は躰け糸二本、普通は一本で、幅丈とも、一分五厘入つた所を、針目七八分にして躰けを掛け、次に縫ひ残した所を、針目細かに縮ける、躰けなしでも、折りのよく附くものは、躰けを掛けるに及ばぬ。

(チ) 仕上げ。

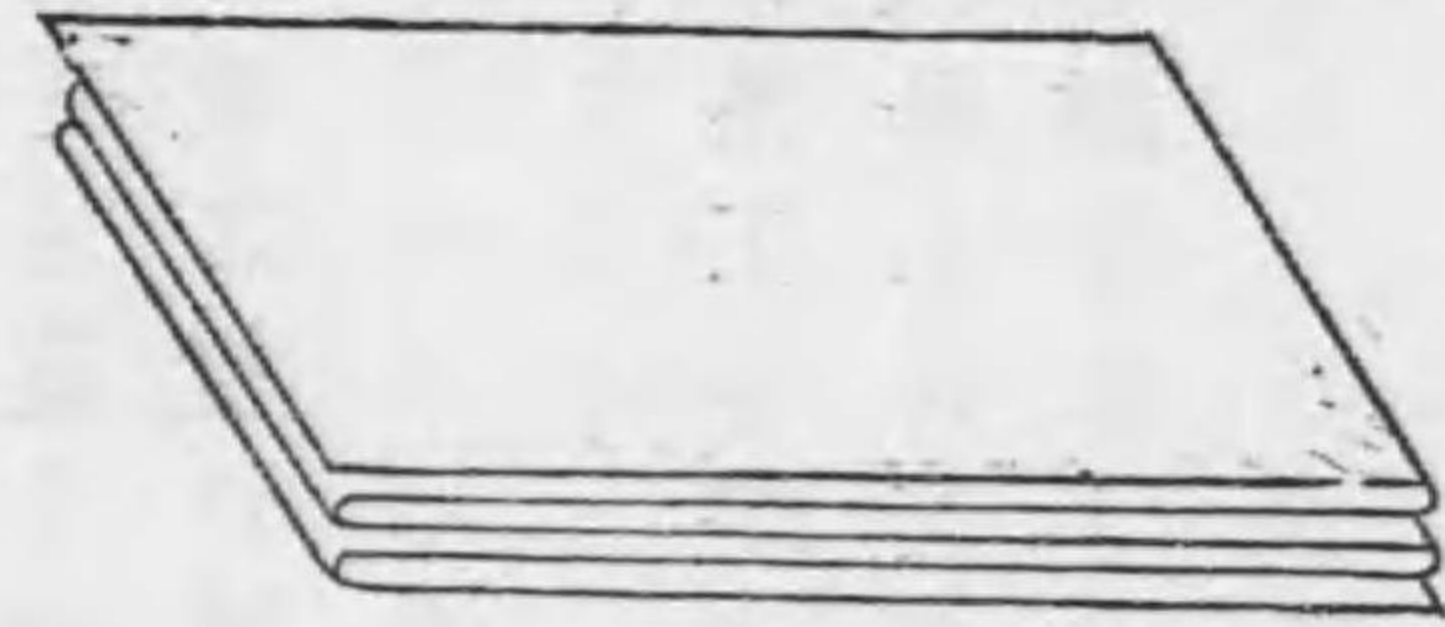
全體に火熨斗を當て、皺を伸ばし、便宜幾つかに折つて疊み、折り目にはかゝらぬ様に、押しを置き、後疊み直して、前の折り山であつた所に、押しを置く。

(リ) 綴ち方。

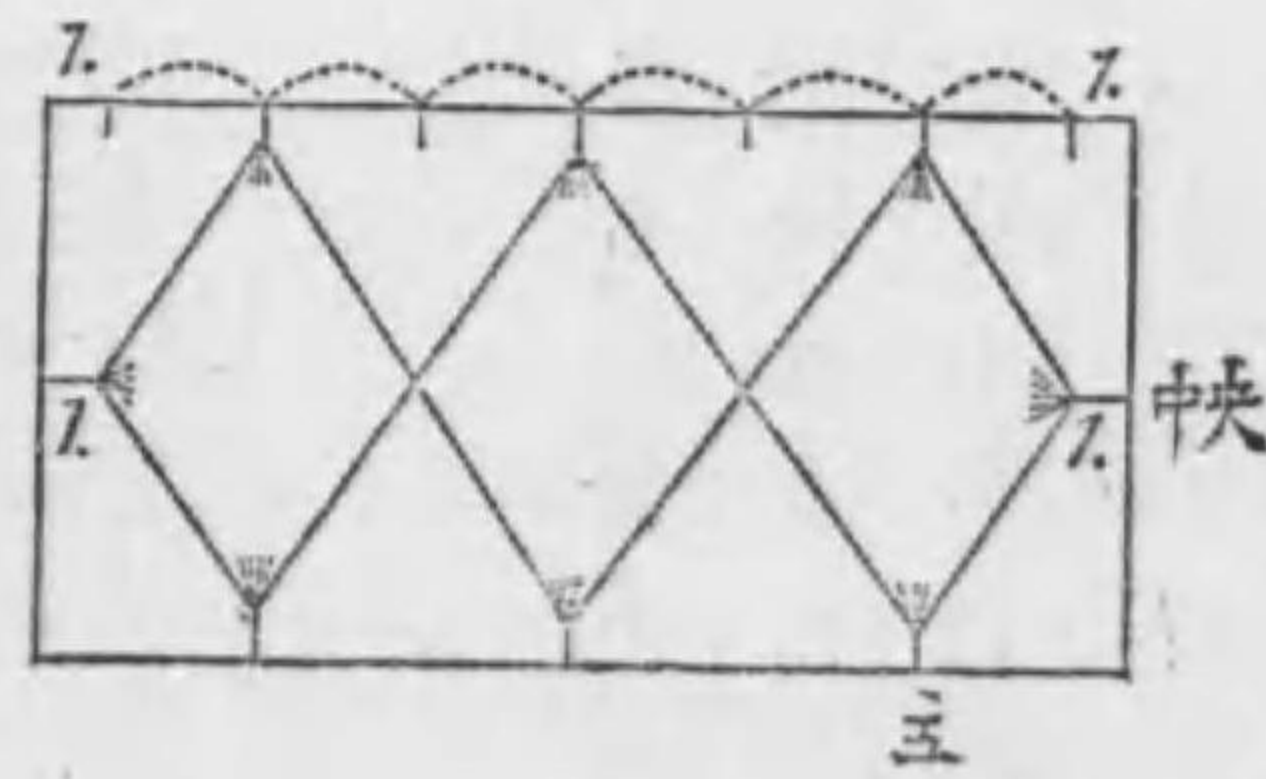
丈を七つ、又は五つに、梯子段疊みに折り、圖の如く紅白二本の絹糸で幅の中央は、一寸の深さに綴ち、丈の方は左右から一寸取つて、残りを六等分して、六分の一の所と、中央と、都合三ヶ所に、五分の深さに綴ち、其結んだ糸を、一寸位残して切つて置き

それに菱
形に同じ
紅白の糸
でかけて
置く。

疊み方
第二百三十四圖



綴ち方
第二百三十五圖
六等分



但し綴ちて穴の残る様な地質のものは、丈の兩端だけを綴ちおく。

丸帯

地質 腹合せ帯に同じ。

仕立て上げ寸法。幅、八寸より、八寸五分 丈、一丈五寸より、一丈一尺内外。

仕立て方。

(イ) 地直し。腹合せ帯に同じ、但し地厚の織物は、幅の折り山になる所を、裏から鋺で押しつけ、通し篋をなし置く。

(ロ) 中表に、軽く幅を二つに折り、腹合せ帯と同様に、幅の中央で、兩側平に釣り合ひを取り、待ち針をうち、耳でも同じく釣り合ひを取つて、待ち針を打ち、麩け糸で縫ひ込みを綴ち附け

置き、次に上り幅に、五厘(ゆつくり)の被せ代を加へた寸法に、幅標を通し、篋でつける(厚地にて耳の硬い時、模様不差支へない場合ひは、幅一分位ずらせて折る)。

(ハ)羽二重系(極厚地なものは、極細の絹糸で、針目は五厘を、半返し又は本返しに縫ふ、羽二重、絹、紗などの、地薄のものは、普通に針目細かく縫ひ、丈の縫ひ目及び幅の方も、角より二三寸位、半返し縫ひになし、角の所は、腹合せ帯と同様に、五厘位浅く縫つて被せが多くかゝらぬ様にする)。

(ニ)縫ひ目に十分に平鋏を掛ける、地厚のもので、返し縫ひにした時は、幅の縫ひ目を割り、丈の縫ひ目には、五厘のきせを掛けて折り返し、角で縫ひ込みが厚くなる時は、角を四角に切り取り、極地厚の時は、三角に切り取つて、額縁にする。

地薄の時は、腹合せ帯と同様に、幅の縫ひ目にも、五厘の被せを

掛けて、折り返す。

(ホ)芯の幅は、上り幅より五厘つめて裁ち切り、帯側に合せて、芯の釣り合ひを取る。

(ヘ)縫ひ目を割つた時は、割り目に芯の入る様にして、縫ひこみに、芯を綴ち付け、真綿を芯の両側に引く。

(ト)表に引き返し、躰けの掛け方、仕上げ、綴ち方は、腹合せ帯に同じ。

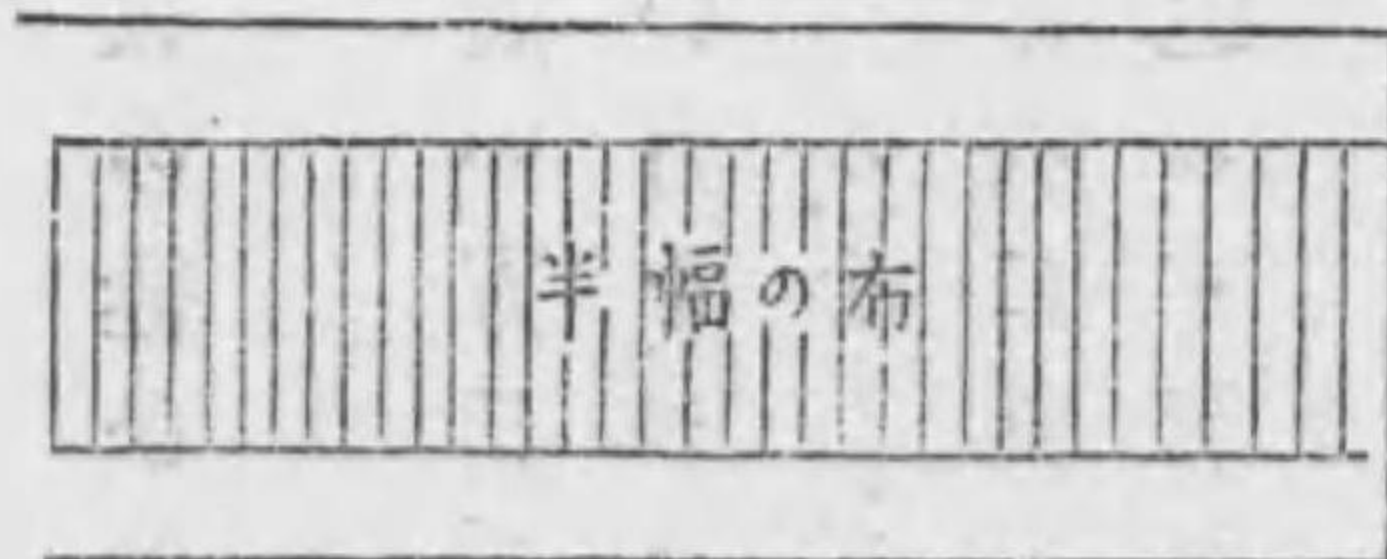
鏡 帯

地質。腹合せ帯に同じ。

用布。並幅又は中幅の帯地一本 半幅の布一枚、芯。仕立て方。

出来上りの圖
第二百三十六圖

輪



輪

- (イ) 地直を。腹合せ帯に同じ。
- (ロ) 釣り合ひ。中表に二枚合せ(一方の端を合せ)一枚の縫ひ逃みを定めて(腹合せ帯と同様に縫ちる。
- (ハ) 縫ひ方。縫ひ代をさだめて通し篋をして縫ひ廣い方に折りを附け半幅の方に折り返る二倍の寸法だけ廣い方をせまい方に返して一方を縫ち幅標(出來止りに五厘加へる)をして縫ひ(中程で帯幅だけ縫ひ残す)折りを廣い方に附け次に兩端を縫ひ折りを附ける(兩端を縫ふ時に兩方の折り返る寸法を定める)。
- (ニ) 芯の幅を止り幅より五厘狭く切り半幅の布の方を止にして芯を載せ腹合せ帯と同様に釣り合ひを取つて丈及び幅の縫ひこみに縫ち附ける。
- (ホ) 芯の上に真綿を引き縫ひ残した所から表に引き返し芯を平

にして針目細かに新けて置く。
 (へ) 仕上げ疊み方腹合せ帯に同じ。

改良帯

出來上の圖

第 二 百 三 十 七 圖



地質。腹合せ帯に同じ。
 仕立て上げ寸法。

お太鼓の幅八寸内外、半幅の所は、其二分の一。
 お太鼓を一重に結ぶ時、上り丈八尺五寸より九尺、内お太鼓の長さ、二尺六寸内外。

お太鼓を二重に結ぶ時、上り丈、一丈より一丈五寸(普通帯側一本)内お太鼓の長さ、三尺三寸より三尺五寸。
用布。お太鼓の裏側を、表側から續けて取つてもよく、又裏側に別布をつけてもよい。

ポケット。帯側と似た色の、甲斐絹、絹、瓦斯甲斐絹等の滑りのよい地質を選び、並幅で八寸を要する。

芯 並幅、丈上りの帯丈に同じ。
仕立て方。

(イ) 地直し。腹合せ帯に同じ。

(ロ) 帯側のお太鼓にする方を、裏側にする分だけ、表に折り返し(裏側が別布の時は、同じく中表に重ね)腹合せ帯と同じに、釣り合ひを取り、幅の両端を躰け糸で綴ち合せ置き、次に幅標を上り幅に、一分のきせ代を加へて附ける。

(ハ) 半幅になる所を、中表に幅を軽く二つに折り、両側の釣り合ひを平に取つて、躰けでおさへ置き、お太鼓の幅標の二分の一に、幅標をなし、丈の端は、五分の縫ひ代を取る。

(ニ) お太鼓の幅を標通りに縫ひ、上部の裁ち目は、三分縫ひ残す(裏側の別布の時は、丈の端を五分の縫ひ代で縫ふ)、幅の縫ひ目に五厘のきせを掛け、表側の方に折りを附ける。

(ホ) 半幅の手の方から、二尺三寸より、二尺五寸(着用者の肥瘠により斟酌する)はいつた所より、ポケットの口、六寸五分縫ひ残り、それよりお太鼓の縫ひ終りから、半幅の上り寸法だけ残して、手前まで縫ひ、次に半幅の丈の端を縫ひ、一分のきせを掛けて、縫ひ代を折り返し、幅の方は、五厘のきせを掛けて折り、角を綴ち附けておく。

(ヘ) ポケットの布を、中表に幅を二つに折り、帯の上り幅より、一分

詰めて幅標をなし、半幅六寸五分縫ひ残して置いた所に、縫ひ目より五厘淺く、ポケットを縫ひ付け、被せを掛けずに、折りをポケットの方に返し、ポケットの丈の、兩端を縫つて置く。

(ト) 芯は、上り幅より五厘詰めて裁ち切り、幅を二つに折つて、半幅の所に載せ、釣り合ひを取つて、待ち針をうち、綴ちる時は、縫ひこみを、芯で挟んで綴ち附ける。ポケットも、芯ではさみ、底を芯に綴ち附けておく、次に芯の兩側に眞綿を敷く。

(チ) お太鼓の、上部の裁ち目から手を入れて、半幅の方を表に引き返し、よく引き張つて、芯を平にし、次にお太鼓の所に眞綿を引き、芯を重ね、釣り合ひを取つて、縫ひ代の下に、芯を入れて、綴ち附け、表に返す。

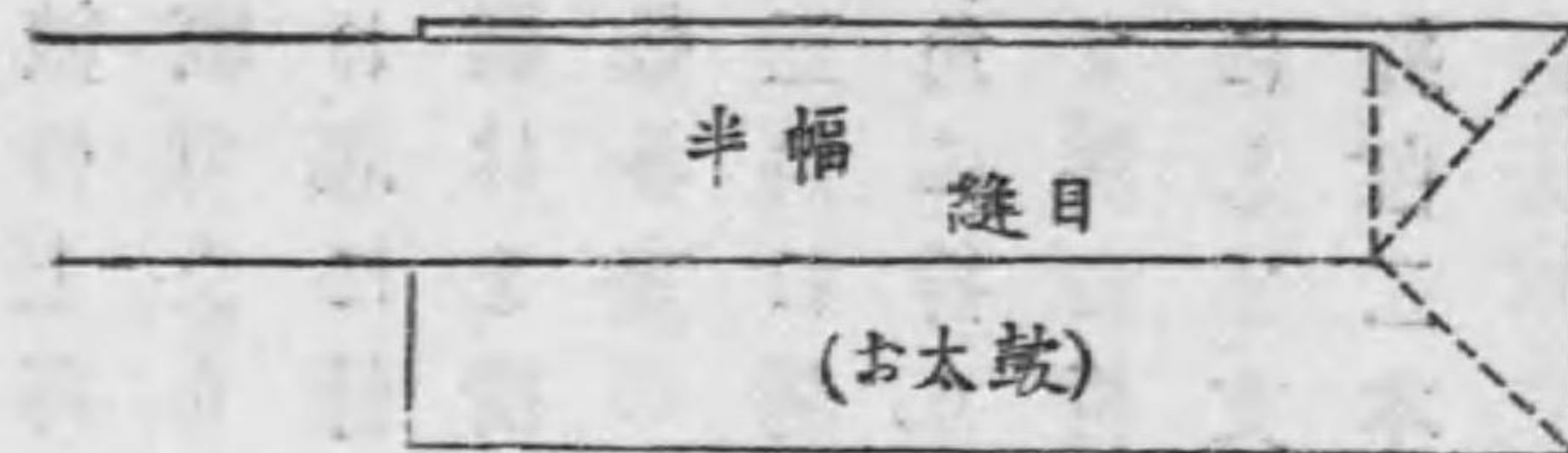
(リ) お太鼓の、裏側の上部の裁ち目を、中表に幅を二つに折り、裏から縫ひ、其縫ひ目を芯に綴ち附けて置き、縫ひ残して置いた所

を、細かく紵けつつけ、止まりは逆針を使ひ、固く止めて置く(お太鼓の上部の裁ち目を縫はず、そのまゝ、芯に綴ちつけて置き、半幅の上り幅だけ縫ひ残した所を、三角に折りて、其裁ち目に重ね、芯に針をかけて、細かく紵け附けておく、仕方もある)。

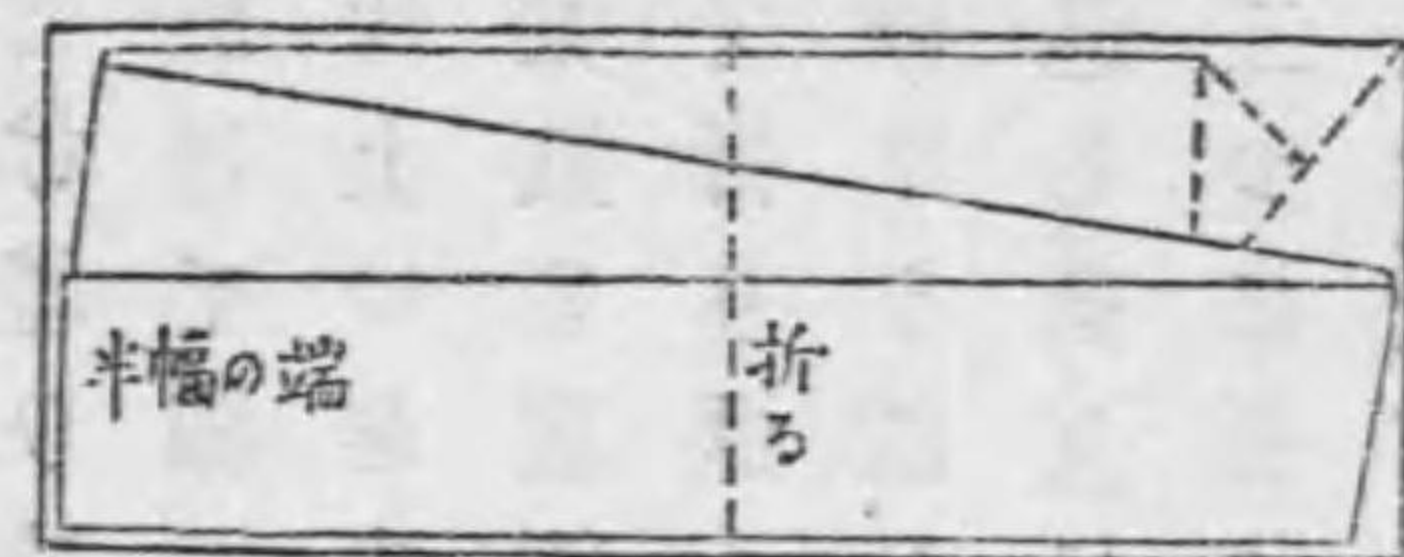
(ヌ) 躰けを掛け、仕上げをする。

(ル) 疊み方。お太鼓の裏側を上にして、平に置き、半幅の止まりを三角に開いて折り返し、其所でお太鼓と平行になるやうに、三角に折り、圖のやうに、お太鼓の上に重ね、一方の丈の端に合せ、斜に折り返し、交互にお太鼓の幅に折り、終りに半幅を内側にして、丈を二つに折つて、丈の兩端で、二ヶ所を一寸の深さに、紅白二本の糸で、綴ちて置く。

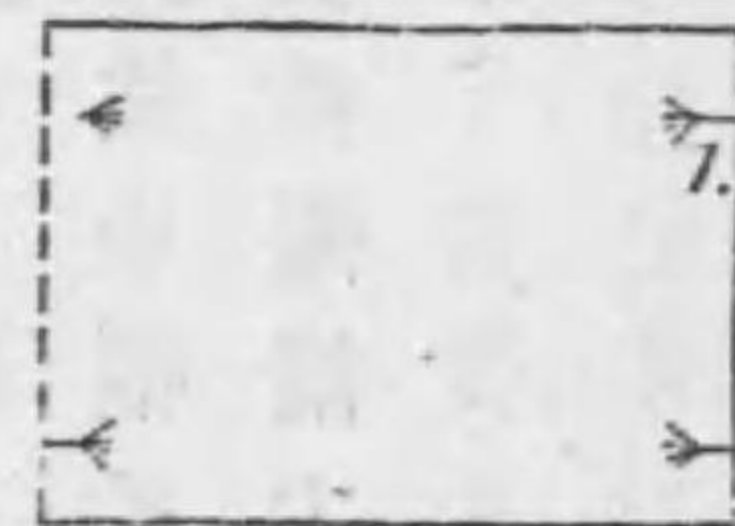
第二百三十八圖



第二百三十九圖



第二百四十圖



男帯(袷角帯)

地質。小倉、縞子、博多

織、結城紬、縞珍、

厚板、唐織、糸錦、

綴錦、綴織、縞、博

多、縞、縞珍、其他。

仕立て方種類。縮け仕立て、縫ひ仕

立て(一名市川仕立て)。

仕立て上げ寸法。幅、二寸六分内外

丈、一丈五寸より、一丈一尺。

縮け仕立。

(イ) 地直し。裏から全體に、火熨斗を

當て、平に伸ばし、次に鍔で、女帯と同様に耳を伸ばす、伸ばし終つたならば、兩側とも、同じ様に平であるか、又耳が同じやうに、伸びて居るか否かを調べる、厚地の時は、丸帯と同じく、幅の中央の折り山になる所を、鍔で押し付けて置く。

(ロ) 帯側を、中表に軽く幅を二つに折り、幅標をなし、標通りに縮け代を裏に折り返し、其折り山を裏から鍔で、伸ばし加減にして、抑へ置く、此時幅に不同のない様にする。

(ハ) 芯の幅を定めて裁ち、帯側を少し強く引き加減にして、釣り合ひを取り(即ち芯を緩め加減にする)待ち針を打つ、芯は帯側の厚さに依つて、一枚芯、二枚芯、三枚芯にする。

各芯の幅の定め方、及び綴ち附け方。
(1) 一枚芯。圖の如く、上り幅から、縫ひ代を減じ、それよりなほ五厘詰めて幅を切り、縫ひ代と突き合せて置き、綴ちは、突き

合せ目から二分はいつた所を、丈幅ともに綴ち附ける。

(2) 二枚芯。一方の幅は、縮け代を控へ、一方は、縮け山まで、はい
る寸法にし、なほそれより五厘詰めて切る、綴ち附けるのは
縮け代と突き合せの方にする。

(3) 三枚芯。圖の如く、二枚芯の上に、一枚芯を重ねて、綴ち合せ
たものである、又帯側が、ごく地薄の時は、これによるこ、かへ
つて縮け代の所が、薄くなるから、この時は、幅の両端とも、
縮け山まで入る様にして、其上に縮け代を控へた、一枚芯を重
ねる。

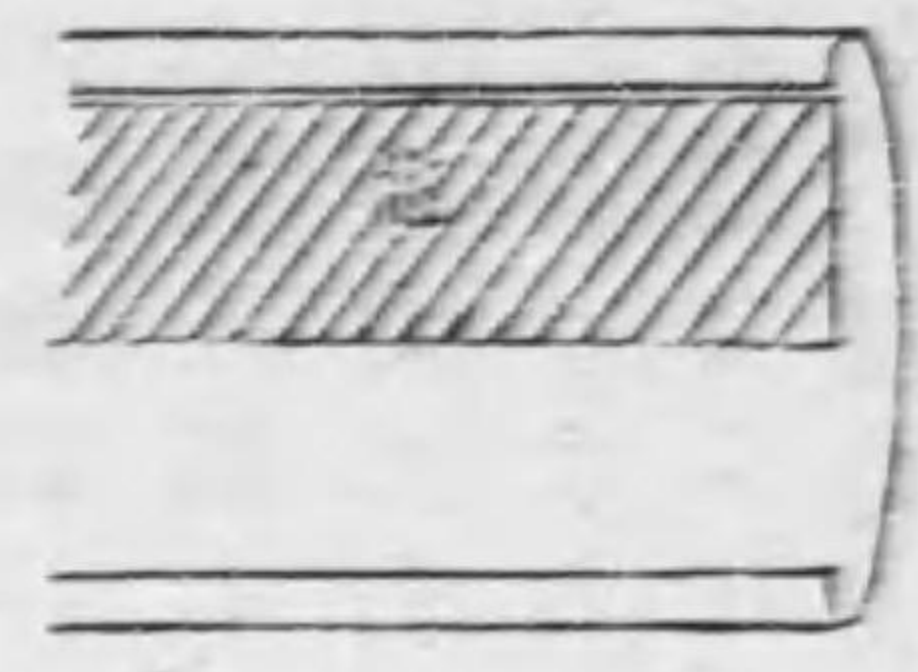
綴ちつけるのは、帯を締めて、裏側になる方にする、又獨鉗な
ごのある時は、其獨鉗の裏に綴ち附ける、針目を目だ、せぬ
爲である。

糸は同色、又は多少濃い目の羽二重糸、又は継ぎ糸を用ひ、針

目は裏の大針を一寸位にして、帯側の裏の布目を、小針で抄
ふやうにして、綴ちつける。

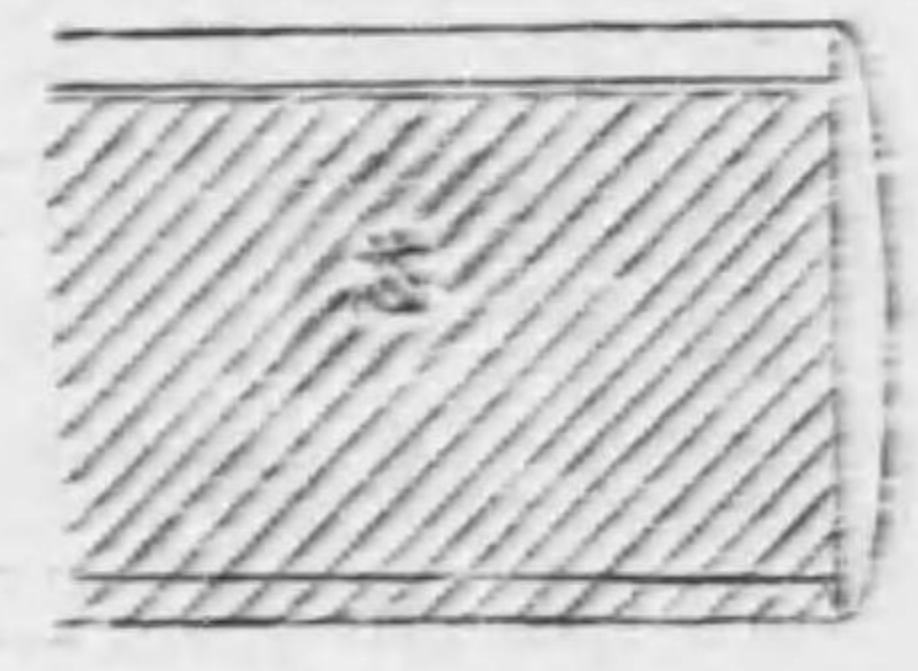
第二百四十一圖

一枚芯



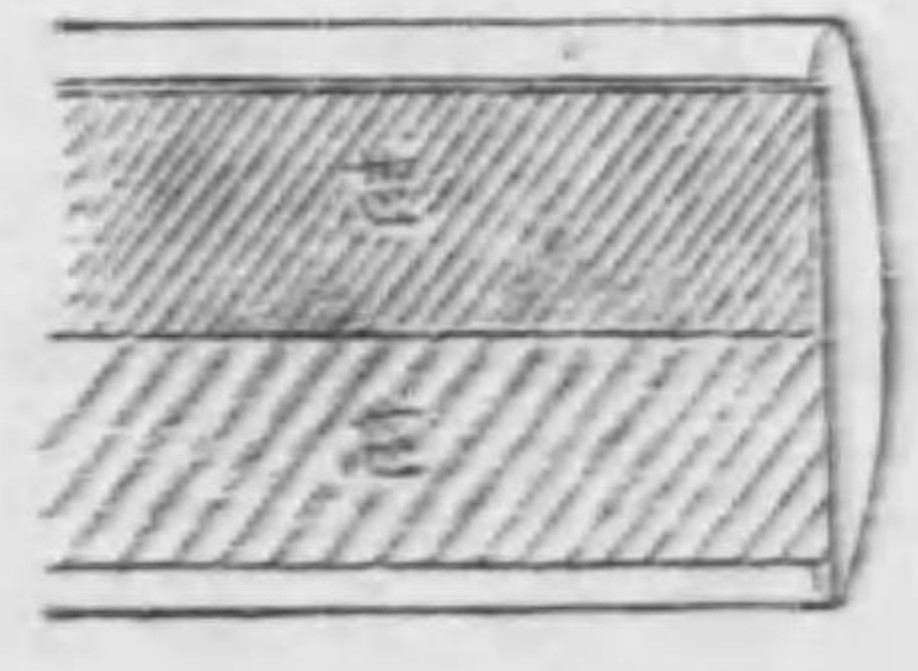
第二百四十二圖

二枚芯



第二百四十三圖

三枚芯



(二) 綴ち終つたならば、帯側と芯との間に、真綿を薄く敷く。

(ホ) 丈の両端を、布目の曲らぬやうに、半返して縫ひ、五厘きせを掛
けて折り、縫ひ込みが、表に引き返してから、緩まぬやうに、輪の
方で、幅を五厘位切り落して置き、表に返す。

(ハ) 両側の振れぬやうに、五寸おき位に、緯の布目を通して、両側の

- 縮け目に、待ち針をうち角で縫ひ代が重つて、厚い時は、角を三角に切り取り、丈と幅との縫ひ代が、額縁になる様にする。
- (ト) 絹布は、メリケン針の、長の八番、糸は中細、又は極細の絹糸、又は羽二重糸(極地薄のもの)を使い、小倉等の木綿物は、極細の木綿縫ひ糸を使い、縮け始めと、終りとは、角で一針小針に逆針を使い、木綿物は一分位、絹物は五厘か、二厘位の針目で縮け、山の内側の方を縮けて行く、縮け目には、被せの掛からぬやうに注意し、又縮けた針目が見えぬやうに、糸を引きしめて縮ける。
- (チ) 縮け終つたならば、絹布は全體に火熨斗を當て、よく抑へ附け、木綿ならば、其まゝ、適宜の長さに畳み、女帯と同様に壓しを置く。

(リ) 七つ又は五つに、梯子段畳みにし、美濃紙を、五分幅二本、七分幅一本切り、疊んだ丈の中央を、七分幅の紙で固く巻き、糊で止め

両端は、折り山から一寸入つて、五分の幅の紙を巻くこと、圖の通りである。

縫ひ仕立て

(イ) 地直しは、縮け仕立てに同じ。

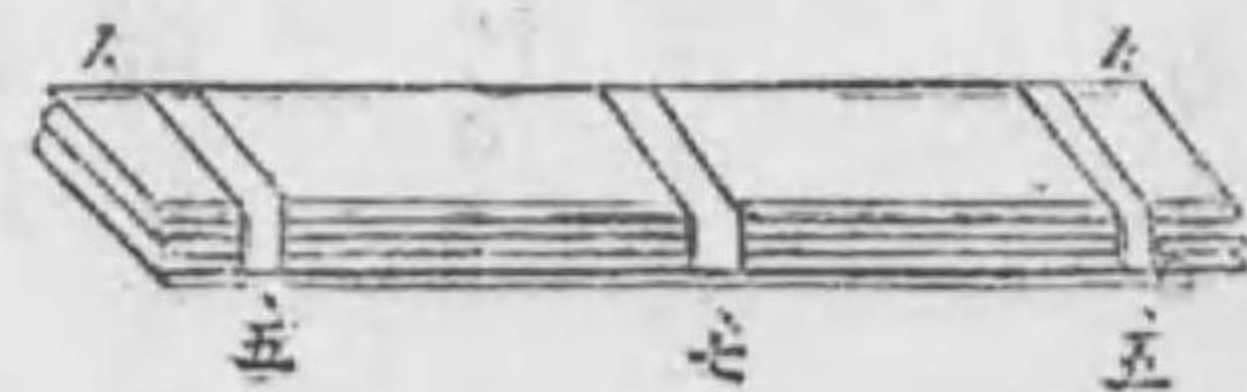
(ロ) 帯側を、中表に軽く二つに折り、布目を通して、兩側の耳を合せて、待ち針を打ち、麩けて綴ち置き

針目五厘位に縫ふ(厚地の時は半返し縫ひにする)丈の兩端から四寸縫ひ、それより四寸縫ひ残り、其他を全部縫ふ。

(ハ) 縫ひ目に平鋏を當て、縫ひ目を割り、表に引き返す。

(ニ) 芯の幅を、上り幅より五厘詰めて切り、丈の端に厚紙を圖のやうに裁つて縫ひ附け、厚紙の端に紐を附け、割つた縫ひ目に、芯

第二百四十四圖



の入るやうに、引き込み、帯側を引き張つて、帯側と芯との釣り合ひを直せる。

(ホ) 四寸縫ひ残した所から、丈の端を裏に引き出し、丈を半返しに縫ひ、五厘きせをかけて、折り返し、角の縫ひこみに、綴ちつけ、芯の釣り合ひを取つて、丈及び幅の縫ひ込みに綴ち付け、表に引き返し、四寸の所を、針目細かに締めて置く。

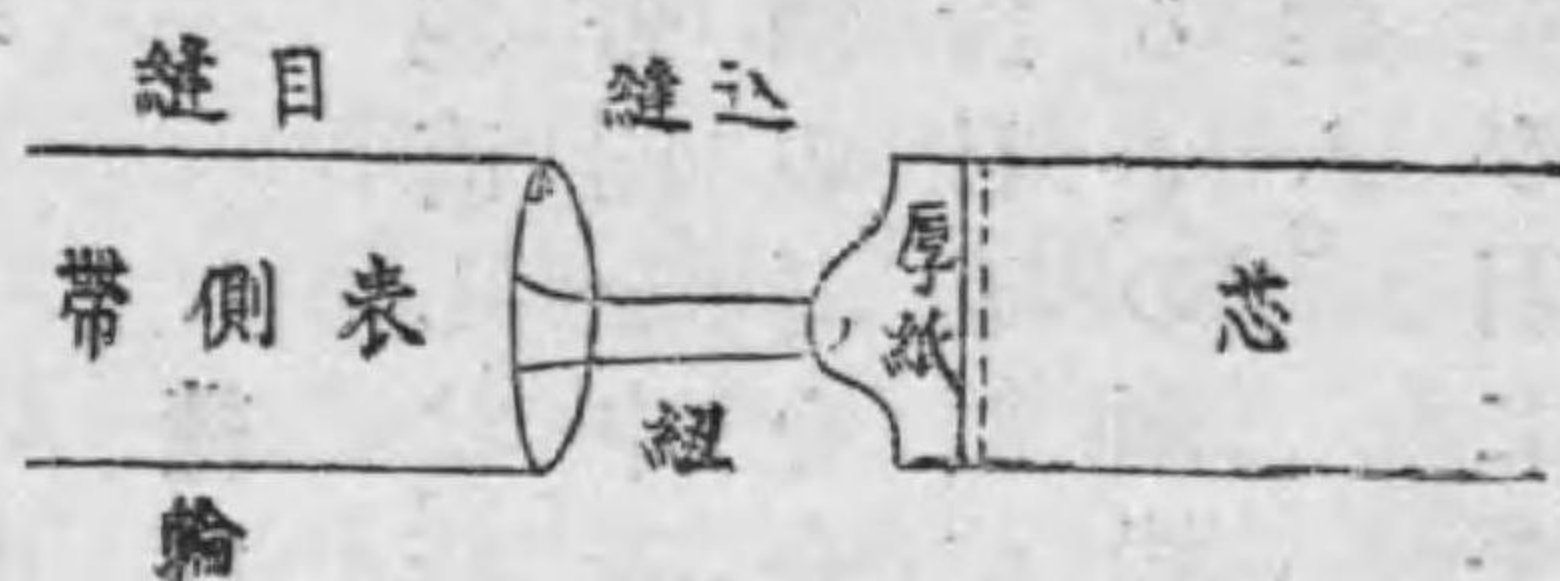
(ハ) 仕上げ方、封じ方は、締り仕立てに同じ。

夜着蒲團類

種類。

敷蒲團。普通、三布蒲團であるが、二布半にする事もある。

第二百四十五圖



掛蒲團。四布蒲團、五布蒲團、鏡蒲團等。

夜着。背入夜着、大夜着、中夜着、小夜着、袖無し夜着等。

搔卷。小夜着の襠のなきものを云ふ。

一つ身夜着。一つ身搔卷、又抱き夜着とも云ふ、嬰兒用である。

座蒲團。

夜着一揃とは、敷蒲團二枚、夜着一枚、掛蒲團一枚を云ふ。

蒲團側。地質、緞子、縮緬、羽二重、郡内、八端、銘仙、太織、八丈、繭紬、メリ

ンス、紡績、更紗、縞木綿、唐草木綿、二子織、紹麻、半麻等。

裏地。縮緬、羽二重、糸好、秩父絹、絹、甲斐絹、メリンス、金巾、新モス、瓦

斯、木綿等。

色。紺、縹色、萌黄、赤、白、桃色、其他何色にても、表に配合よき色を用

ひる。

半衿。本天、絹天、唐天、キヤリコ等。

肩當てⅡ縮緬、羽二重、メリンス、更紗、新モス等。
綿Ⅱ木綿、又は蒲團綿と稱し、質に、白綿と赤綿とがある、凡一枚の
目方は、七十匁より百匁になつて居る。

蒲 團

各種蒲團の上り寸法、及び積り方用布。

三布蒲團。上り丈、四尺八寸、積り方、丈の六倍。

用布 普通一反、丈を三つに切つて仕立てる(但し正物にて、掛
蒲團と裁ち合せにする時は、掛蒲團の方の残りを、敷蒲團の方
へ廻して、五尺か五尺一寸位の upper にする)。

四布蒲團。上り丈、五尺内外、積り方、丈の四倍(表裏とも)に各布の
縫ひ代を加へたもの。

五布蒲團。上り丈、五尺以上、積り方、表裏共丈の五倍に縫ひ代を

加へたもの。

鏡蒲團。上り丈、五尺以上、表、四布、裏、六布。

積り方。表用布は、上り丈から八寸(裏の折り返る分)を減じ、残
りの四倍に、各布の縫ひ代を加へたもの。

裏用布は、上り丈に八寸を加へて六倍し、これに表と同様縫ひ
代を加へる(裏が四寸表に返ることとしての積り方)。

綿の分量。掛け蒲團は一幅につき、二百五十匁より三百匁、敷蒲
團は五百匁より五百五十匁位。

一般の蒲團の仕立て方。

(1) 表裏とも、中表に丈を二つに折りて、丈の標を付け、幅を同じに
定め置きて、幅を縫ひ合せ、縫ひ目は皆同じ方に返し、五六分の
針目にして、隠し躰けをする(裏の中央は、四尺位縫ひ残して、上
になる方の縫ひ代一枚を折りて、躰けを掛けておく)。

(2) 表裏の幅を縫ひ合せて、表の方に折りを付け、隠し縫ひをする。
 (3) 表裏の丈を縫ひ合せ、これも表の方に折りを付け、隠し縫ひをする。

(4) 綿の入れ方。

表側の裏を上にして、平に伸ばし、其上に眞綿を引き、第一の綿を、布より丈幅ともに八寸位出し置き、次々にそれより二寸位づつ、詰めて、綿を平に重ね、最後の掛け綿として、二枚を残し置く。

布より綿の廣い分を、上に折り返し、角では額縁になる様に、綿を三角に切り取り、布の角までよく綿の行き届くやうに、綿の角を、布より三寸位、細く三角に突き出し置き、角を切りたる綿、其他の屑綿を、折り返したる内側の薄い所に當て、其上に、さきに残して置いた、掛け綿を平に載せ、其上に眞綿を引き、四つの

角及び幅丈ともに、四箇所位假に綴ちて置く。

(5) 四つの角を、大きく三角に表の方に折り返し、始めに幅を兩方から、眞中の方にたゞみ(巻く様にして)、次に丈の兩方を折り返し、裏の縮け残した所から表返し、手を入れて、角々の綿をよく入れ、丈を兩方から引き張つて、綿を平になし、表裏の縫ひ目を引き合せ置く。

(6) 縫ひ残した所を、針目細かに新け(新け方は、よく引き合せて、四五寸新けては、隠し縫ひをなし、又四五寸新けては、隠し縫ひといふ様に、幅をよく引き合せる)。

(7) 綴ち方。地質によりて、木綿、又は絹の萌黄の綴ち糸二本で、針目一寸位にして、表裏一束に綴ち、綿の厚みだけ、糸をゆるめて結び、其結んだ糸を、解けぬ様に、一寸位の長さに切つて置く。綴ちる箇所は、丈を五等分して、縫ひ目に四針づつ、綴ち、各布幅

の中央にては、縫ひ目を綴ちた針と、交互になる様に、五針づゝ綴ちる。

鏡蒲團の仕立て方。

標附け方。

(1) 表を中表にして、丈を二つに折り、山標及び丈の標を附ける。

(2) 表と同様、裏も丈を二つに折り、表より折り返しの二倍だけ長く、丈の標を附ける。

幅も、折り返しの四倍だけ、裏が廣くなる様に、表裏の幅を定め置く。

(3) 表布の幅を縫ひ合せ、一方に折りを返して、隠し躰けをかけ、裏は中央の幅の縫ひ目の所を、四尺程縫ひ残して、縫つた所には外の縫ひ目と同じに隠し躰けをする。

(4) 幅及び丈の標を合せて、表裏縫ひ合せる(幅を縫ひ合せる時、兩

端の丈の縫ひ代は縫ひ残す)。

(5) 角は、裏が表に返る分を、額縁になる様に斜に縫ふ(幅、及び丈の縫ひ目は、表の方に返し、額縁の所は、丈の方が上になる様に、折りを返して、隠し躰けを掛ける)。

(6) 綿の入れ方、綴ち方は、普通の蒲團に同じ。
座蒲團。

仕立て方の種類。丸形、鏡形、角形等。

仕立て上げ寸法。

小形。幅一尺三寸五分より、一尺四寸位、丈、一尺五寸より、一尺五寸五分位。

大形。幅、一尺五寸五分より、一尺六寸五分位。丈は、一尺七寸五分より、一尺八寸五分位。

用布。幅は、常幅、中幅、大幅等、丈は、丈の二倍を要する。

綿。二百五十匁より、五百匁位。
仕立て方。(角形)

中表に丈を二つに折り、三方を縫ふ、但し一方は兩方の角より、一寸五分位縫ひ合せ、他は縫ひ残し置く、表側の方に折りを返し、隠し躰か、又は躰けをかける、縫ひ残した所は、表の方の縫ひ代一枚に、躰けをかけておく。

(座蒲團として、模様が特に織り出されたり、染め出されたりしてあるものは、模様のかたよらぬ様に、寸法を定めて縫ふ)。綿の入れ方。

前記蒲團に同じ(但し中央を少し厚目に入れる)。表に返して、縫ひ残した所を、細かに新ける(新け方は前の蒲團に同じ)。

綴ち方は、同色、又は配合のよい色の、絹糸四本にて、中央に十文字

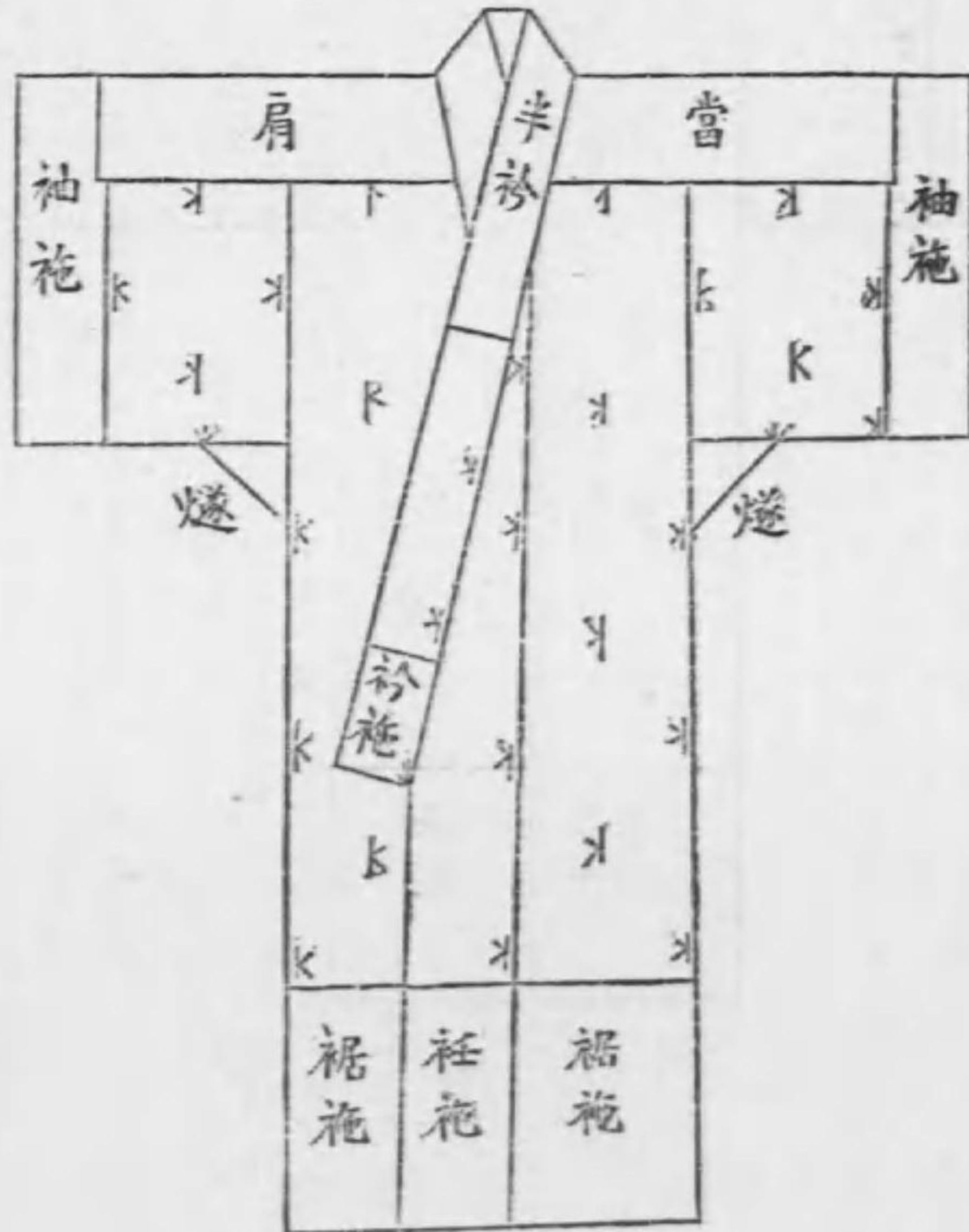
に綴ち、次に四つの角を綴ちる。

夜着

各部の名稱。

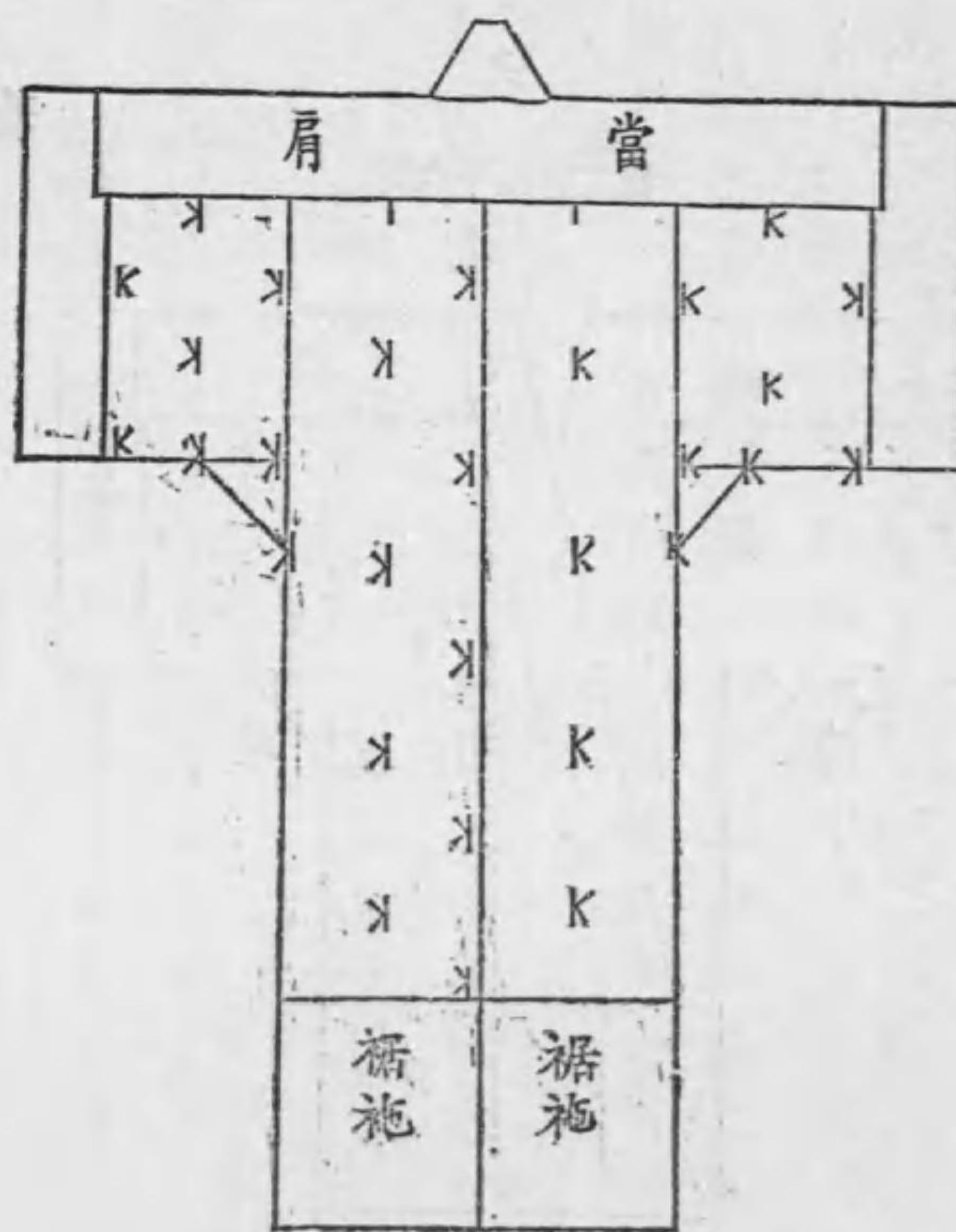
前

第二百四十六圖



各種、夜着、普通仕立上げ寸法表。

後
第二百四十七圖



大夜着。

| 各部名稱 | 種類 | 大夜着 | 中夜着 | 小夜着 | 掻卷 | 襦袍 |
|------|---------|--------|---------|---------|---------|---------|
| 袖丈 | 一七—一八 | 一五—一六 | 一四—一五 | 一四—一五 | 一四—一五 | 一四—一五 |
| 袖幅 | いつばい | いつばい | いつばい | いつばい | いつばい | いつばい |
| 裏袖幅 | 二布 | 二布 | 一布半 | 一布半 | 一布半 | 一布 |
| 身丈 | 五四—五五 | 五〇内外 | 四八内外 | 四五内外 | 四五内外 | 着丈より五長く |
| 裾施 | 一二・五内外 | 一〇・五内外 | 九・五内外 | 七内外 | 七内外 | ・五—・七 |
| 衿肩明 | 三 | 三 | 二・七—二・八 | 二・七—二・八 | 二・七—二・八 | ・二—・六 |
| 後幅 | いつばい | いつばい | いつばい | いつばい | いつばい | 八・五 |
| 前幅 | いつばい | いつばい | いつばい | いつばい | いつばい | 七・五 |
| 衿下幅 | 六—七 | 六—七 | 六—七 | 五・五内外 | 五・五内外 | 五・五内外 |
| 衿下幅 | いつばい | いつばい | いつばい | いつばい | いつばい | いつばい |
| 衿幅 | 二二—二三 | 二〇内外 | 一八・五内外 | 一七内外 | 一七内外 | 一七内外 |
| 半衿丈 | 三五—四〇 | 三五 | 三 | 二・五内外 | 二・五内外 | 一・六 |
| 肩當 | 三六—三七 | 三六—三七 | 三五 | 三五 | 三五 | 三五 |
| 綿の分量 | 二貫目と三貫目 | 一貫七八百目 | 三六—三七 | 一貫五六百目 | 一貫五六百目 | 青梅綿四袋 |

用布。表一反、裏二反、肩當て布、常幅にて三尺六七寸位。
半衿、七寸位の幅にて、三尺五寸位。

綿。二貫目。
裁ち方。

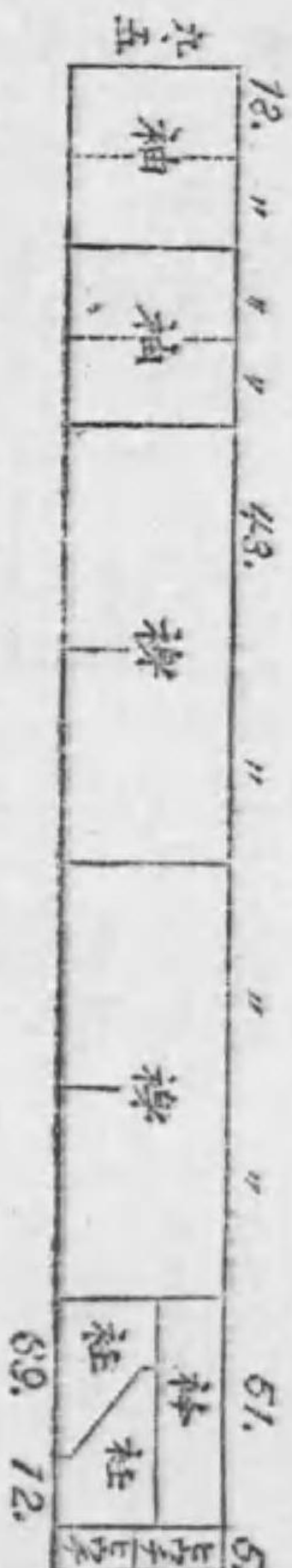
常幅三丈の両面物を以て、表の裁ち方。

所要寸法。袖丈、裁ち切り、一尺八寸 身丈上り、五尺五寸。

常幅の布を以つて、同裏の裁ち方。

所要寸法。上り身丈、五尺五寸(内表身丈裁ち切り、四尺三寸)。

第二百四十八圖

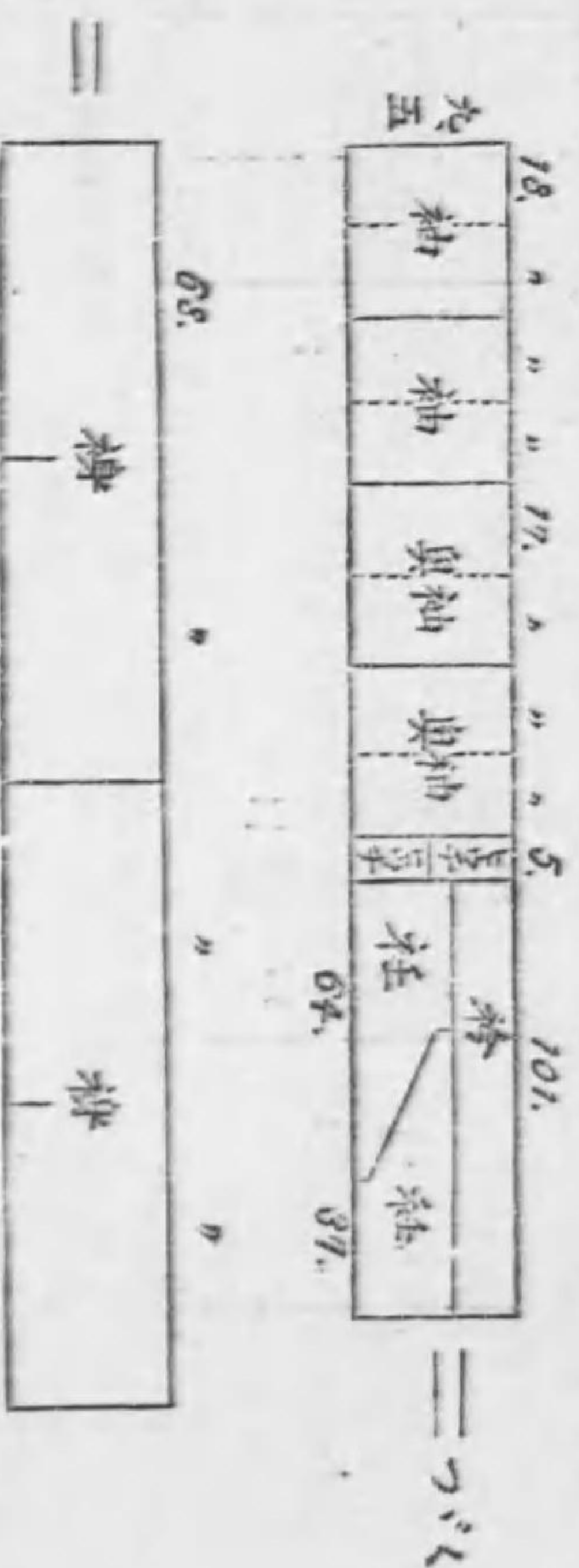


積り方公式 (總尺-(袖×4+衿下+縫布丈)+衿下)+5=身丈

身丈-衿下=衿丈 衿丈+衿下=衿衿地

同算式 {300-(18×4+12+5)+4)+5=43 42-4=39 39+12=51

第二百四十九圖



積り方公式 上り身丈-(表身丈-前縫代)=前縫 表袖丈-袖の厚み=奥布丈 表用布

+奥布×4+前縫×12=裏用丈 表身丈+前縫×2=裏身丈 表衿丈+前縫

×2=裏衿丈 表衿下+前縫×2=裏衿下

同算式 65-(43-5)=12.5 18-1=17 300+17×4+12.5×12=51.8 43+12.5

×2=68 30+12.5×2=64 12+12.5×2=37

肩當ての裁ち方。

肩 當 て 布
第 二 百 五 十 圖



後を一寸長くして
袖肩を襟に合せて切る

(1)裏表の熨布を中表に
三角に折る
第 二 百 五 十 一 圖



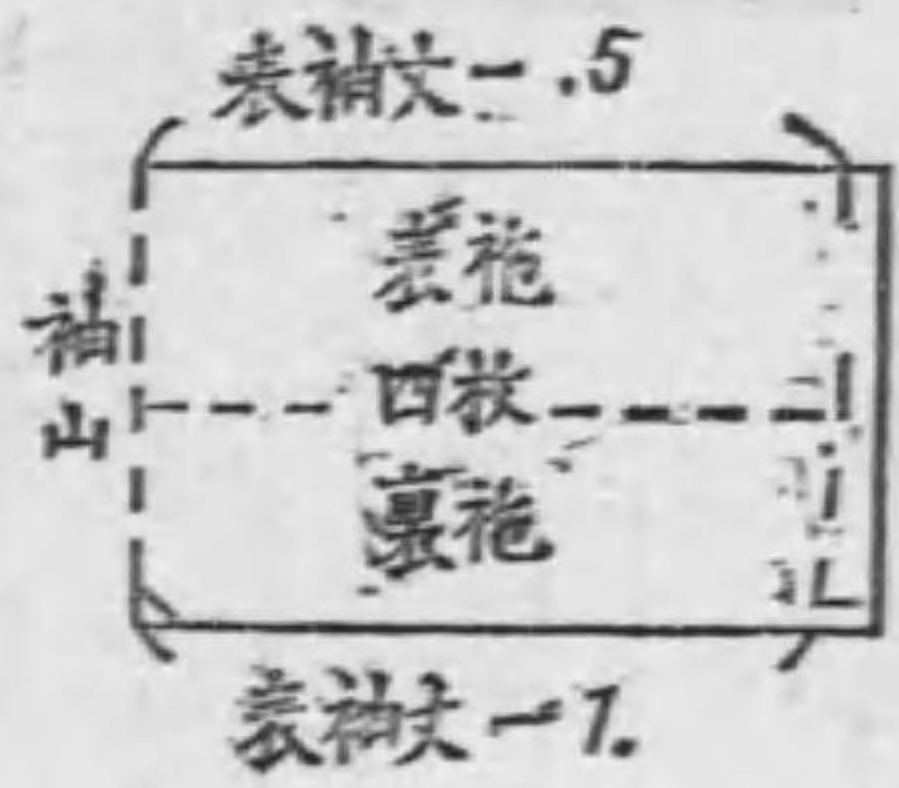
(2)表袖、中表に二枚重ねて
丈を二つに折る
第 二 百 五 十 二 圖



熨布の上寸法
袖丈上り寸法にを加へる

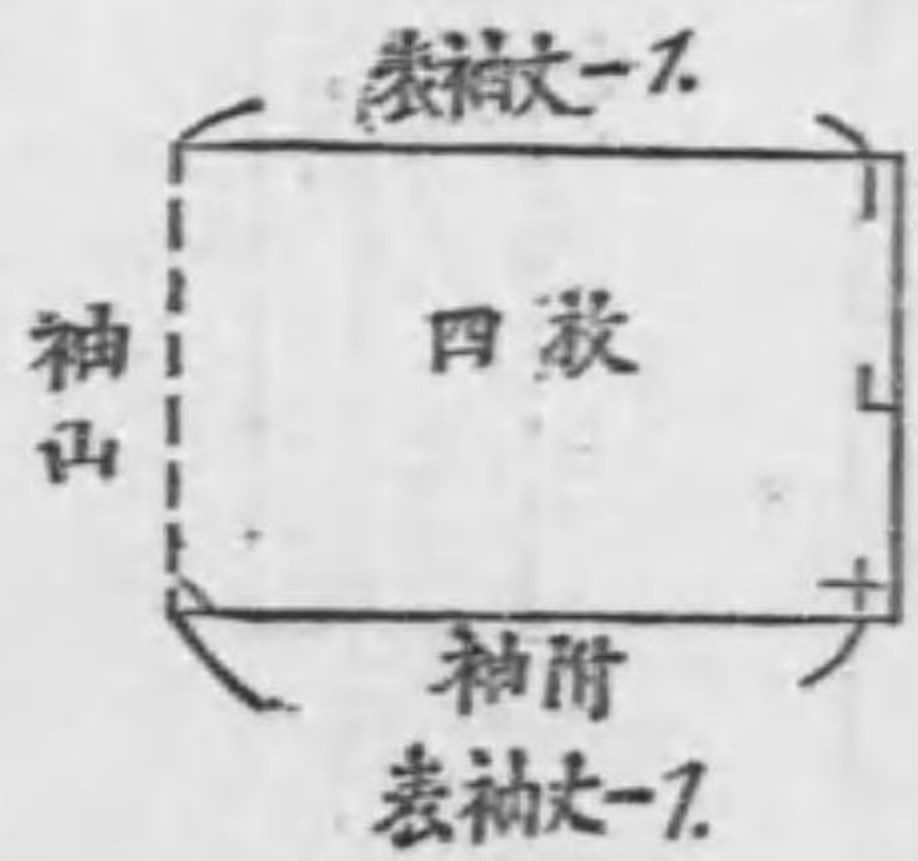
熨布の上寸法

(3)裏袖、表袖と同様二つに折る
第 二 百 五 十 三 圖



中央袖襷の折山

(4)奥袖、裏袖同様に二つに折る
第 二 百 五 十 四 圖



熨布上寸法

第 二 百 五 十 五 圖



(5)表襷
中表に二枚重ねて、丈を二つに
折る
(6)裏襷は、表襷より裾襷の二倍、丈
を長くし、袖附けは上り奥袖丈
と同じにする 他は表襷に同じ

(7)衿、重衿の上に、表衿を重ね、裾襷を折り返す
第 二 百 五 十 六 圖



(8)衿、裏衿に表衿を重ね、衿襷を折返す
第 二 百 五 十 七 圖



縫ひ方。

- (イ) 表袖と裏袖との袖口を縫ひ合せ、表袖の方に折りを付ける。
- (ロ) 表袖の後袖の方に、燧布(表)の丈の裁ち目の方を縫ひ付け、袖の方に折りを返す。
- (ハ) 前後の袖口の縫ひ目をよく合せて、表袖及び裏袖の袖下を縫ひ、袖口のきせ山では、一針返してとめ、燧布のとまりでも、同じく一針返してとめ、前袖に燧布の幅の裁ち目の方を縫ひ付ける。前袖の方に折りを付け、燧布のとまりでは、縫ひこみの引きつらぬ様に、くせをこる(右袖は表袖の方から、左袖は裏袖の方から縫ひ始める)。
- (ニ) 奥袖の後袖下に、燧布を縫ひ付け、表と同様に袖下を縫ひ、前袖の方へ折りを返す。
- (ホ) 表裨の背を縫ひ、後幅、肩幅の標を付け、脇を燧布の標まで縫ひ

前幅の標を付け、背脇とも、着物と同様に折りを付け、脇の縫ひこみ(後)を、袖付けの方の引きつらぬ様に、折り返す事も、着物と同様。

- (ヘ) 裏裨の縫ひ方表に同じ。
- (ト) 表裏の裾を縫ひ合せ、表の方に折りを返す。
- (チ) 衿の裾を表裏合せて縫ひ、表の方に折りを返し、裨に合せて針をうち、表裏續けて縫ひ付け(裾の縫ひ目をよく合せる)、衿の方に折りを返す。
- (リ) 衿下を、裏表縫ひ合せ、表の方に折りを返す。
- (ヌ) 表裏の衿の丈標を合せて縫ひ、表衿の方に折りを返し、表裏續けて裾に縫ひ付け、衿下止まりでは、よく糸どめをなし、衿の方に折りを返す。
- (ル) 衿幅を定め、衿先より五六寸位の間、表裏縫ひ合せる、此時、裏衿

の幅は、表より一分五厘控へて、衿先の裏で襖形になる様に縫ひ、折りは裏衿の方に返す。

(チ) 表袖及び表燧布を、着物の袖付けと同様に、表襖に縫ひ付け、燧布の止まりでは、よく糸留めをなし、袖及び燧布の方に折り返す。

(ワ) 奥袖及び裏の燧布を、表と同様に裏襖に縫ひ付け、折りは表と反対に、襖の方に返し、裏の方を出して疊み置く。

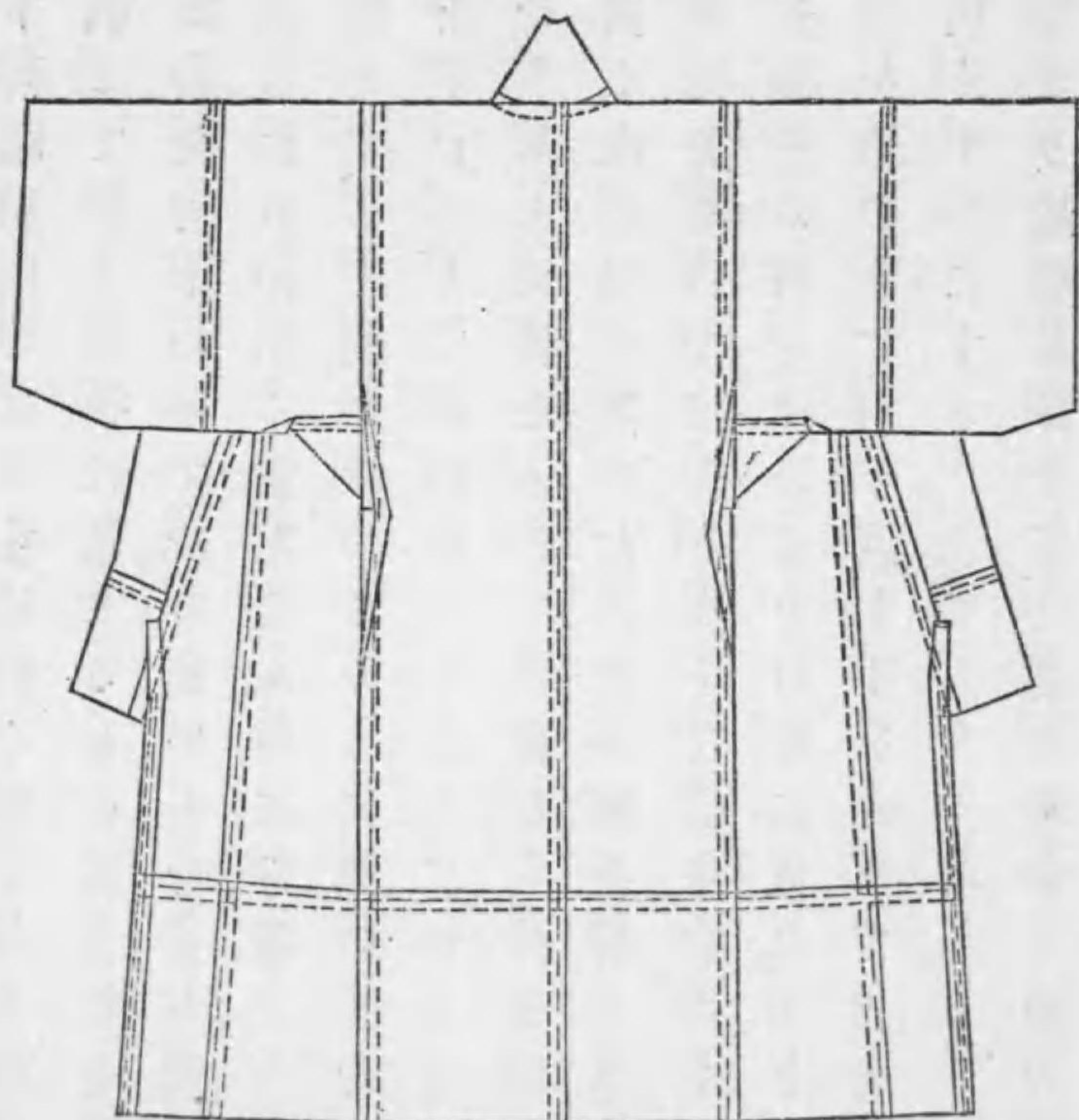
注意 縫ひ目は全部隠し、羨けをする。

綿の入れ方(蒲團と同様に真綿を引く)。

(イ) 表襖の後ろを上にして平にひろげ、前襖も腰より下を、出来るだけ平になる様に、ひろげて置き、裏襖の上の方は、腰の邊より下へ、折り返して置く。

表襖の裏を平に置きたる圖

第二百五十八圖



(ロ) 綿が二十五枚

なれば、その約三分の一の八枚は兩袖へ、残りの十七枚は襖へ入れる割合ひにする。此場合ひは、凡全體に五重はい

(ハ) 第一の綿を、布より裾口で一尺三寸位長く

- 衿下衿幅肩山では、五寸位長く置き、次々に一寸五分位づつ、短く載せて行く、最後に載せる襷の綿二枚を残し置く。
- (ニ) 裾山衿先衿下の所で、綿の長い分を折り返し、襷先衿先では、折り返したのが、厚く重ならぬ爲に、額縁になる様に切り取り、布の角まで、よく綿のはいるやうに、綿の角を細くつきだして置き、衿下止まりでは、綿の折り返しに、切り込みを入れ、薄い所には、切り落した綿を入れて平になし、衿先の出来上りの形に作り置く、次に残し置いた二枚の綿を、折り返した上に平に載せ、襷先衿先裾口では、綿と布とを假りに綴ちて置く。
- (ホ) 衿先襷先の角を、はいるだけの中に入れ置き、腰より下の方だけ、裏襷を綿の上に引き返し、手を入れて衿先襷先に、よく綿の行き届くやうにする。
- (ヘ) 袖下より燧布に添うて、普通の着物の時の様に、前襷の綿に切

- り込みを入れ、襷の綿と、同じ厚さになる様に、袖に綿を置く、袖口では、裾山より、五寸位綿を長く置き、裾山から長い分を折り返し、其上から一枚掛け綿を平に置き、次に裏襷の上部、及び裏袖を綿の上に載せる。
- (ト) 奥袖口と、裏袖口とを縫ひ合せ、折りは奥袖の方に返し、隠し縫いをかけ置き、次に袖山、及び肩山の綿を、前襷に折り返し、前袖の襷を作り、前襷の綿のたらぬ所に平に補ひ、衿の綿を出来上りの通りに作り置く。
- (チ) 下前の方は、裾口を向うにして、表の前襷の方から、右手を入れ袖口を持ち、左の手で、表の前襷を持つて、引き返す(上前はその反対になる)、左右を入れ終つたならば、表裏の縫ひ目を、よく引き張つて、合せて置く。
- (リ) よく引き合せたならば、表衿で綿を包み、裏衿を其上に、一分五

厘控へて載せ、綿を抄はぬ様に、蒲團と同様に紵ける。

(又) 綴ち方は、蒲團と同じく、布によつて、木綿或は絹の綴ち糸を、二本又は四本にして、針目を一寸位にして、表裏一束に綴ち、綿の厚みだけに、糸を弛めて結び、結んだ糸のさけぬ様に、一寸位の長さに切つて置く。

(ル) 綴ちる箇所。

- (1) 背の縫ひ目に五針。
- (2) 衿附けの縫ひ目で、衿肩明きの止まりと、背の縫ひ目と都合三針、其より下、衿先止まりまでに五針。
- (3) 脇の縫ひ目に三針。
- (4) 袖口の縫ひ目で、袖山と袖下の縫ひ目に跨らせて、各一針づゝ、袖の丈の中央にて、前後とも一針。
- (5) 袖附けの縫ひ目でも同様。

(6) 袖幅の中央に、二針づゝ。

(7) 衿附けの縫ひ目で、剣先から五分下つて、左右に各一針、それより裾口までに四針。

(8) 前幅、後幅の中央は、縫ひ目の綴ちと交互になる様に綴ちる。

(9) 肩山の綴ちは、前後に跨らせる。

以上の綴ちの内、衿先止まりと、燧布の袖下、及び脇止まり等の針目は、十文字に、縫ひ目に跨らせて綴ちる。

(10) 襖には、綴ちをせぬ。

(11) 絹物には、布を損じる虞れがあるから、袖幅後幅前幅の中央は、綴ちず、縫ひ目のみに綴ちをする。

(チ) 肩當ての丈を、表術丈より、左右各々三分位長くして、両端の裁ち目を裏に折りて、伏せ縫ひをなし、裨の三つ衿に、肩當ての衿肩を、三分重ねて綴ち附け置き、幅の兩端を折つて、綿を抄はぬ

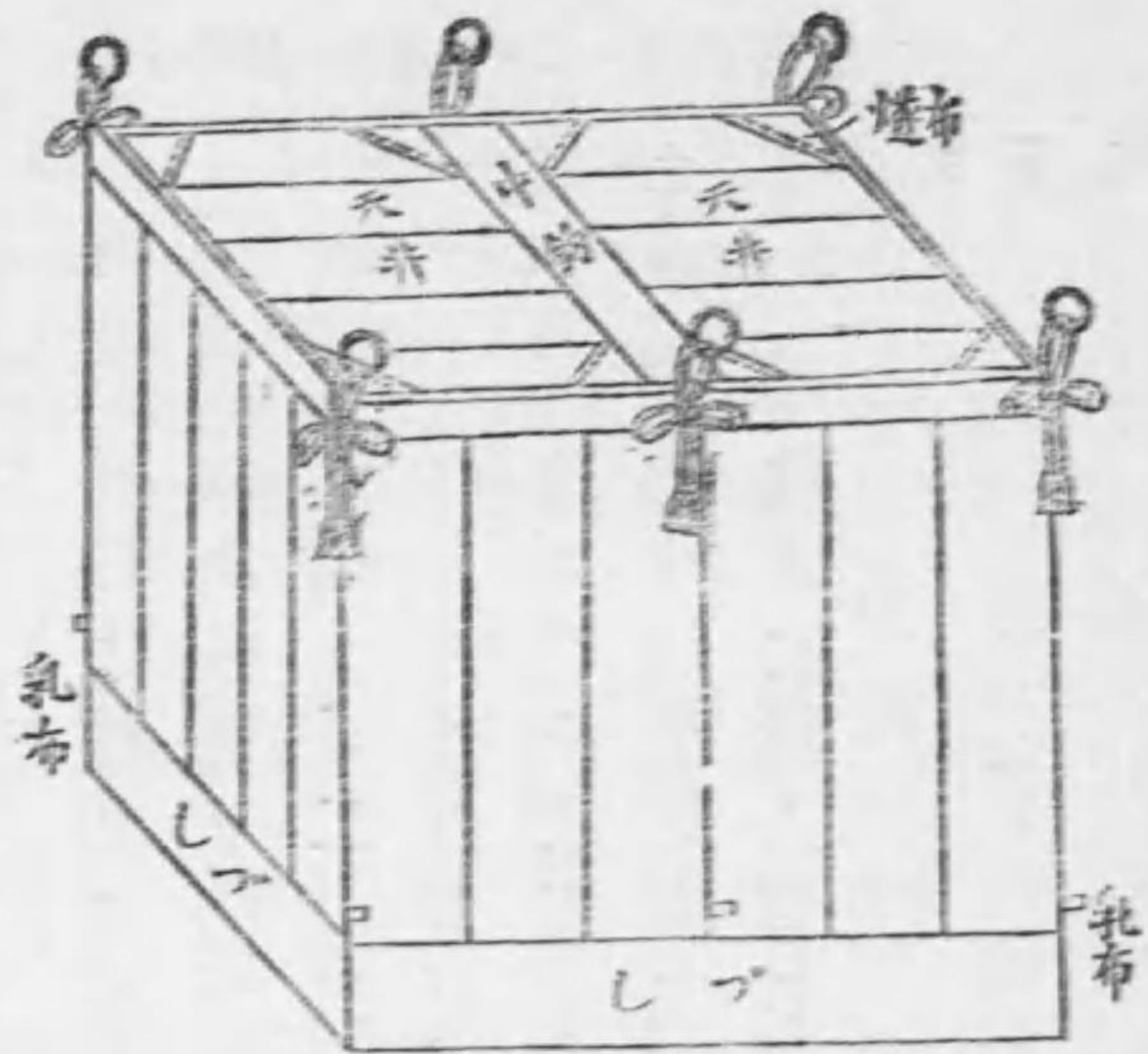
様にして裨に綴ち附ける。
 半衿の、丈の裁ち目を裏に折り返して、伏せ縫ひをなし、半衿丈の中央と、背の縫ひ目とを合せて、表衿に重ね、着物の共衿と同様に、して、表裏とも、紵け附ける(但し丈の両端は、紵け附けず、輪のまゝにして置く)。

蚊帳

種類。普通の蚊帳、母衣蚊帳、枕蚊帳等。
 地質。麻織、半麻織、木綿織、透綾、絹、紗等。色は白、萌黄、浅黄等。
 縁布。麻、半麻、木綿、金巾、縮緬、緞子等。色は紅、白、桃色、浅黄等。

出来上り(五六の蚊帳)

第二百五十九圖



五六の蚊帳。
 裁ち方積り方。

蚊帳

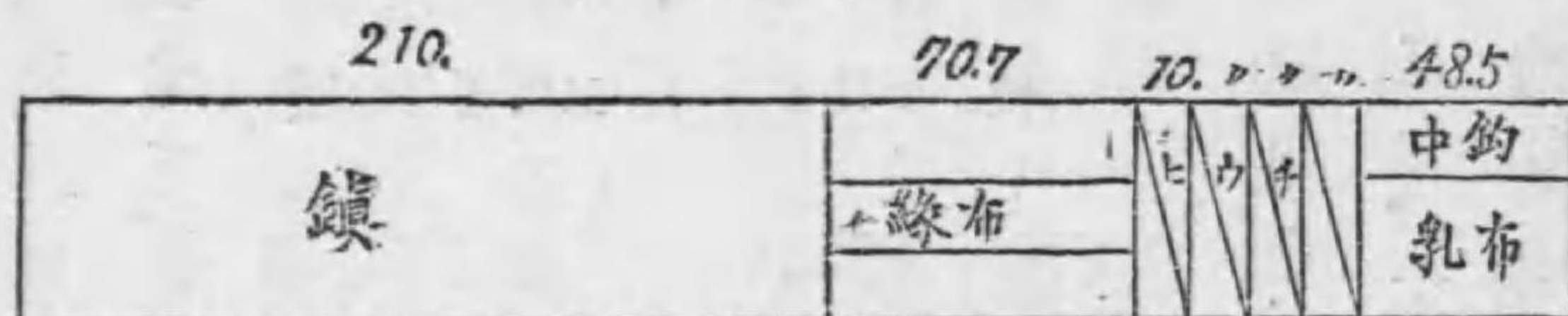
普通の蚊帳。
 室に應じたる蚊帳の大きさの表。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|----|---|-------------------|
| 十 | 八 | 八 | 六 | 六 | 四 | 三 | 室の大きさ |
| 疊 | 疊 | 疊 | 疊 | 疊 | 疊半 | 疊 | 蚊帳の布數 |
| 十 | 八 | 七 | 七 | 六 | 六 | 五 | 蚊帳の丈 |
| 十 | 十 | 十 | 八 | 八 | 七 | 六 | 普通 五尺より 六尺位 |

二四九

裁ち方

第二百六十圖



乳布 裁切寸法、丈2.5 幅2.5六枚
 附属品 釣手の打紐(萌黄色の木綿又は、絹糸製)丈21位のもの
 六本、打紐の先に通す、金環直徑1.2位のもの六個

縫ひ方。
 總べて、串縫ひになさず、布を平らにして、刺し縫ひにする、針目は、一分五厘位。
 (イ) 廻りの、布の幅を、總べて縫ひ合せ、折りは背縫ひと同じに返す。
 この時四隅になる縫ひ目と、中釣りのつく前布の中央の縫ひ目とに、裾口から一寸五分位上つた所に、乳布の幅を紐の様に折り、丈を二つに折り、縫ひ目に挟み、半返しにして縫ひつける。
 (ロ) 天井の布を全部縫ひ合せ、折りは一方に返す。
 ハ) 中釣りの上り幅を定め置き、天井の布の

蚊帳

積り方公式 裁切丈×{(横布数+前布数)+2}=廻りの用布
 (布幅-縫代×2)×前布数×横布数=天井の用布
 廻りの用布+天井の用布=總用布

同算式 $50 \times \{(5+6) \times 2\} = 1100$
 $(10 - .25 \times 2) \times 6 \times 5 = 285$ $1100 + 285 = 1385$

所要裁ち切り寸法。
 裁ち方。五尺。
 用布は廻りの布の裁ち切り丈五尺のもの二十二枚と、天井の布の、裁ち切り丈五尺のもの五枚とに裁ち切る。

鏡、縁布、中釣、燧布積り方公式

(布幅-縫代×2)×{(前布数+横布数)×2}+接代=鏡用布
 (布幅-縫代×2)×總布数÷3+接代=縁布裁切丈
 (布幅-縫代×2)×前布数+縫代=中釣丈
 鏡+中釣丈+縁布丈+燧×4=總用布

同算式

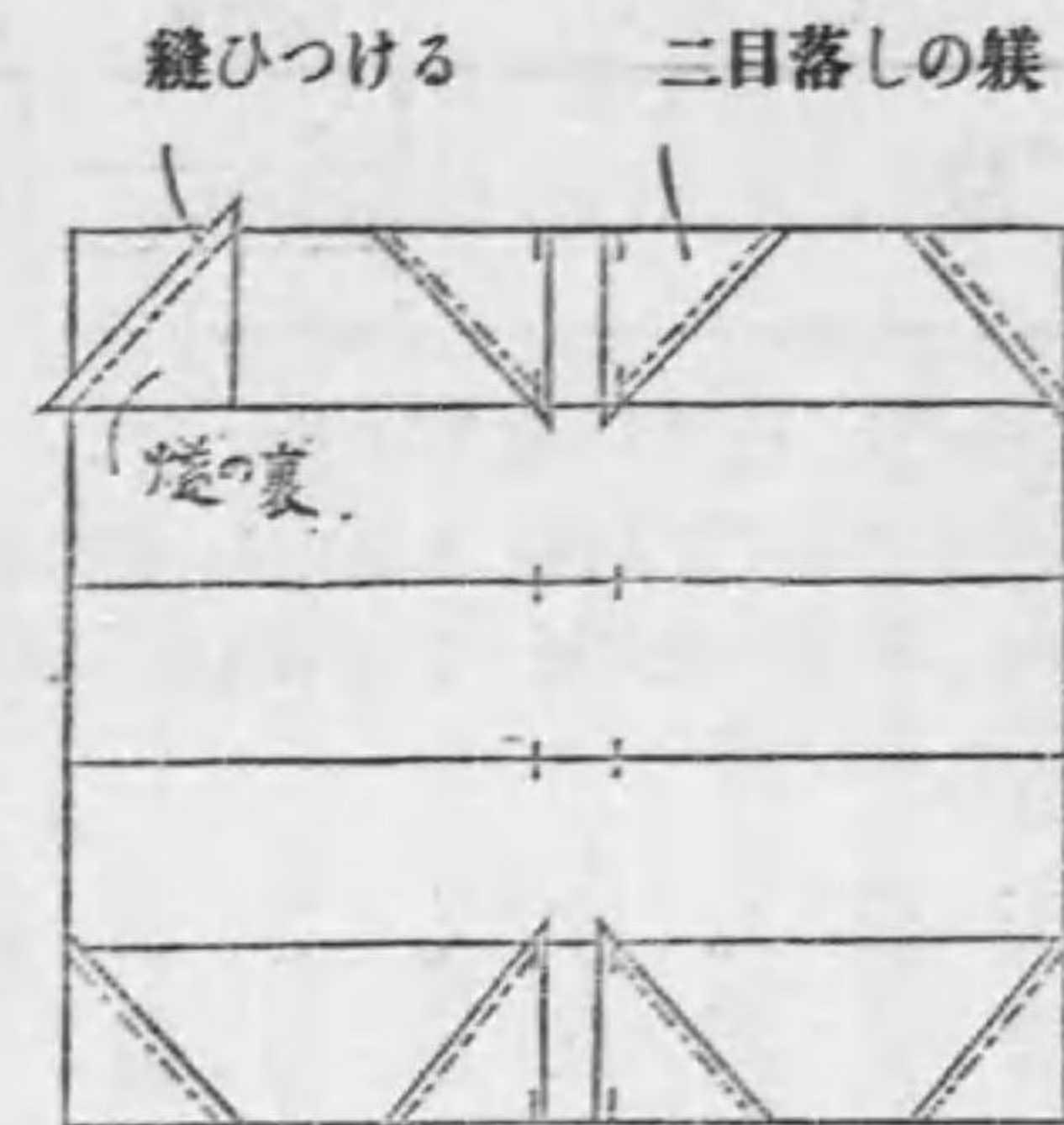
$(10 - .25 \times 2) \times \{(6+5) \times 2\} + 1 = 210$
 $(10 - .25 \times 2) \times 22 \div 3 + 1 = 70.7$
 $(10 - .25 \times 2) \times 5 + 1 = 48.5$
 $210 + 70.7 + 48.5 + 10 \times 4 = 369.2$

渡邊裁縫新書

丈を二つに折り、天井の四隅と、中釣りの附く四隅とに、燧布を載せて、縫ひ標をする。

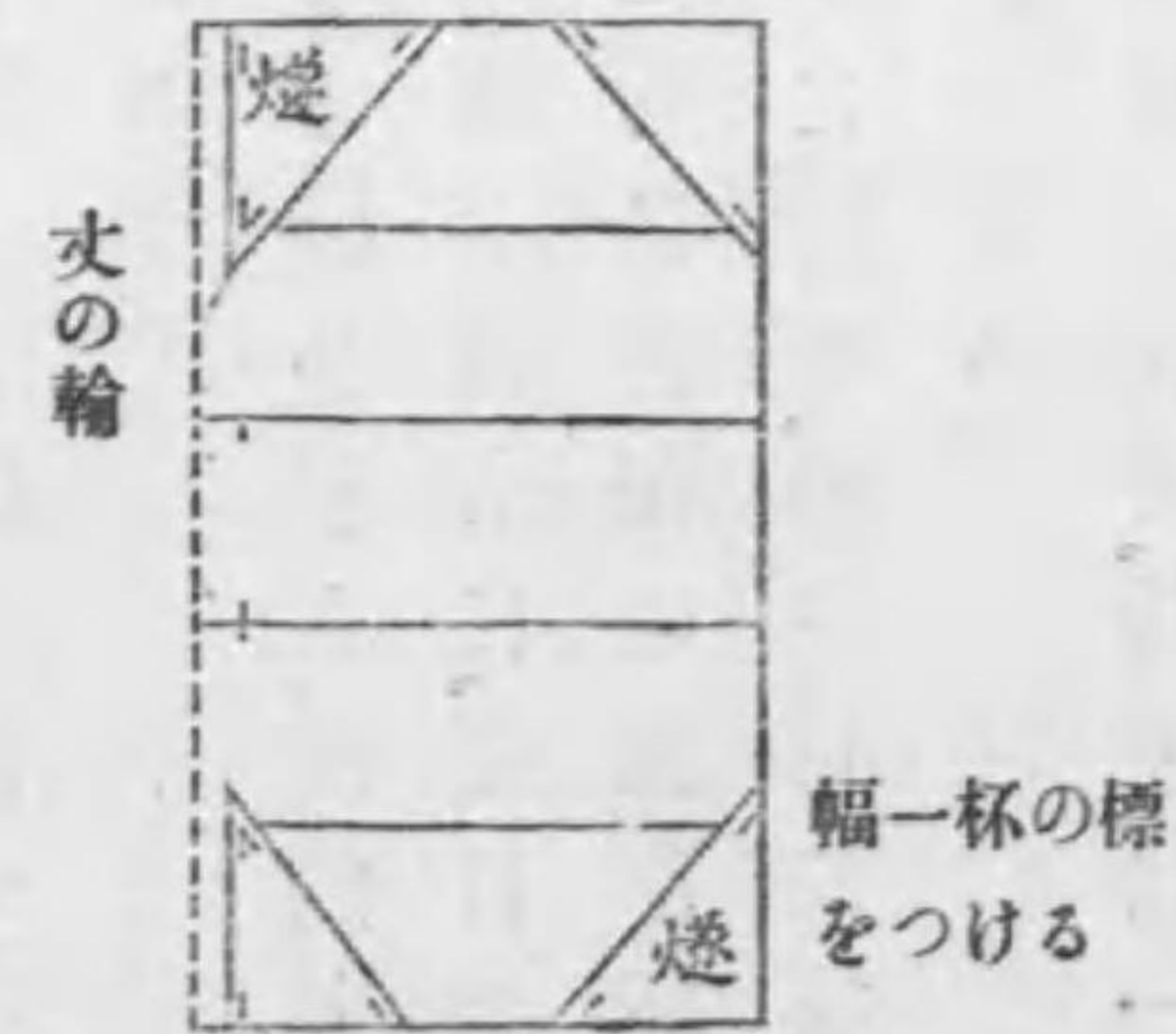
燧を縫ひ附ける圖

第二百六十一圖



中釣り幅標

天井の布を二つ折りになし燧の標をつける圖 第二百六十二圖



の一の二分の上り幅の中釣りの

- (二) 圖の如く、燧を天井の布に縫ひつけ、表に折り返し、白の絹糸二本にて、二目落しの箕けを掛ける。
- (ホ) 中釣りの布を天井の標に合せ、幅の一方を縫ひつけ、表に返し

一方の幅の拵け代を折つて、天井の布に拵け附け、幅の兩端に、二目落しの箕けを掛ける事、燧布に同じ。

(へ) 天井の布と、廻りの布とを、表に縫ひ目を出して、縫ひ附ける。

(ト) 縁布の丈を接ぎ合せ、天井の方に當て、縫ひ附け、四隅には、三分位の襷を縁布に取つて、額縁になる様にする。

(チ) 麻糸を直径三分位に二本より合せ、天井と廻り布とを縫ひ合

せた縫ひ代の端に置き、針目一寸五分位に、巻き縫ひにして縫

ち附けて置く。

(リ) 縁布の幅を、二寸三分に定めて、裁ち目を折り、廻りの布の上に

置き、天井の布まで針を通して拵け附ける(但し四隅及び中釣

りの燧布の所は、燧布には針をかけず、天井布だけを抄ひて拵

ける)。

(ヌ) 裾口に鎮布を合せ、裁ち目を揃へず、鎮を三分控へて縫ひつけ

- る、鎮布の丈の縫ひ目は、隅になる様にする。
 折りは、鎮布の方に返し、廻りの布の端を、三分折り返して、鎮布に紵け附ける(鎮布は附けなくも宜い)。
 (ル) 釣手の打ち紐を、上部の輪に金環を通して、揚げ巻に結ぶ。
 其寸法は、上部の輪を三寸五分位の長さにし、左右の輪は一寸五分から二寸位にし、下部の長さを二寸位にして結ぶ、上等の者には、下部に房を附ける。
 (チ) 四隅と、中釣りの幅の中央とに、紅白の絹糸二本にして、揚げ巻の結び目を、燧布に千鳥掛けにして綴ら附ける。
 (ワ) 附言 普通の釣り手は、揚げ巻に結ばず、丈一尺位の打紐を丈二つに折り、金環を通し、是れを四隅と、中釣りの所に、縁布の山に穴を開けて通し、縁布の表に縫ひつけ、縁布の表に、紅白の絹糸二本にて筒單に飾り縫ひをする。

足袋

足袋を仕立てるには、従來文尺を用ひた故に、其大きさを何文と呼ぶ、一文は鯨尺にて六分四厘に當る。
 大きさは、五文より十一文位まである。
 仕立て方の種類。 袷、單。
 用布及び色相。

表。 キヤリコ(白、紺)、木綿(白、紺)、紺緋、毛繻子(黒)、羽二重(白、黒)、セル、ラシヤ、コールテン(紺)、別珍(赤、紺、緑、青、焦茶等)。セル以下の地質は防寒と堅牢のためとに用ひられる。
 裏。 晒木綿、白紋羽、白綿ネル、淺黄木綿等。
 底。 雲齋織、石底等。
 足袋の裁縫に、特に必要な器具。

いせ板、いせ櫛、竹篋、足袋形、植。

寸法の度り方。

足の底を、親指の先から踵までと、甲の高さとを度る。
型紙の裁ち方。

(1) 底の裁ち方。足の底の丈を、六寸四分(十文)とし、六寸四分の外に爪先と踵との縫ひ代を、各々一分五厘加へて、丈の裁ち切り寸法とし、幅は丈の十分の四、細いのを好むものは、十分の三半に取り、それに兩脇の縫ひ代を各々一分五厘と、外に五厘の餘裕とを加へて、裁ち切り寸法とし、長方形を描き、丈の方を六等分し、幅を三等分して線を引き、圖の様に型を描いて裁つ。

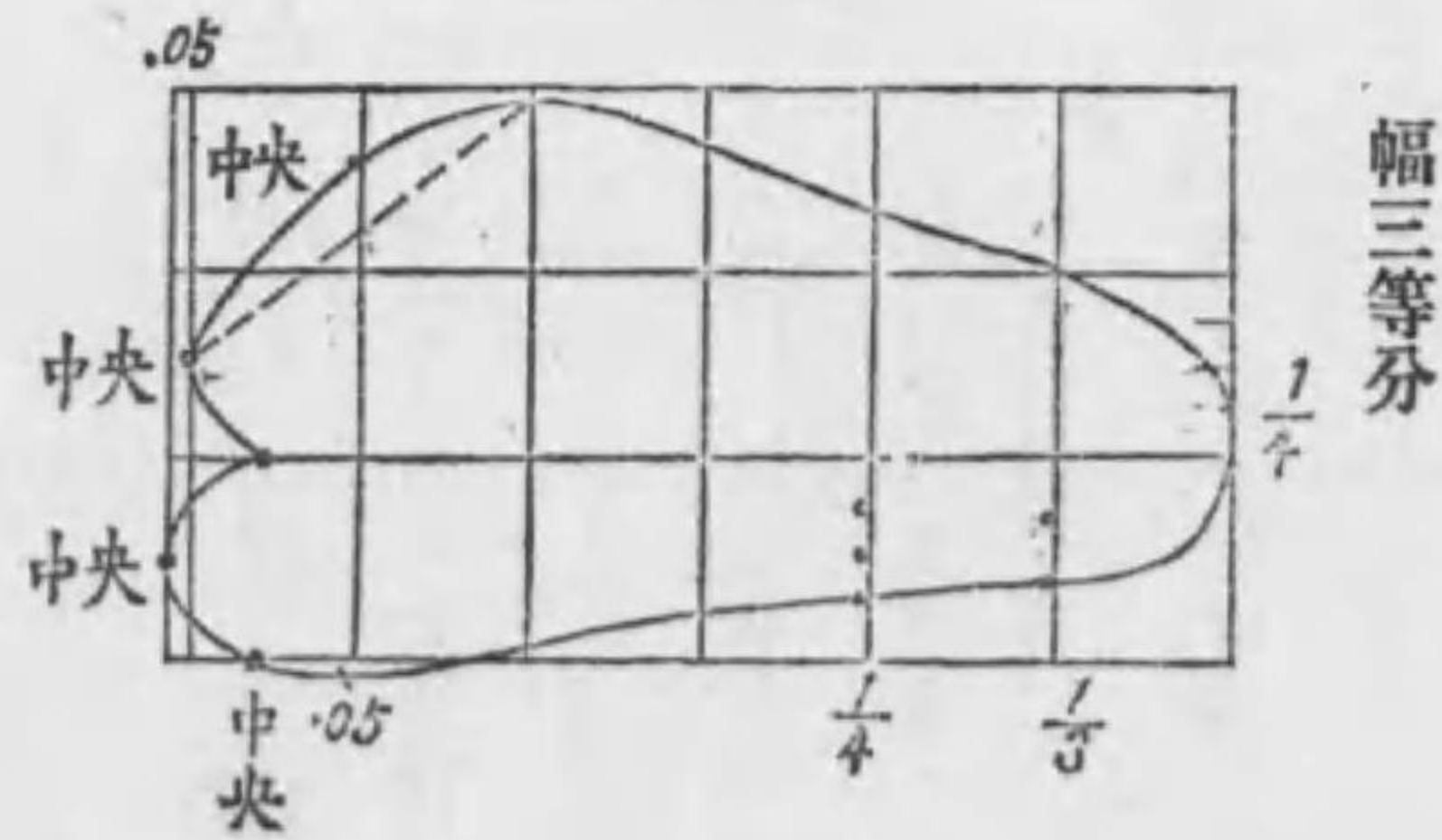
(2) 内甲の裁ち方(一つとも云ふ)。丈は六寸四分(十文)に、六分四厘(一文)と、爪先と踵との縫ひ代を、各一分五厘づゝと、ゆるみ五厘を加へ、丈の裁ち切り寸法とし、幅即深さは、六寸四分の二分

の一とし、長方形を描き、圖の様に、丈の方は爪先でゆるみ五厘を取り、残りを五等分し、幅の方は、底の方で、幅の七分の一を取り、残りを三等分して、型を描いて裁つ。

(3) 外甲の裁ち方(四つとも云ふ)。丈は内甲と同じく、深さは丈の六寸四分の五分の三にし、同じく長方形を描き、丈の方は、爪先のゆるみ五厘を取り、残りを五等分し、幅は四等分して圖の様な型を描いて裁つ。

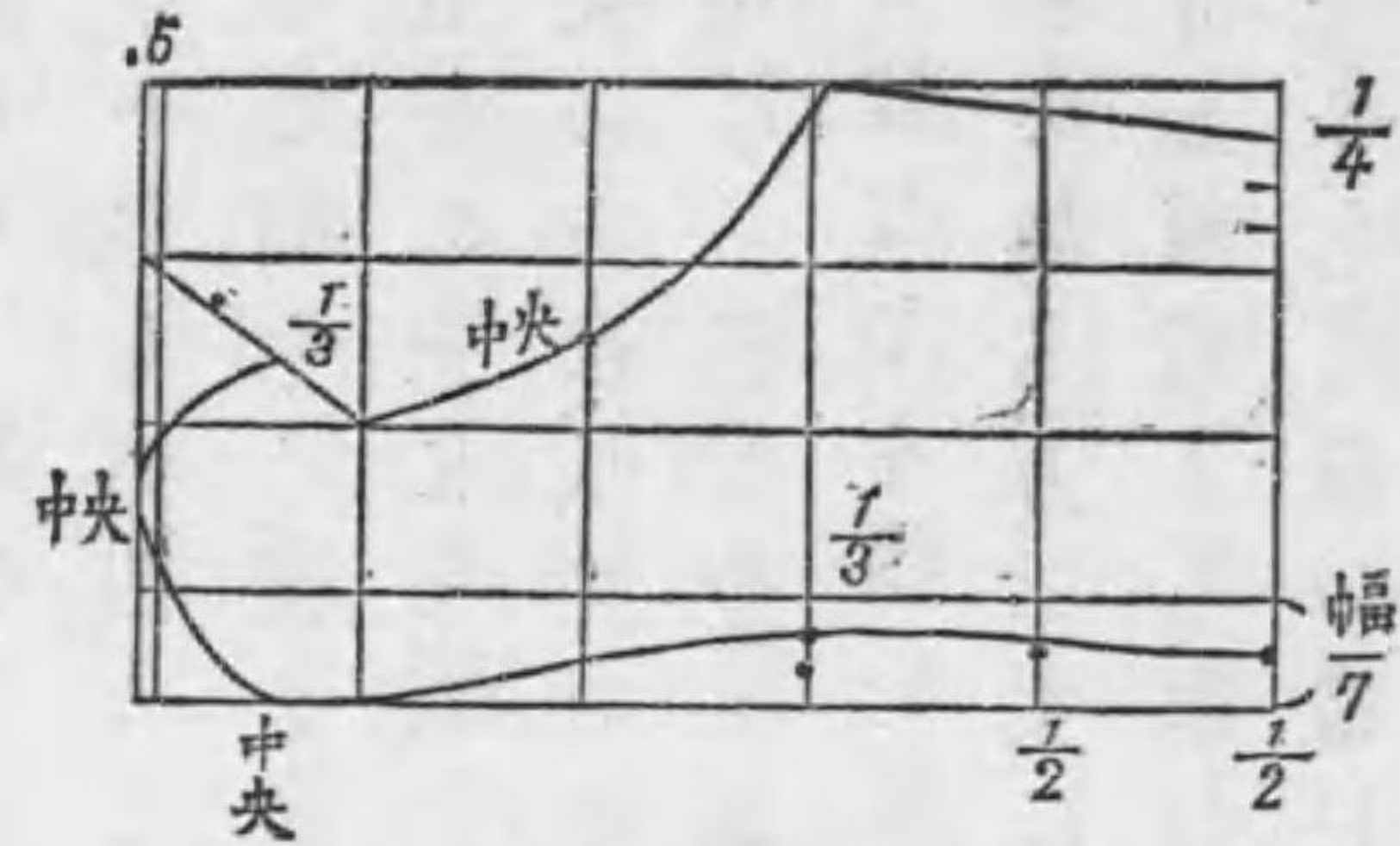
(4) 袴布の裁ち方。丈は、甲の深さより一分五厘短くし、幅は甲の丈の五分の一として圖の様に裁つ。

第二百六十三圖
底の裁ち方
丈六等分

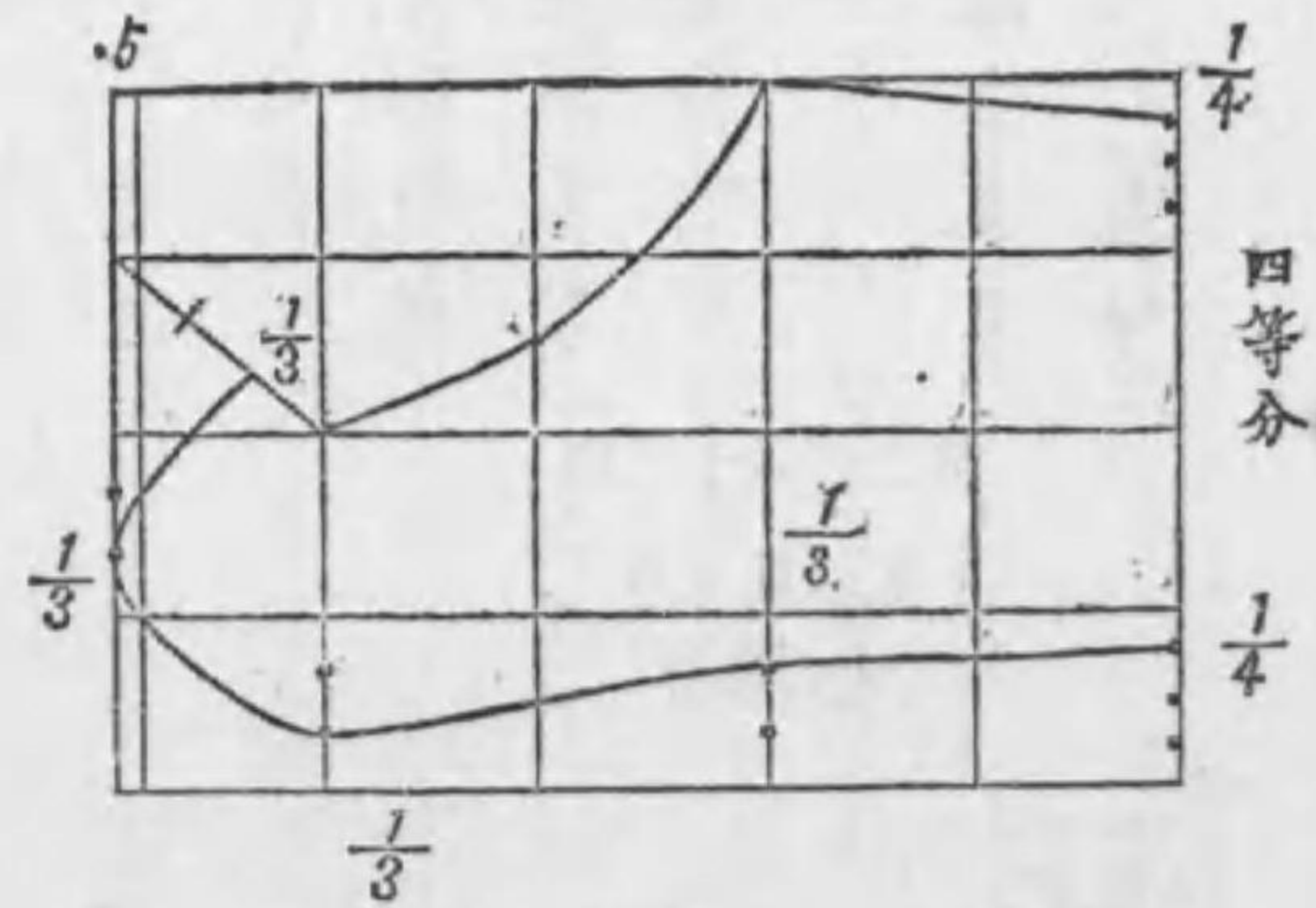


裁ち方。

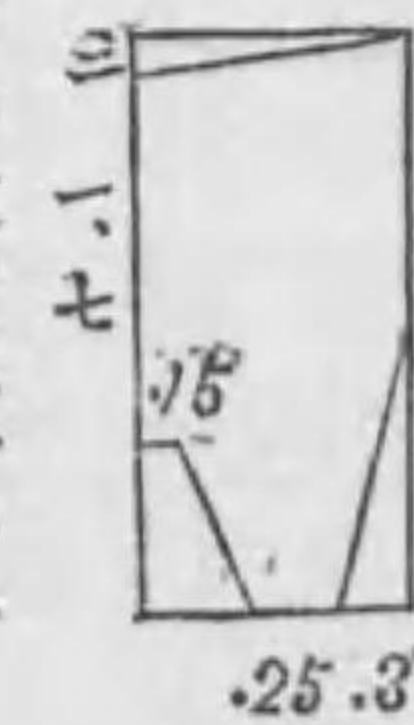
第二百六十四圖
内甲の裁ち方
丈五等分



第二百六十五圖
外甲の裁ち方
丈五等分



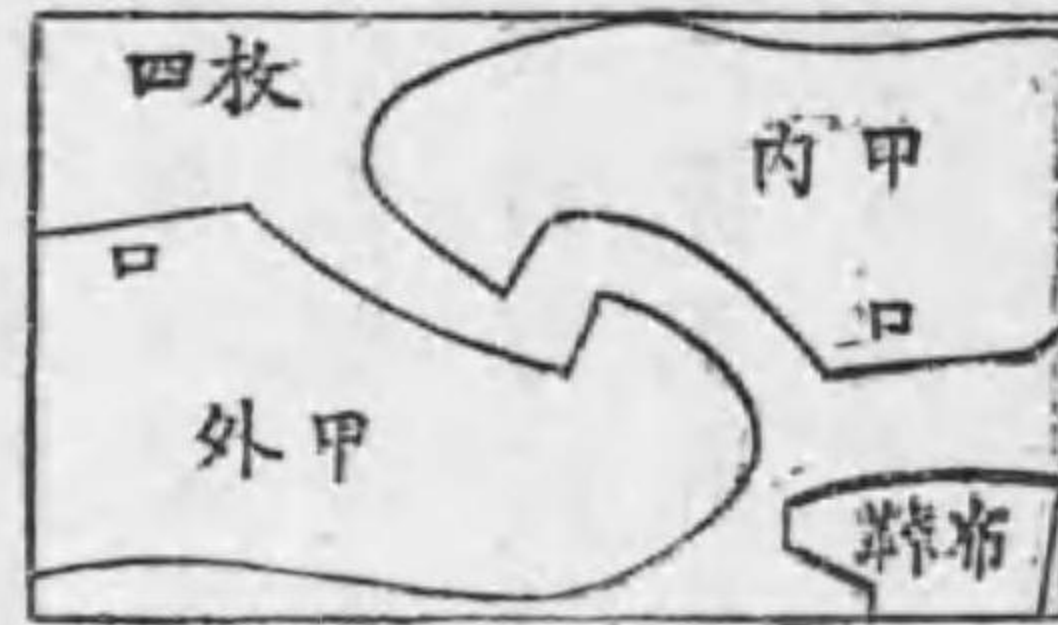
第二百六十六圖
甲の丈の五分の一
鞆布の裁ち方



短く
深さより一分五厘

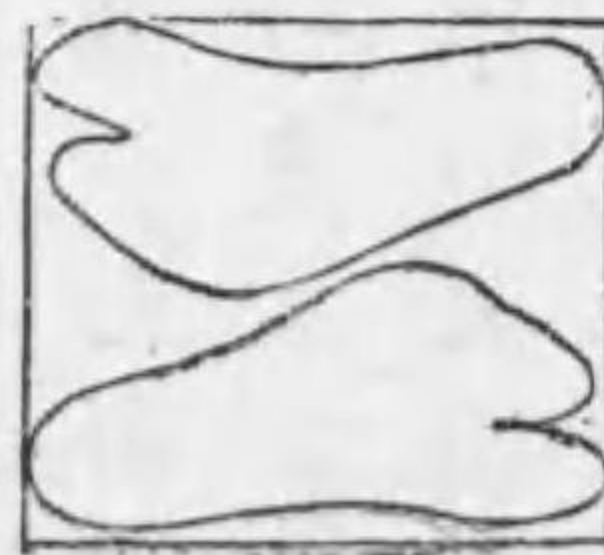
表裏の布を中表に幅を二つに折つて裁つ

第二百六十七圖



幅の輪

第二百六十八圖
底の裁ち方



指の脗の當布表
布にて二枚取る
第二百六十九圖



縫ひ方。

糸は二本の捻り糸で縫ひ、縫ひ方は、總べて一針ぬきにする。
(1) 鞆布の丈の、一寸六分の所に鞆を表裏の布で挟み、裏は一分五厘多く縫ひ代を取つて、鞆の穴に針を刺して、半返しに縫ひ、表

布が縫ひ代だけ裏に返る様に折る。
前に折つた折り目を山にして裏返し、鞆の附いた上と下を、表

裏合せて縫ひ、裏の方に折りを付け、表に返し、裁ち目の端を躰
けでおさへて置く。

(ロ) 内甲の上部の口を、深さを表裏合せて、口の方は表を五厘程
控へて(出来上り表が裏に返るやうになる)、角は少し落すやう
にして縫ひ(深さの方は、六分程縫ひ残して置く)、裏の方に折り
を返す。

(ハ) 外甲の口を、内甲の様に表裏合せて縫ひ、裏の方に折りを付け、
深さの方の裏表で、さきに縫ひ置きたる、鞆布を挟んで、口の所
をよくこめて、底より六分上つた所まで、四つ縫ひにし、鞆布の
裏の下の方に、さきに内甲の深さの縫ひ残した處を、縫ひ代を
自然に折り出して當て、外甲の表裏で、鞆布と内甲とを挟んで
よくこめ、底まで四つ縫ひにして、折りを付けて表に返す。

(ニ) 甲の山を、内甲を外甲で挟んで、口の所をよくこめ、指先まで四

つ縫ひになし(此所は、布が斜であるから、特に針目を細かく糸
を引きしめて縫ふ)表返す(四つ留めの時の口の方の折りは、裏
に返してこめる)。

(ホ) 指の胯の當て布の、丸く裁つた方を、五厘裏に折り返し、指の胯
の表の方に當て、胯の所は躰けにて綴ち、丸く裁つた方を、一本
糸にて針目細かに、甲布に纏り附ける。

(ヘ) 鞆掛けの糸(晒の四つ子)を、四本捻り合せ、鞆掛の布を内甲に折
り返して、鞆に合せ、内甲に二目落しに、鞆掛けを縫ふ、即大針は
鞆の入る幅にし、鞆と鞆との間に、小針を出して、半返し縫ひに
する、縫ひ始めと終りとは、表に小針を出す、次に其針目より、一
分五厘外側に、同じく一筋縫ふ。

(ト) 底の縫ひつけ方は、内外の爪先の丸い所を、一本の糸で針目細
かに縫つて、丸みに應じて縫ひ代を縮め置き、底の踵の中央と

甲布の踵の中央を合せて、待ち針を打ち、指の脛止まりでも、底と甲とを待ち針でとめ置き、踵は全體に底をゆるめ加減にし、丈の中央では、幅の兩方とも底と甲布とを、平に釣り合ひを取り、指の脛では、底をゆるめ、甲の布を釣りさせて縫ひ、指先は丈の布目の曲らぬ様に、甲の布を形よく、小さく襷を取つて縫ふ。針目は半返しにし、三針おき位に、裁ち目に糸を巻いて縫ふ。

(チ) 縫ひ終つたならば、いせ板を入れて、櫛で指先の襷を擦つて消し、きせを正しくして置き、踵と指先とを、表に押し出して、引き返し、足袋形を入れて、竹篋で縫ひ目のきせを取り、形を整へ、指の脛や踵の縫ひ代の、硬いのを叩いて殺し、足袋形を抜き、槌にて全體の縫ひこみを叩く。

(リ) 甲の布を、内側に折り返し、左右の底を合せ、美濃紙の幅を二分五厘に切つて、丈の中央を封じる。

シャツ

種類。普通シャツ(肩當て付き、肩當てなし)、半袖シャツ、婦人シャツ、胸當付きシャツ、大鼓胸シャツ、胴形シャツ、ホワイトシャツ等。

地質。キヤリコ、ネル、縮布、天竺木綿等。

各部の名稱(二七〇、二七一圖)。

各部寸法の度り方及び裁ち切り寸法の定め方。

後襟丈。手を下に延ばし、背骨の

前
第二百七十圖



後 第七十一圖
第二百 衿



上部より、中指の先まで度つたものを、後丈と定める。前衿丈。上部は後と同じにして下部を、拇指の先まで度つて前丈と定める。衿幅。胸廻りの四分の一に二寸を加へたものを、後半衿の幅とする(前後同じ)。衿。手を横に伸ばし、其ま、真直に胸に折り曲げ、背よりひちの外側を廻して、手首までをはかる。袖丈。衿の寸法から、肩幅と

カフスの幅を、引いたものを、袖丈と定める。衿丈。首の廻りに、重ね代と縫ひ代を加へる。肩幅。肩の端の骨から骨までをはかる。裁ち方。

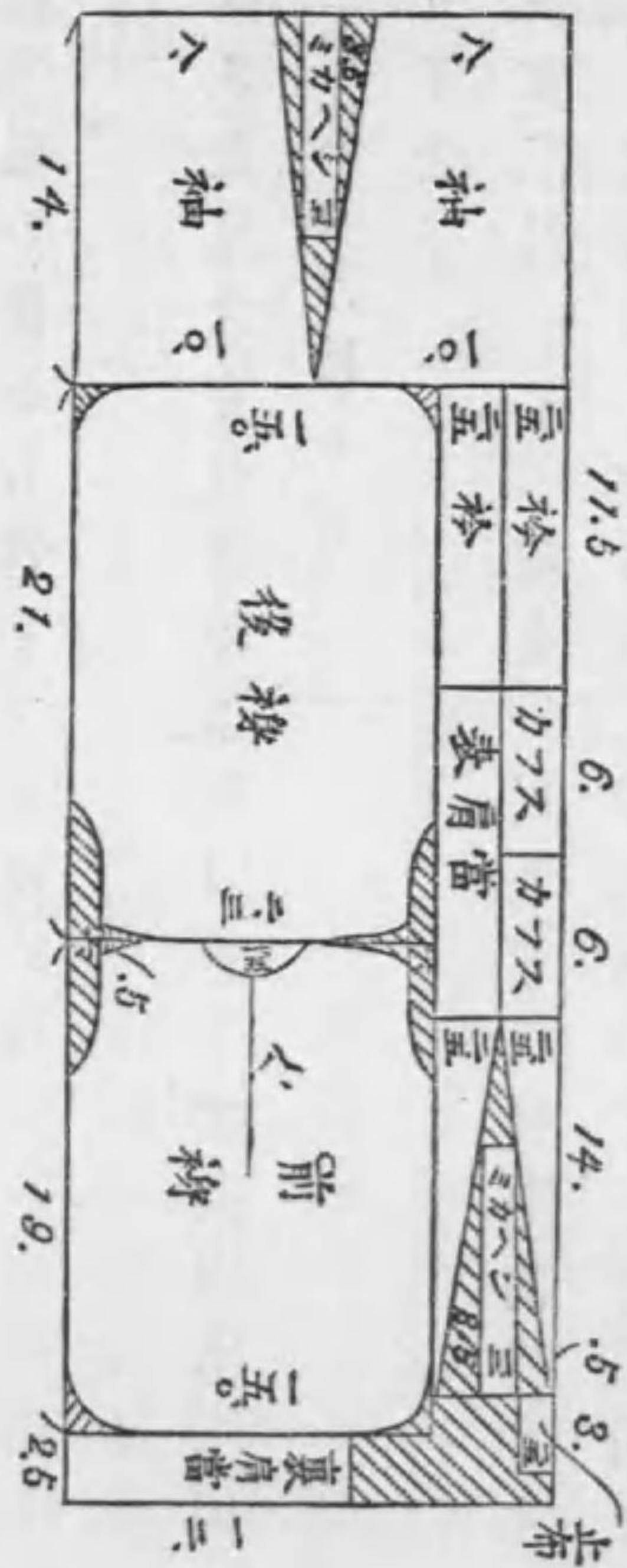
幅二尺、長さ五尺六寸五分の布を以つて、大人肩當て付き普通シヤツの裁ち方、積り方。

裁ち切り寸法。

衿丈、後丈、二尺一寸 前丈、一尺九寸 衿幅、前後とも一尺五寸
袖丈、一尺四寸 袖口、幅二つに折つて、三寸五分より四寸
袖付け、六寸より六寸五分 袖口馬乗り、一寸か一寸五分 衿
肩、一寸八分 顎、二寸六分、内衿にて一寸五分 カフス丈、六寸
同幅、二寸五分内外 肩當て布丈、一尺二寸 同幅、二寸五分
より三寸 衿丈、一尺一寸五分 衿幅、一寸顎にて八分 見返

し幅、一寸二分 同丈、八寸五分 裨の馬乗り、前裨の裾口より
三寸五分。
裁ち方。

第二百七十二圖

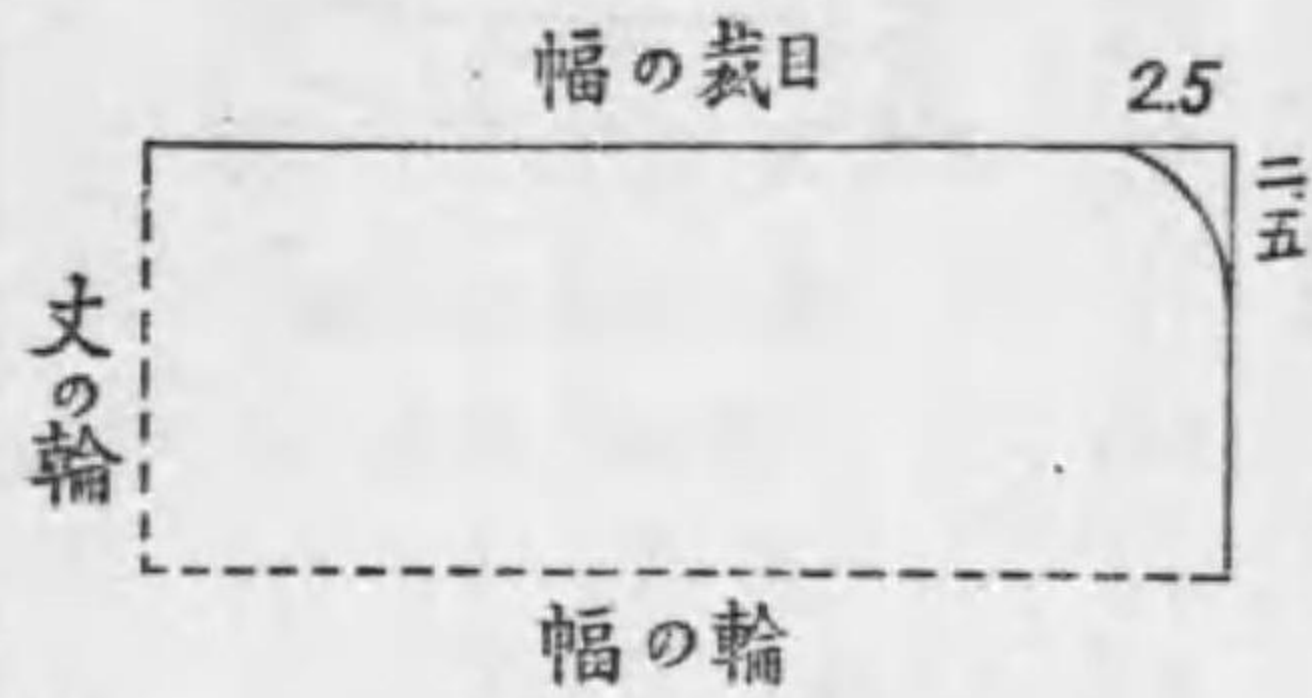


裁ち方公式 袖丈+後裨丈×2-前後の差+裏肩當幅=用布
同算式 14+21×2-2+2.5=56.5

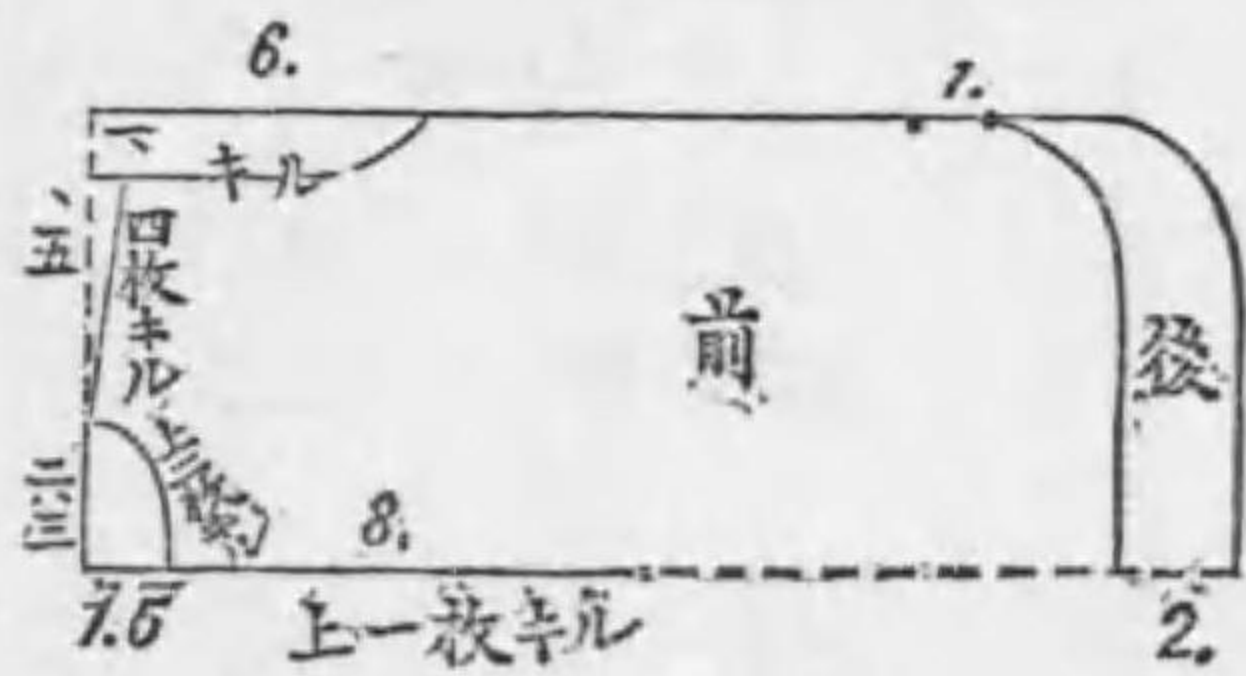
裁ち方分解圖

第二百七十七圖

裨を幅丈ともに二つに折にし
て形をつける



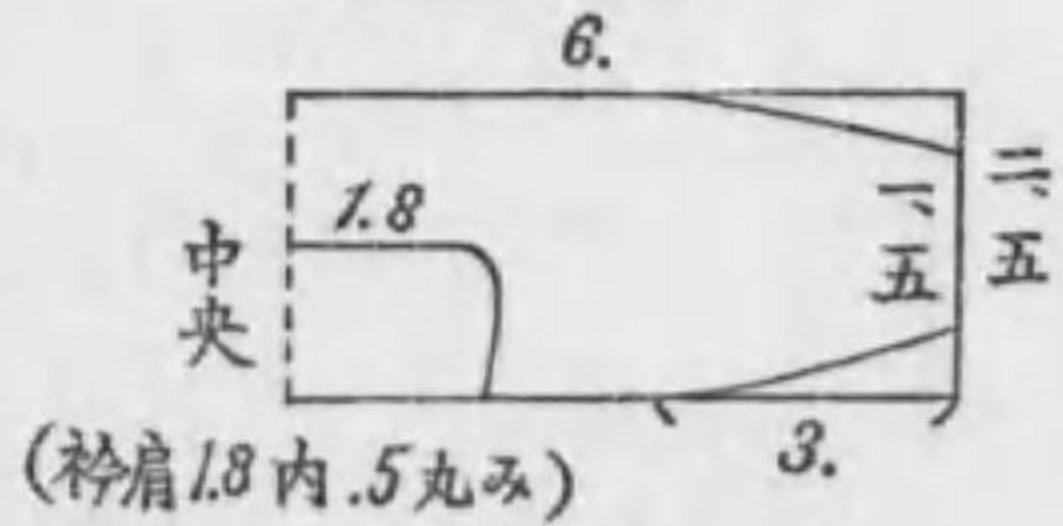
第二百七十八圖 馬乗



裨丈に前後の差をつけ、衿肩、
顎、袖附を割る

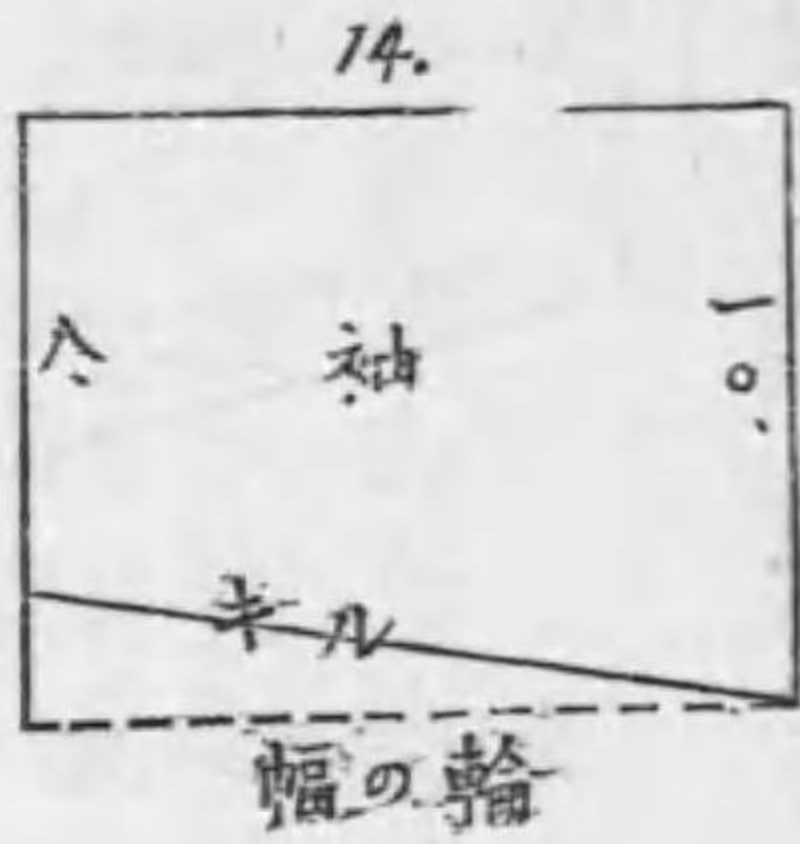
第二百七十九圖

肩當の裁方

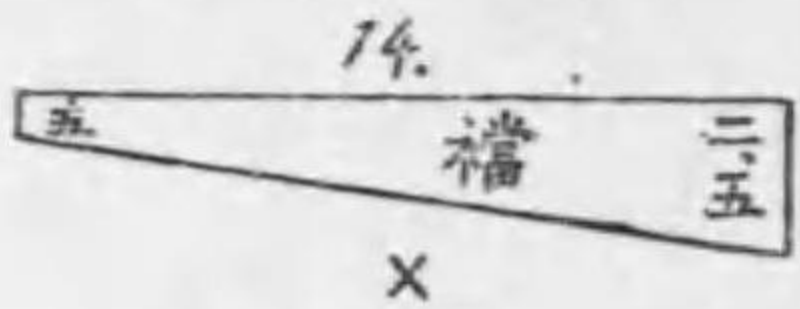


第二百七十三圖

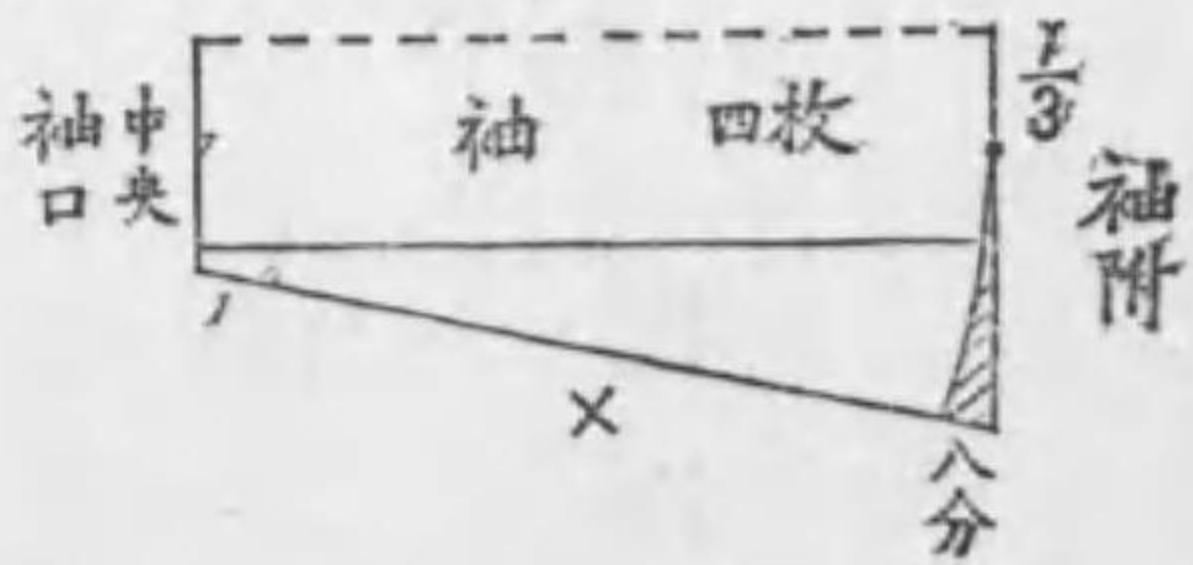
幅を二つに折る



第二百七十四圖

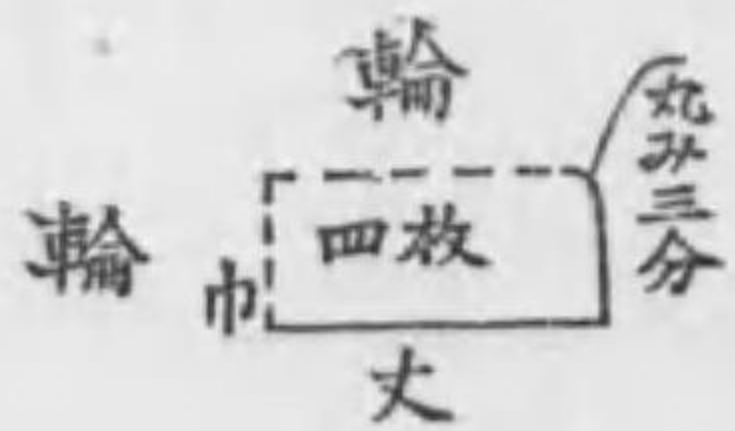


袖の上に襟をのせて裁つ
輪

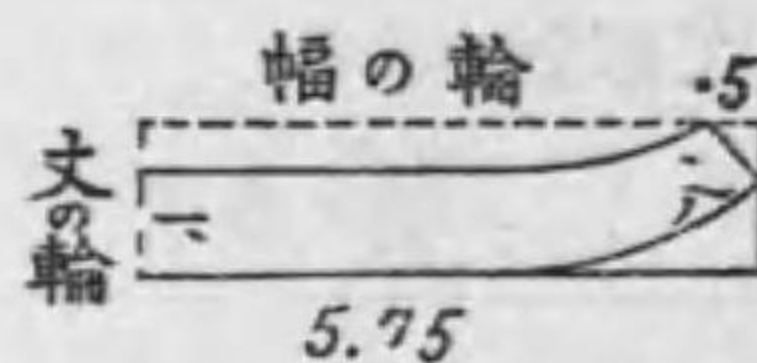


第二百七十六圖

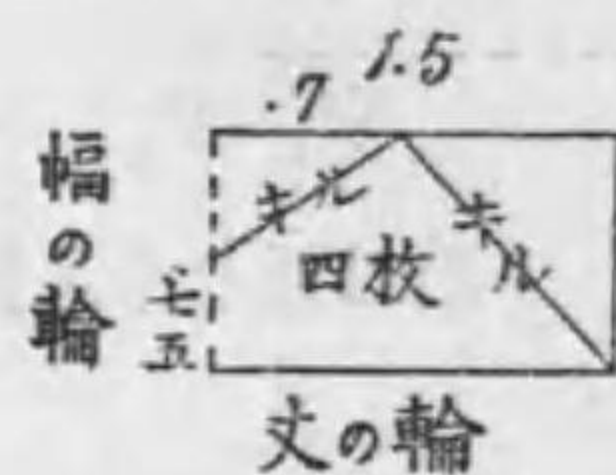
カフスの裁方



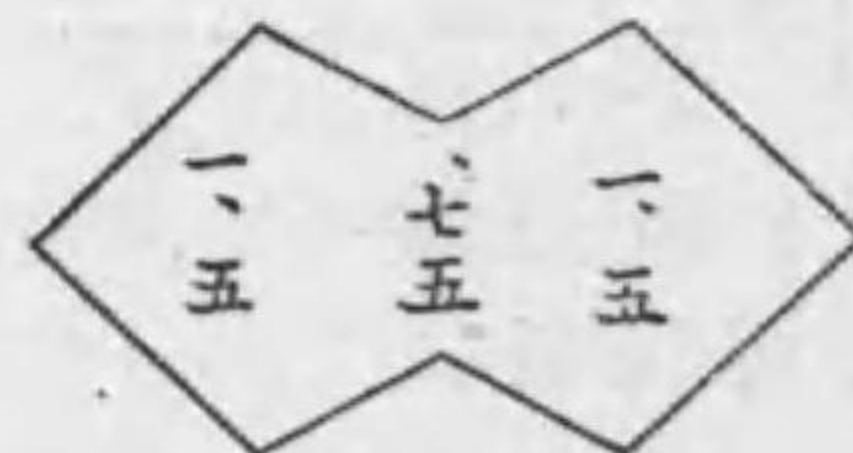
第二百八十圖
衿の裁ち方



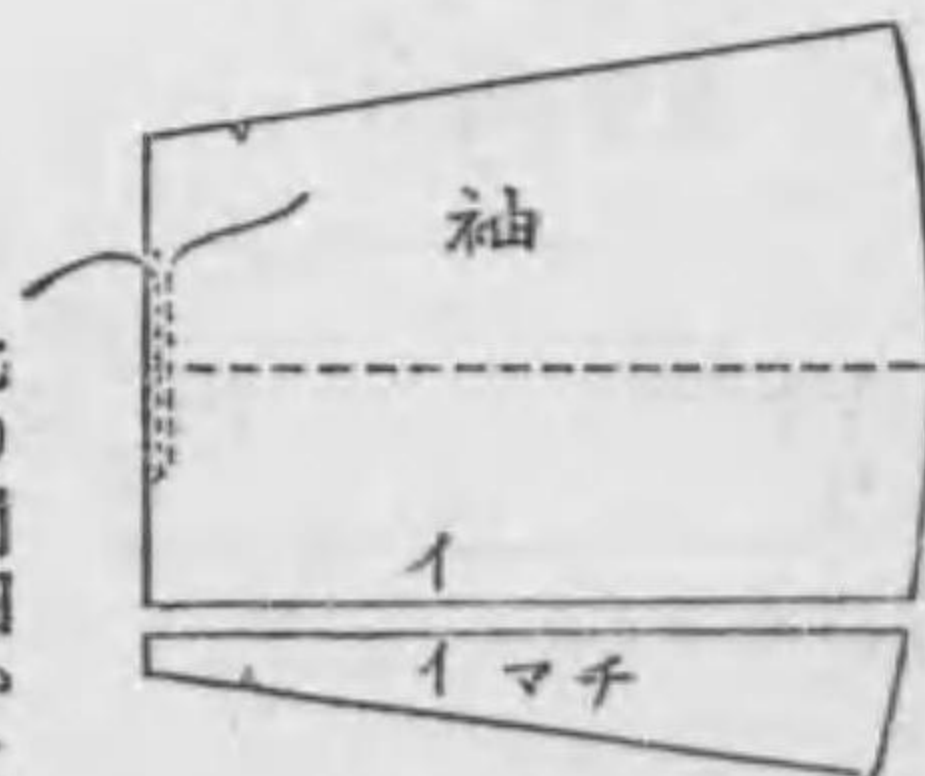
第二百八十一圖
止布の裁ち方



第二百八十二圖
止布の裁ち上りたる

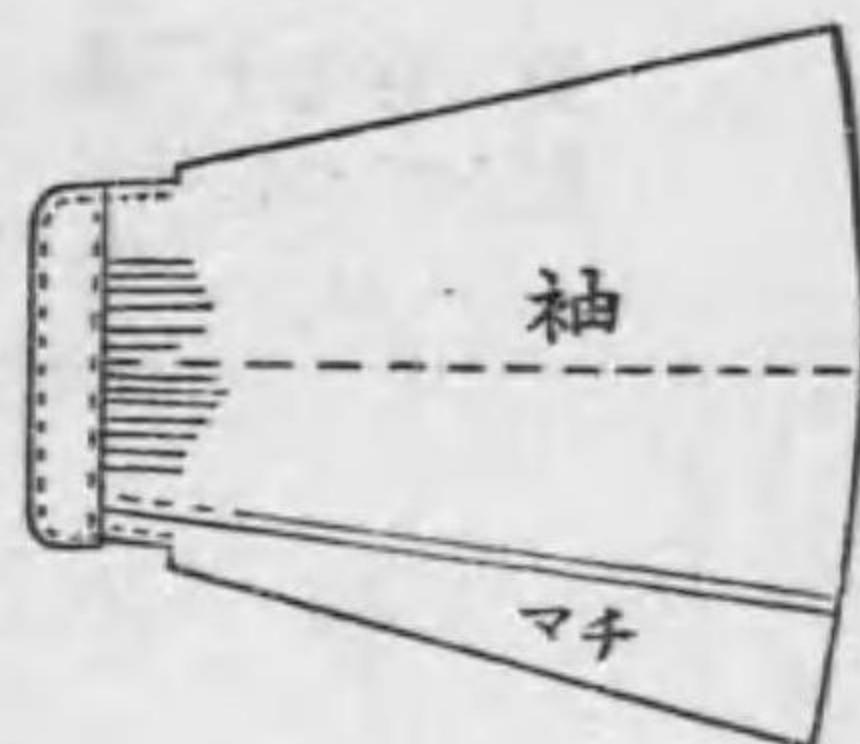


縫ひ方圖解
第二百八十三圖



此の間細かに二度
ごく浅く縫ふ
袖の(イ)と襟の(イ)と縫ひ合
せる

第二百八十四圖



第二百八十五圖



カフスの廻りにミシン縫ひをする

(一) 縫ひ方。
袖。

(イ) 袖の真直の所と、襟の真直の所とを合せ、袖の縫ひ代を一分に、襟の縫ひ代を二分にして縫ひ、其縫ひ目は、袖の方に返し縫ひ込みの端を折りて、纏り附ける。

(ロ) 袖口の馬乗りを、三つ折りにして、左右共纏り附ける。

(ハ) 圖の如く、袖口の切り込みの間を、カフスの出来上りだけに縫ひちぢめる。

(ニ) カフスの両端を縫ひ、丸みを縫ひよせて形を整へ、折りは表の方に返し、袖口に合せて縫ひ附け、表よりミシンをかける。

(二) 袴。

(イ) 袴の前明きの上前に、見返し布を表に出る様に縫ひつけ、見返し幅を上り八分に折りて、表より両端にミシンを掛ける。

- (ロ) 下前の見返し布は、裏に附く様に縫ひ付け、上前と同じ幅に折りて、表より両端にミシンを掛ける。
- (ハ) 前明きのごまりで、見返しを五分重ねてごめ、其上に止め布の廻りを折りて當て、廻りにミシンを掛ける。
- (ニ) 後裓の上の方を、幅の中央四寸五六分の間で、肩當ての寸法に合せて縫ひちゝめ、後肩當ての裏表で挟んで縫ひ、表返してミシンを掛ける。
- (ホ) 前裓に表肩當て布を縫ひ付け、肩當て布の方に折りを返し、裏の方の肩當ての端を折りつけ、表よりミシンを掛ける。
- (ヘ) 衿先及び衿山を縫ひ、丸みの所を縫ひよせ、表返して表衿を裓に縫ひ付け、(兩端の折りは、表に返して衿を附ける時、一緒に縫ひつける)、衿の方に折りを返し、裏を折り付け、表より衿の廻りにミシンを掛ける。衿付けは頸の所にて衿をつり加減にする。

- (ト) 前後の裾を三つ折りにして、馬乗りより馬乗りの標まで、纏り附ける。
- (チ) 袖付けは、袖を二分、裓を一分の縫ひ代にして縫ひ(但し袖付け止まりより一分程、前後共縫ひ残しておく)折りは裓の方に返し、縫ひ込みの端を折りて、纏りつける。
- (リ) 袖下及び脇を後一分、前を二分の縫ひ代にして縫ひ、後裓の方に折りを返し、縫ひ込みの端を折りて、纏り附ける。
- (ヌ) 穴の明け方は、左衿先より、二三分入りて、幅の中央に一つ、衿付けより五分下りて一つ、それより下は、前明きを三等分して二つ、カフスの後の方に、端より二三分入りて、幅の中央に一つ、明け、穴騰りをして、これに合せて下前に釦を附ける。
- (ル) 釦の付け方は、釦の穴の上に、丈夫な針を當て、十番位のカ

タン糸で十字字か二の字に二度かけて針をぬくと糸がゆるくなるから、それを釦と布との間で三四度かたく巻いて裏に出して留める。

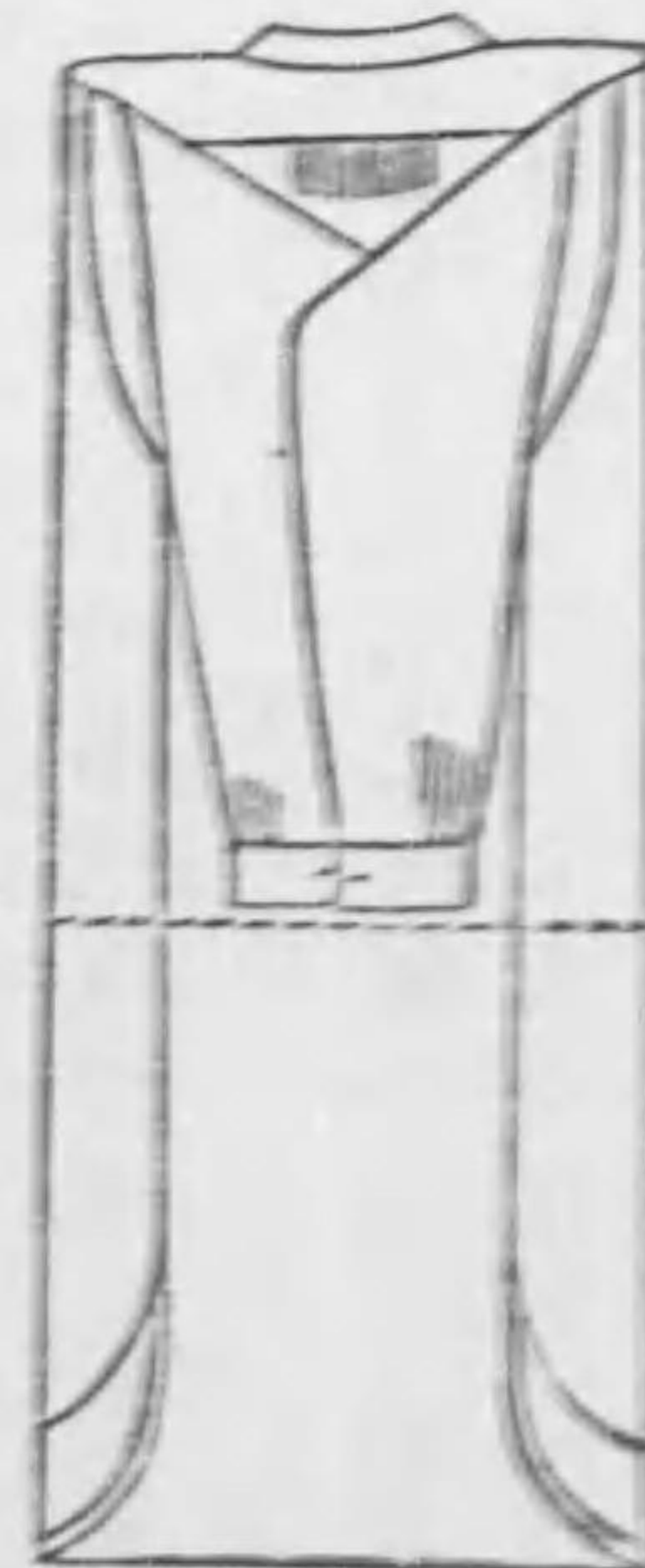
(チ)袖及び襟の馬乗りに、門止めをする。

(ツ)霧を吹き、折り目縫ひ目を正しくして、アイロンをかけ、仕上げをする。

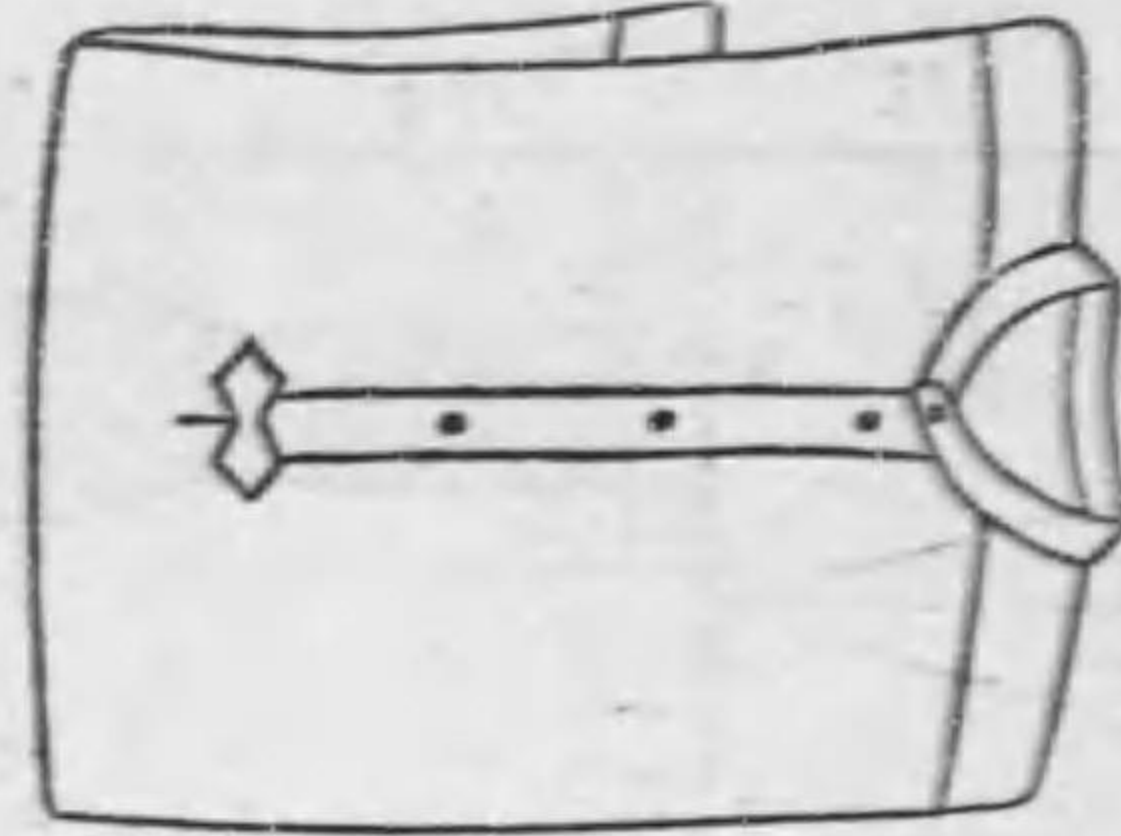
(カ)仕上げの畳み方。

(1) 圖の如く、背を上にして、身幅の両側と両袖とを折り込む。
(2) (イ)線に沿うて、下部を上の方に折り返し、更に表に返して

第二百八十六圖



第二百八十七圖



第二圖の如く畳む。

十四五歳用のシャツの裁ち方

幅二尺、長さ四尺五寸五分の布を以つて、十四五歳用シャツの裁ち方、及び積り方。
裁ち切り寸法。

袖丈、一尺一寸 袖幅、一尺 袖口、七寸
後襟の丈、一尺八寸より、一尺六寸 前丈

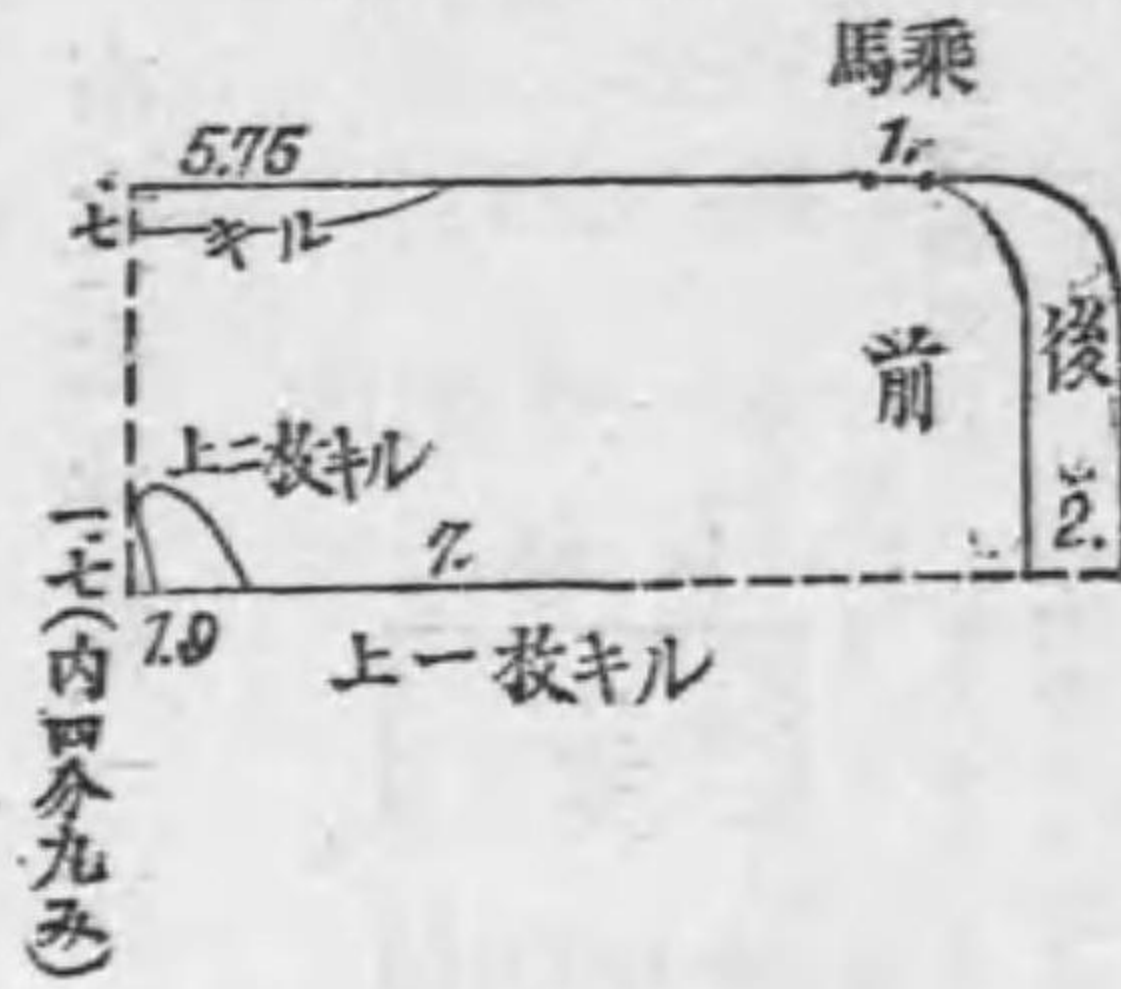
一尺六寸五分より一尺四寸 身幅、一尺三寸 衿肩明き、一寸七分 頸、一寸九分 前明き丈、七寸 裾口丸み、二寸 肩當て布丈、一尺一寸六分、幅三寸五分 衿丈、一尺〇五分、幅一寸五分 カフス丈、五寸五分、幅二寸五分 見返し布丈、七寸五分、幅一寸 持出し布丈、七寸五分、幅一寸三分。

五六歳用シャツの裁ち方

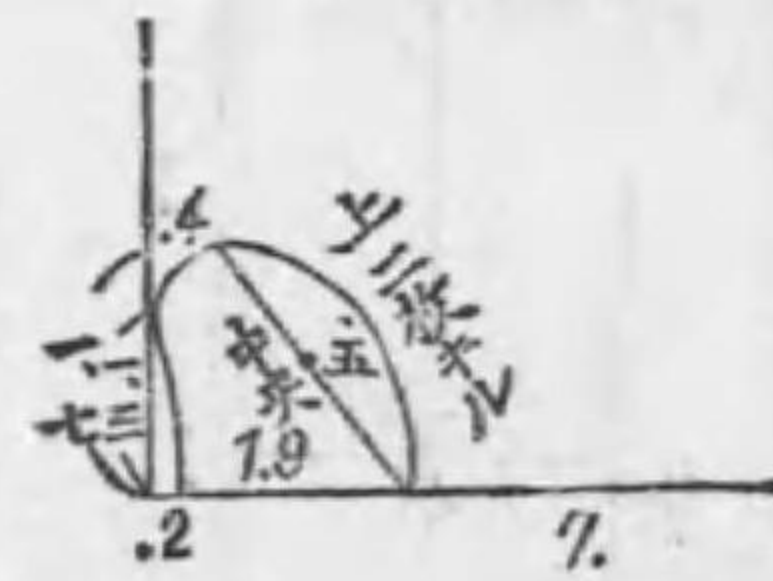
肩當てをのぞく外は、普通シャツに同じである。肩當ての付け方は、肩當ての前後を、縫ひ代だけの表に當て表よりミシンを掛ける。

縫ひ方。

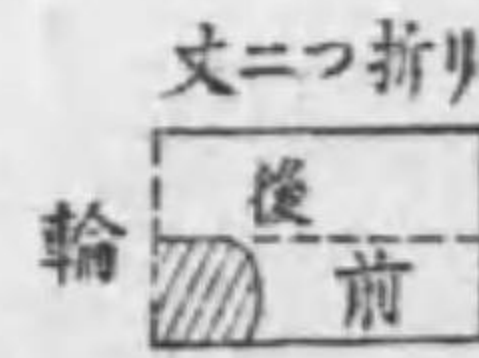
第二百九十三圖



第二百九十四圖 袷肩の裁ち方

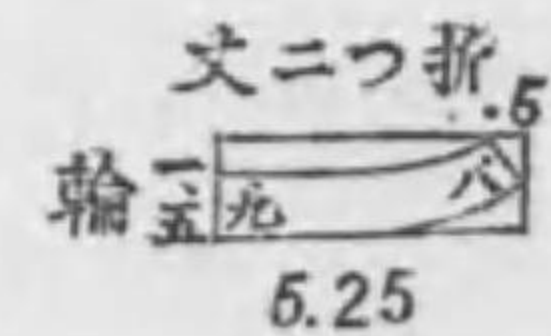


第二百九十五圖 肩當

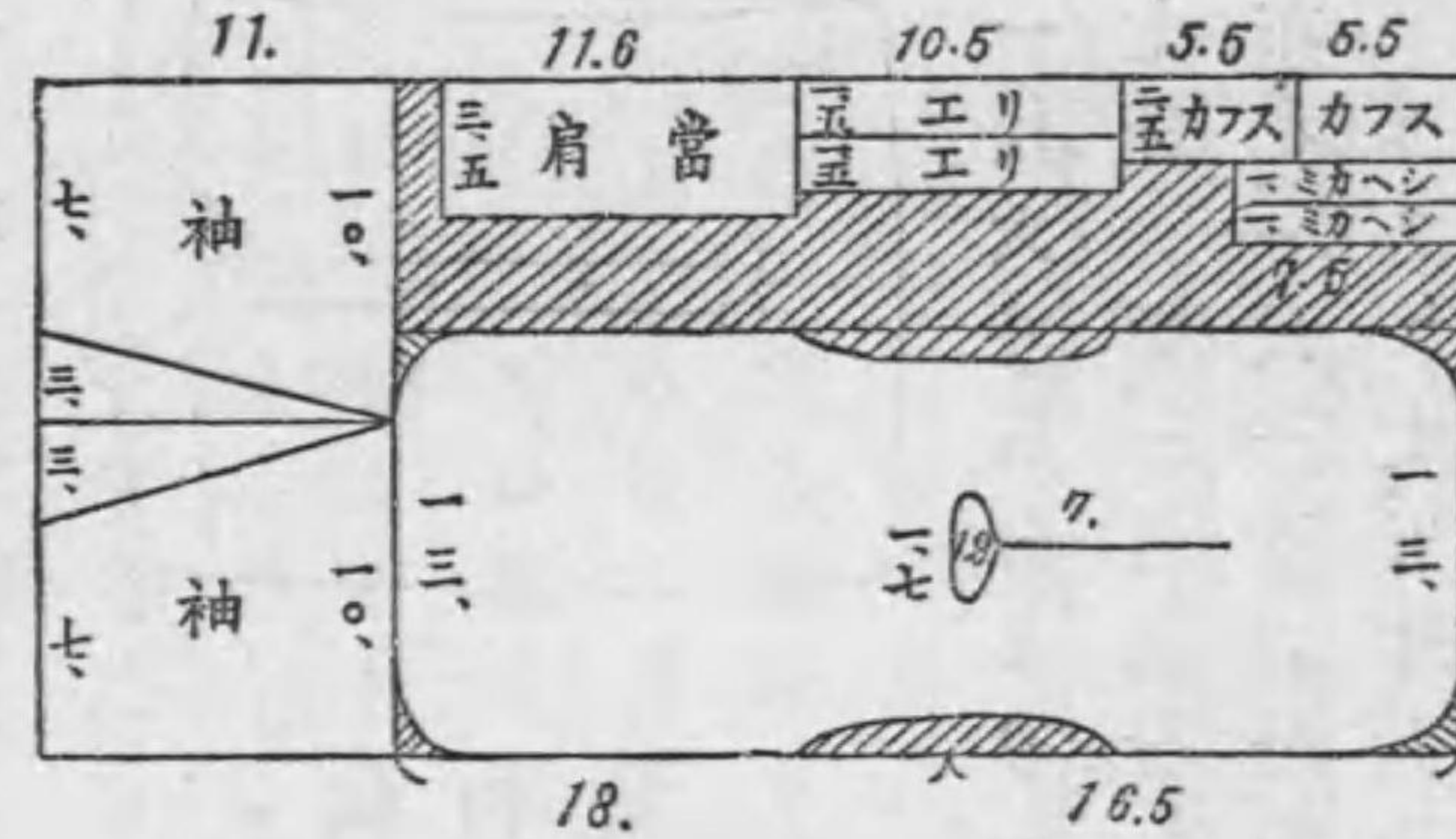


襷の列りに合せて裁つ

第二百九十六圖



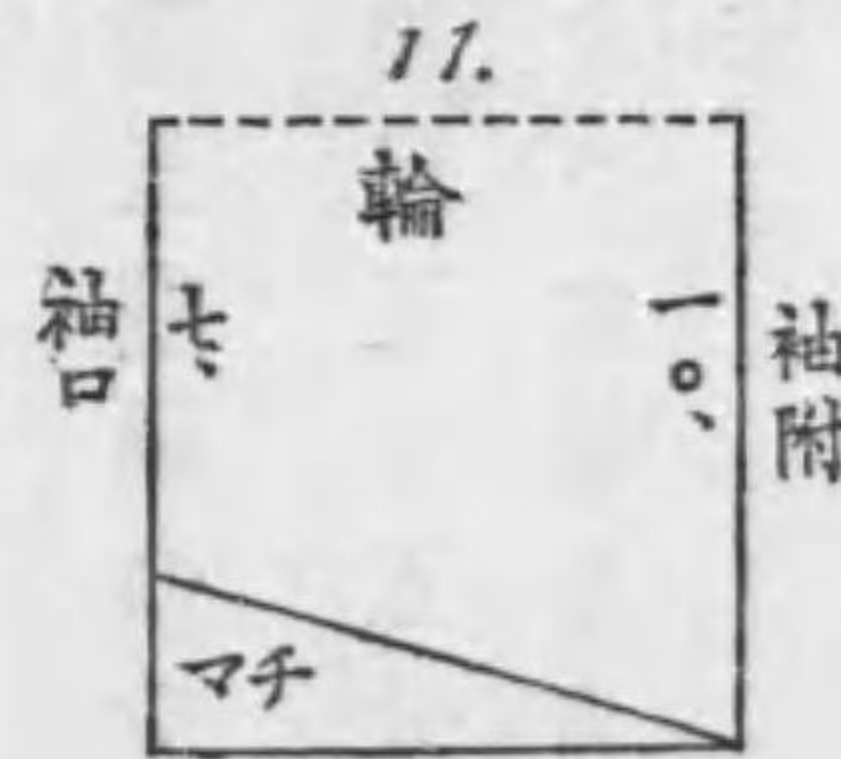
第二百八十八圖



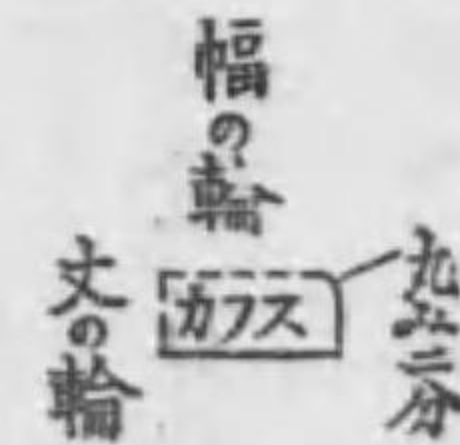
積り方公式 袖丈×前丈×2+前後差=用布

裁ち方分解圖

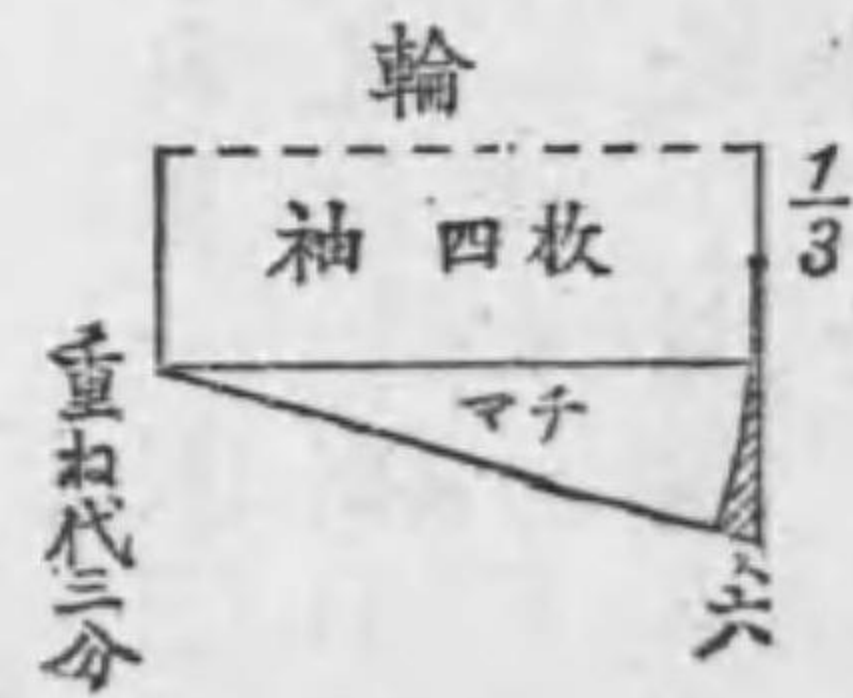
第二百八十九圖 中表に二枚重ねて丈を二つに折る



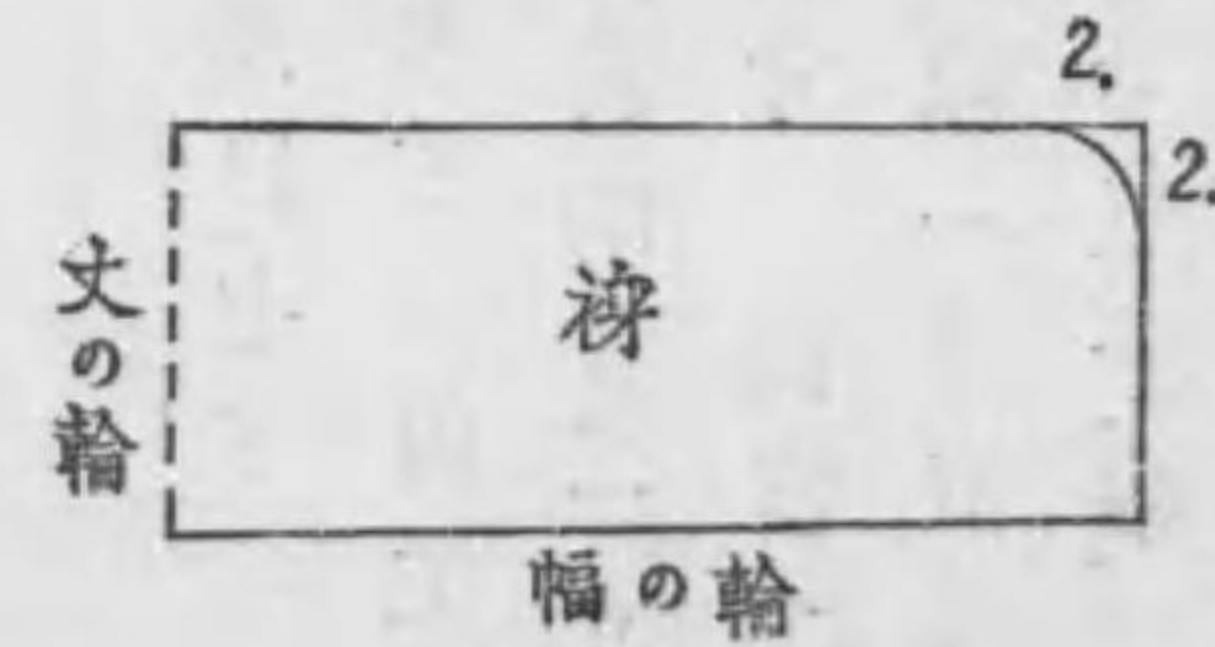
第二百九十一圖



第二百九十圖 袖の上に襷を重ねて裁つ

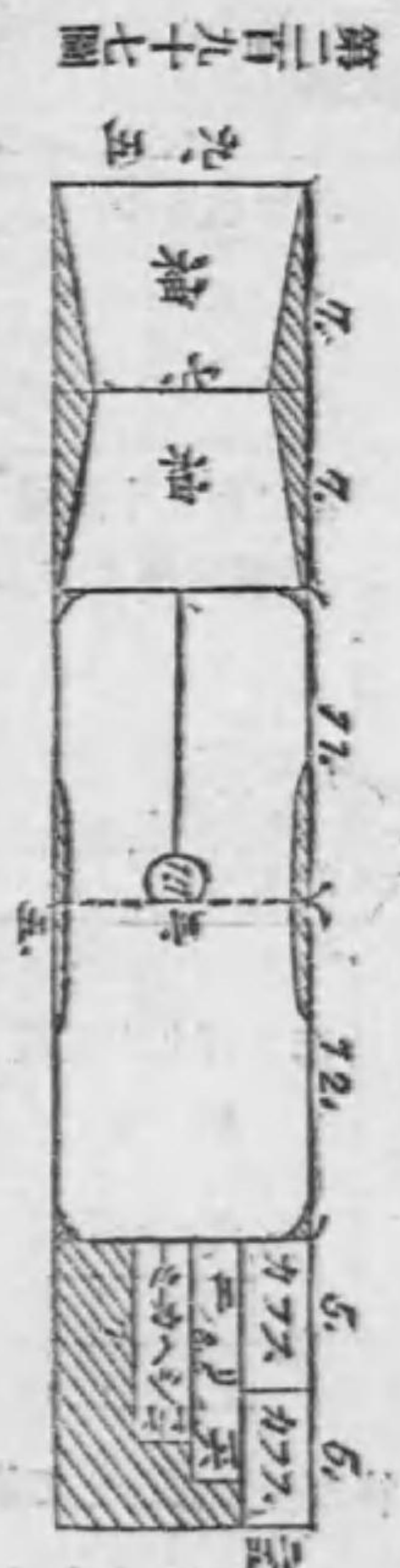


第二百九十二圖 幅丈共に二つに折る



幅九寸五分、長さ四尺七寸の布を以つて、五六歳用シャツの裁ち方積り方。
裁ち切り寸法。

袖丈、七寸 袖口、七寸 袖幅、九寸五分 後丈、一尺二寸 前丈、一尺一寸 身幅、九寸五分 衿肩明き、一寸五分 裾口丸み、一寸五分 頸、一寸七分 衿布丈、八寸五分、幅、二寸五分 見返し布丈、七寸、幅、一寸 カフス布丈、五寸、幅、二寸五分。



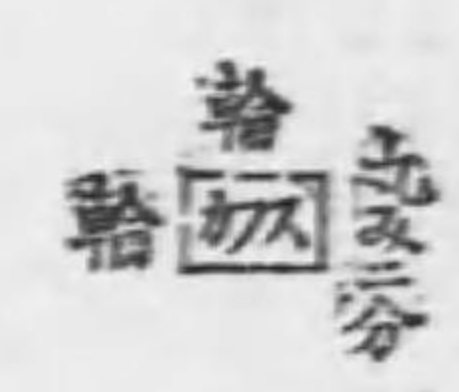
積り方公式
 (袖丈+カフス+後丈)×2-前後の差=用布
 (用布-(袖丈+カフス丈)×2+前後差)+2=後丈
 例算式 (7+5+12)×2-1=47 (47-(7+5)×2+1)+=12

分解圖

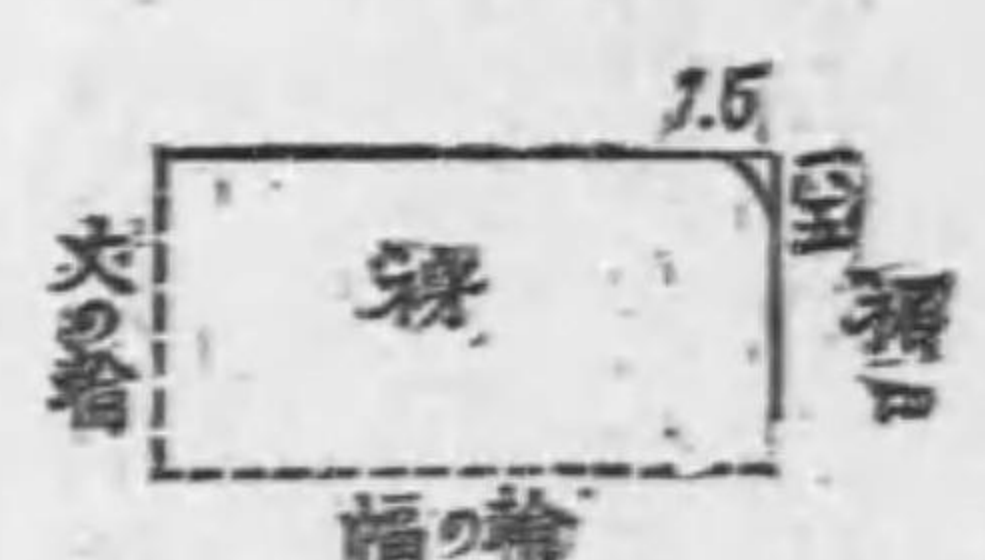
第二百九十八圖
中表に二枚重ねて丈を二つに折る



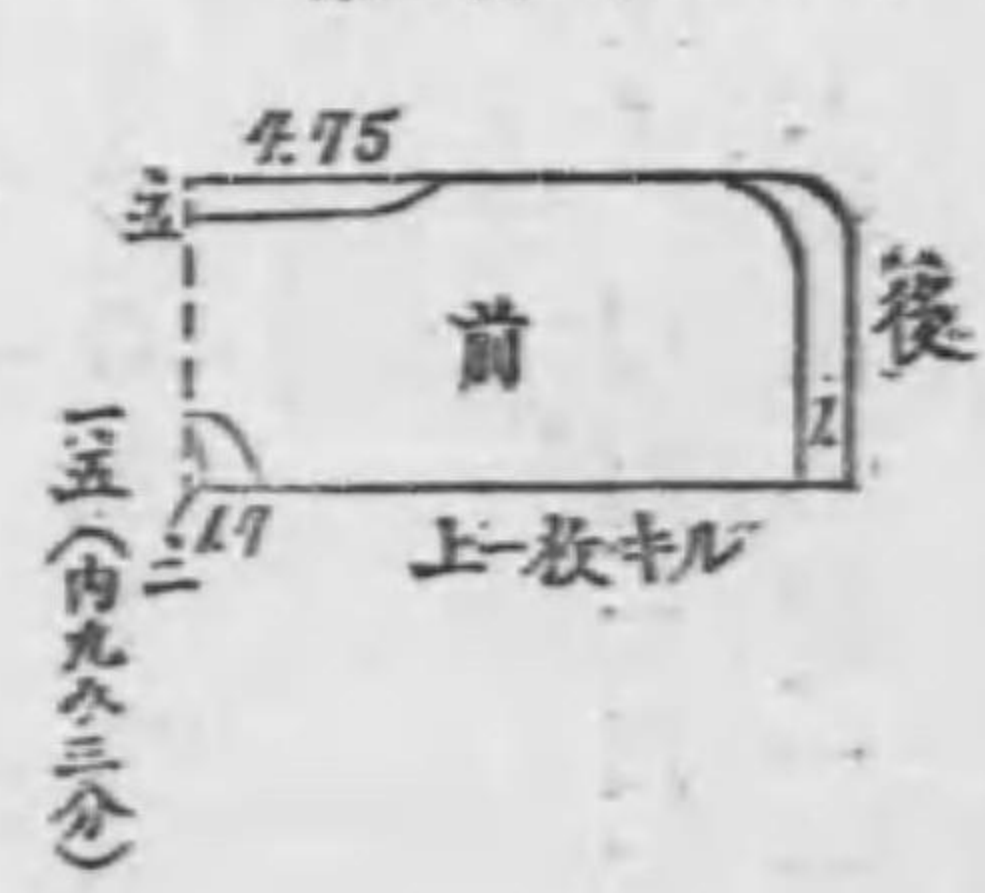
第二百九十九圖



第三百圖



第三百一圖



第三百二圖

幅丈共二つに折る



縫ひ方。

(一)袖。褶なきのみにて、他は普通シャツと同様。
 (二)衿。前が裾まで開く故、見返し布は上前后とも丈のあるだけ付け、其先を剣形にする、衿の方は見返し布の下は、三つ折りにしてまつ。其他は普通シャツと同様(見返しは裾口まで付けて)

もよい。

其他は、普通シャツと同様。

半袖シャツ

各部の名稱。カフスのないのみで、その他は普通シャツと同様である。

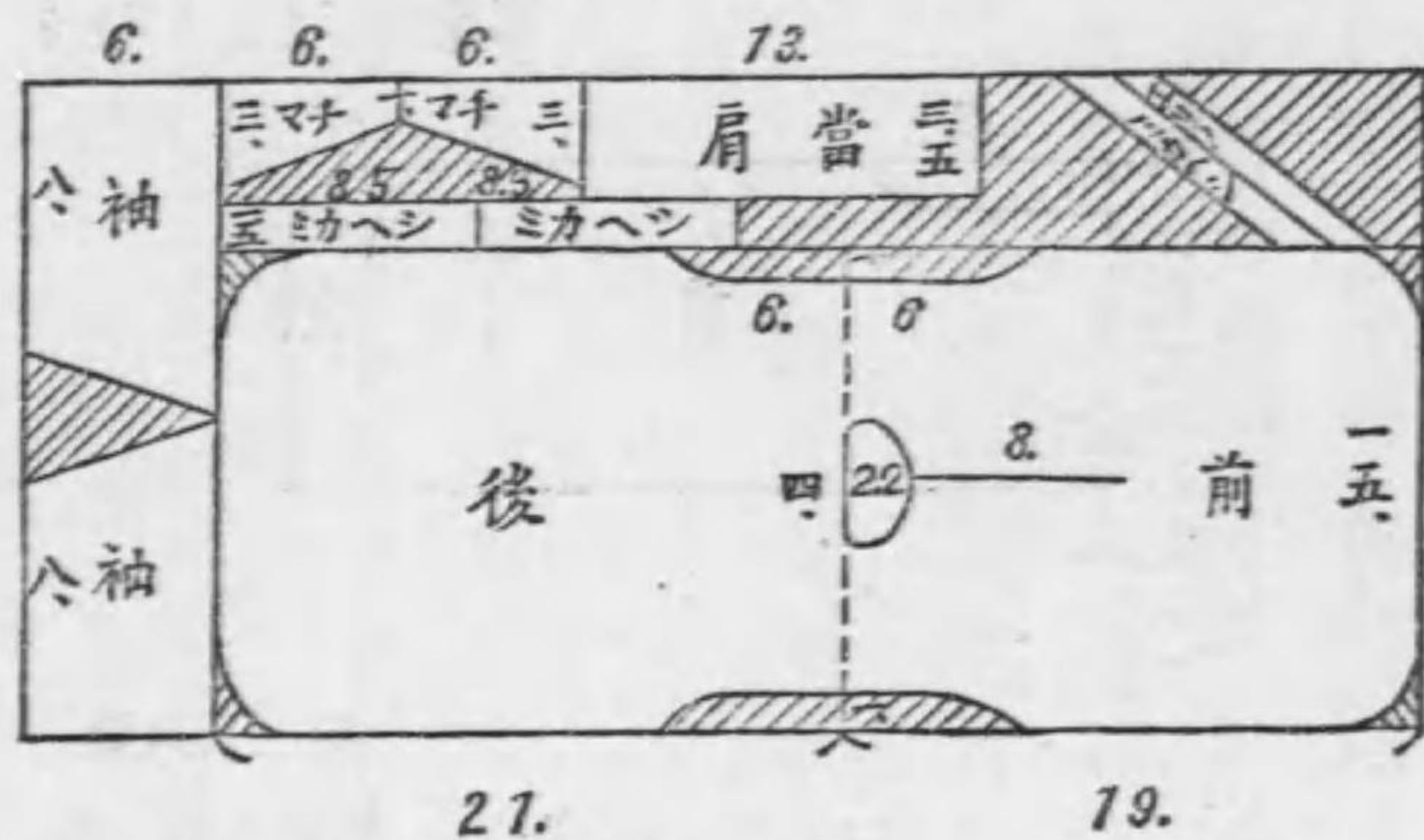
裁ち方縫ひ方。

幅二尺、長さ四尺六寸の布を以つて、大人半袖シャツの裁ち方及び積り方。

裁ち切り寸法。

袖丈、六寸 後裓丈、二尺一寸 前裓丈、一尺九寸 裓幅、一尺五寸 肩當て布丈、一尺三寸、幅三寸五分 見返し、持出し幅、一寸五分 衿見返し幅、五分。

第三百三圖



積り方公式 袖丈+後丈+前丈=用布

同算式 $6+21+19=46$

分解圖

第三百四圖



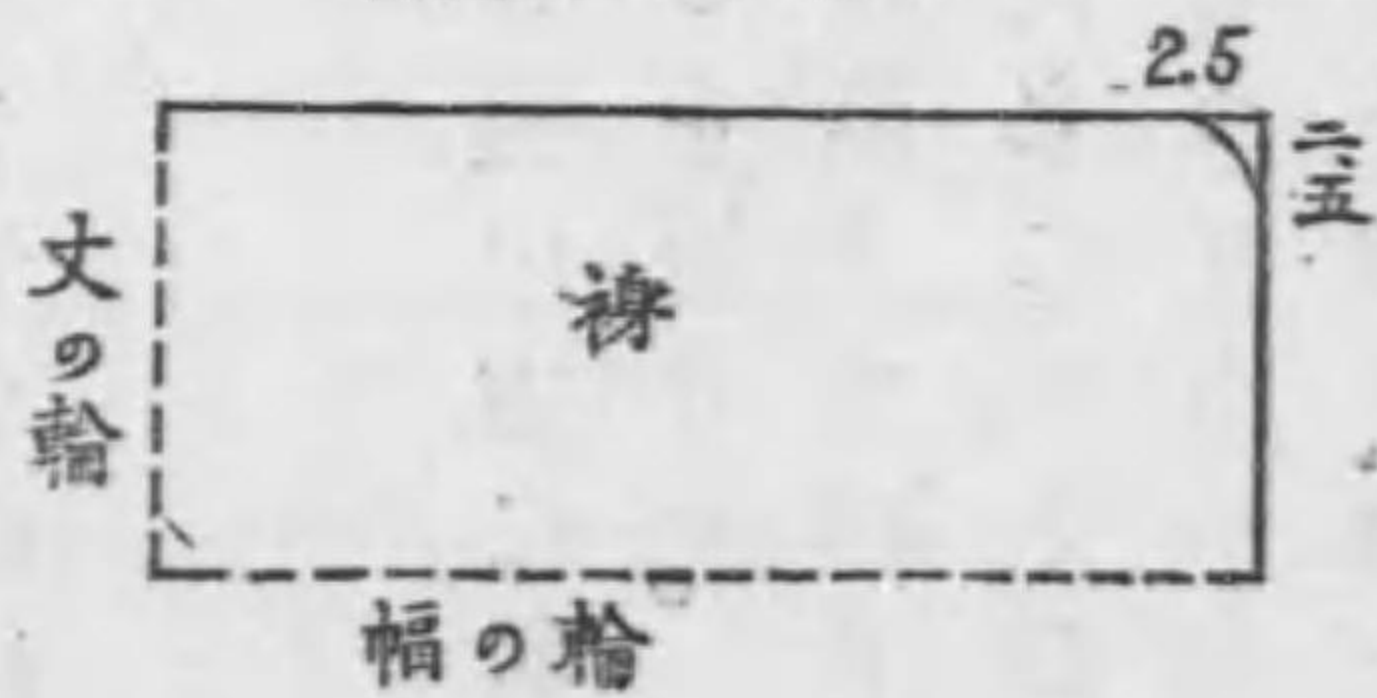
第三百五圖

袖の上に裾を縫代だけ重ねて裁つ



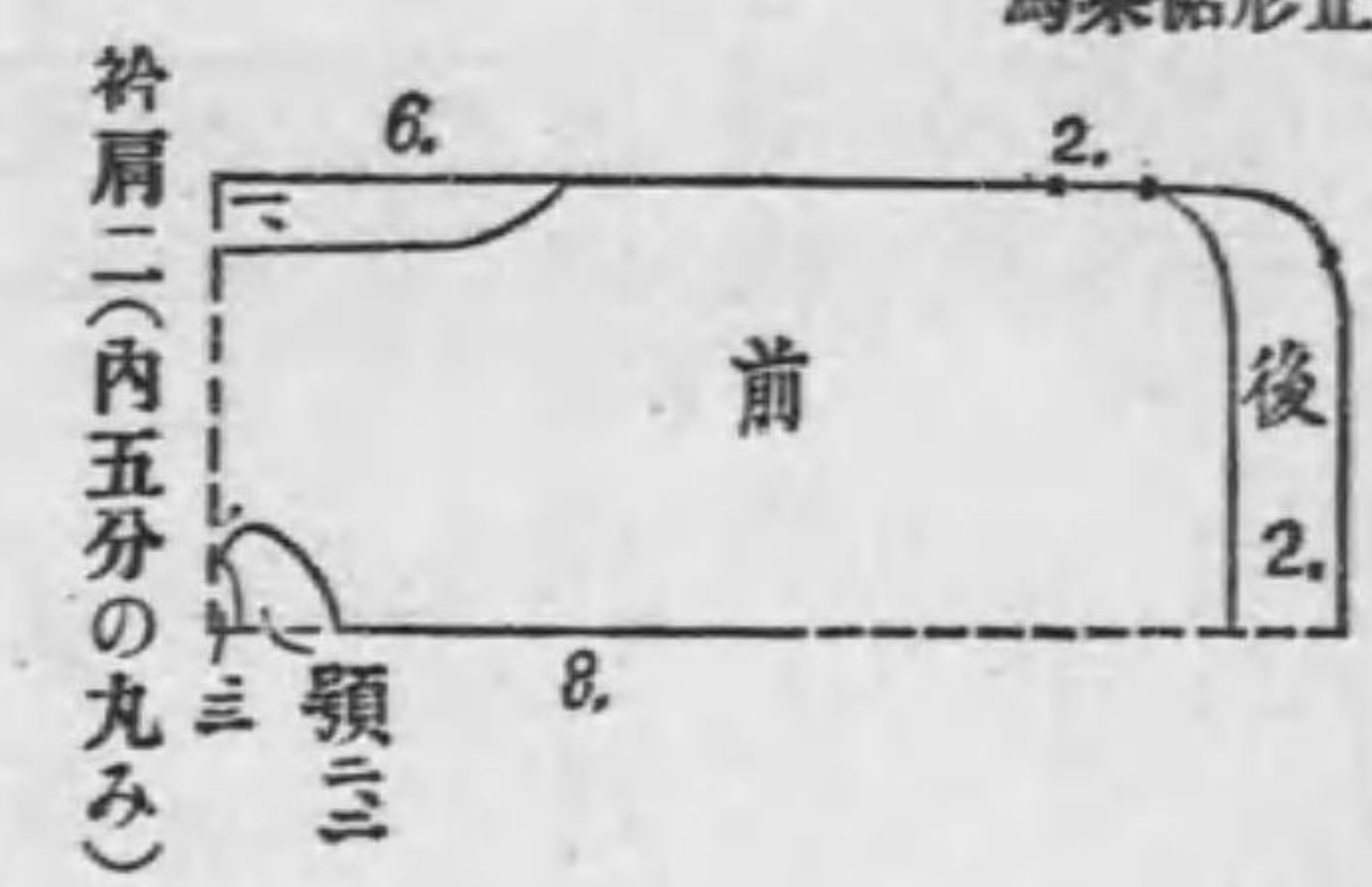
第三百六圖

幅丈共に二つ折り

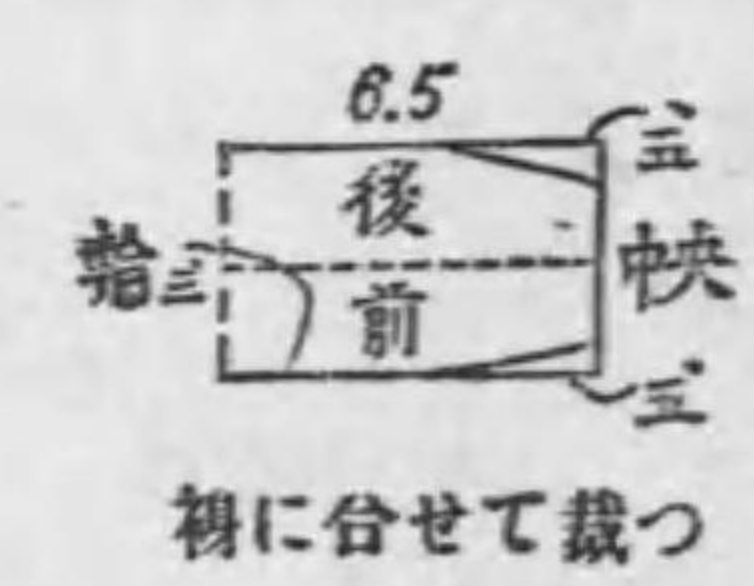


第三百七圖

馬乗裾形止より2上る



第三百八圖
肩當の裁ち方



- (イ) 肩當ての前後を、縫ひ代だけ裏の方に折りて、裾の表に當て、ミシンを掛ける。
- (ロ) 見返しの附け方、裾口袖附け脇及び袖下の縫ひ方は、普通シャツと同じにする、袖口は細く三つ折りにして、まつりつける。
- (ハ) 首廻りの表に、見返し布を縫ひ付け、幅をいつばいにして、裏にてまつり附ける。
- (ニ) 上前の衿の見返しの止まりに一つ、それ

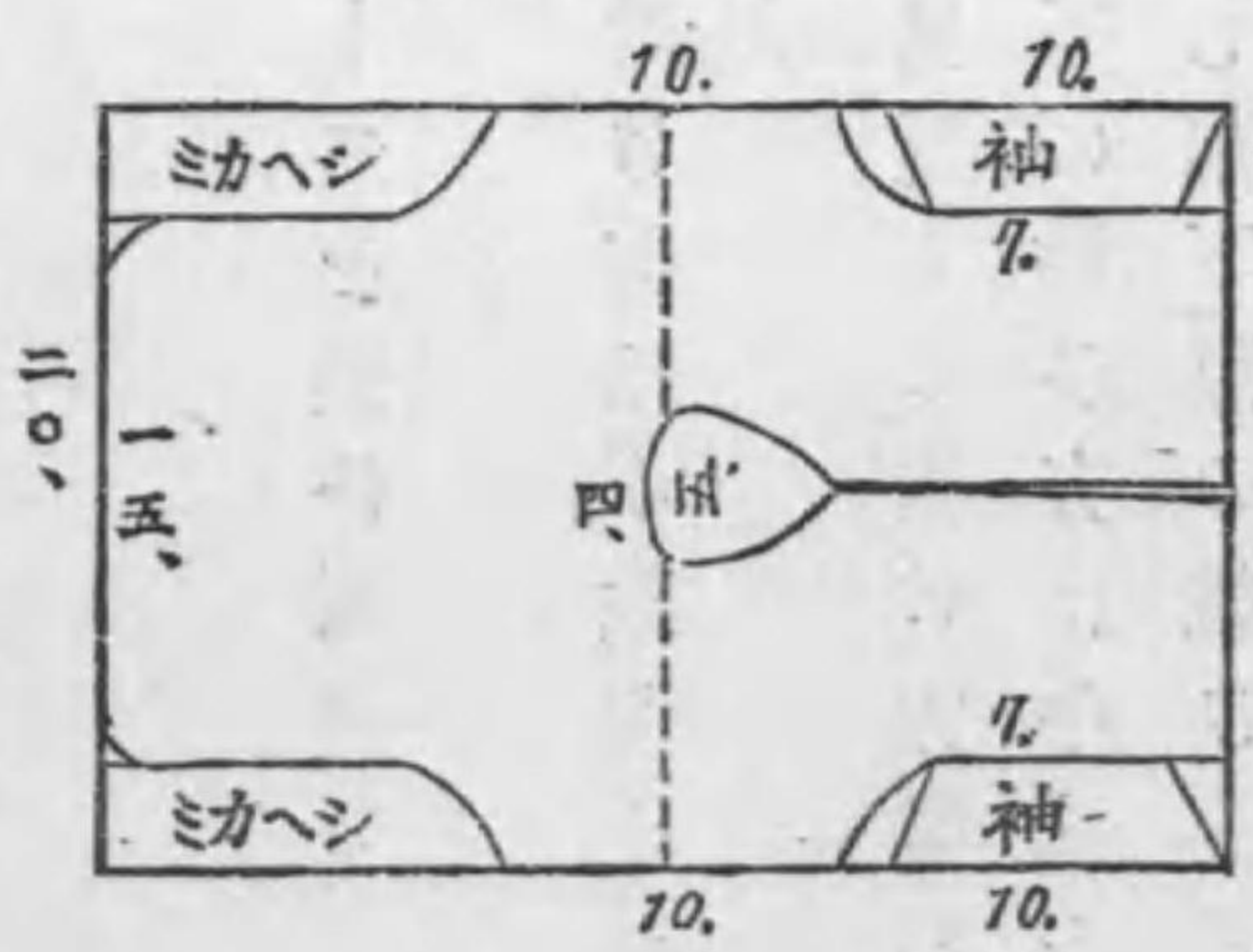
- (一) 縫ひ方。
- (一) 袖。
- (イ) 襷を普通シャツの樣につける。
- (二) 裾。

裁ち方。
幅二尺、長さ三尺三寸の布を以つて、婦人シャツの裁ち方及び積り方。

婦人シャツ

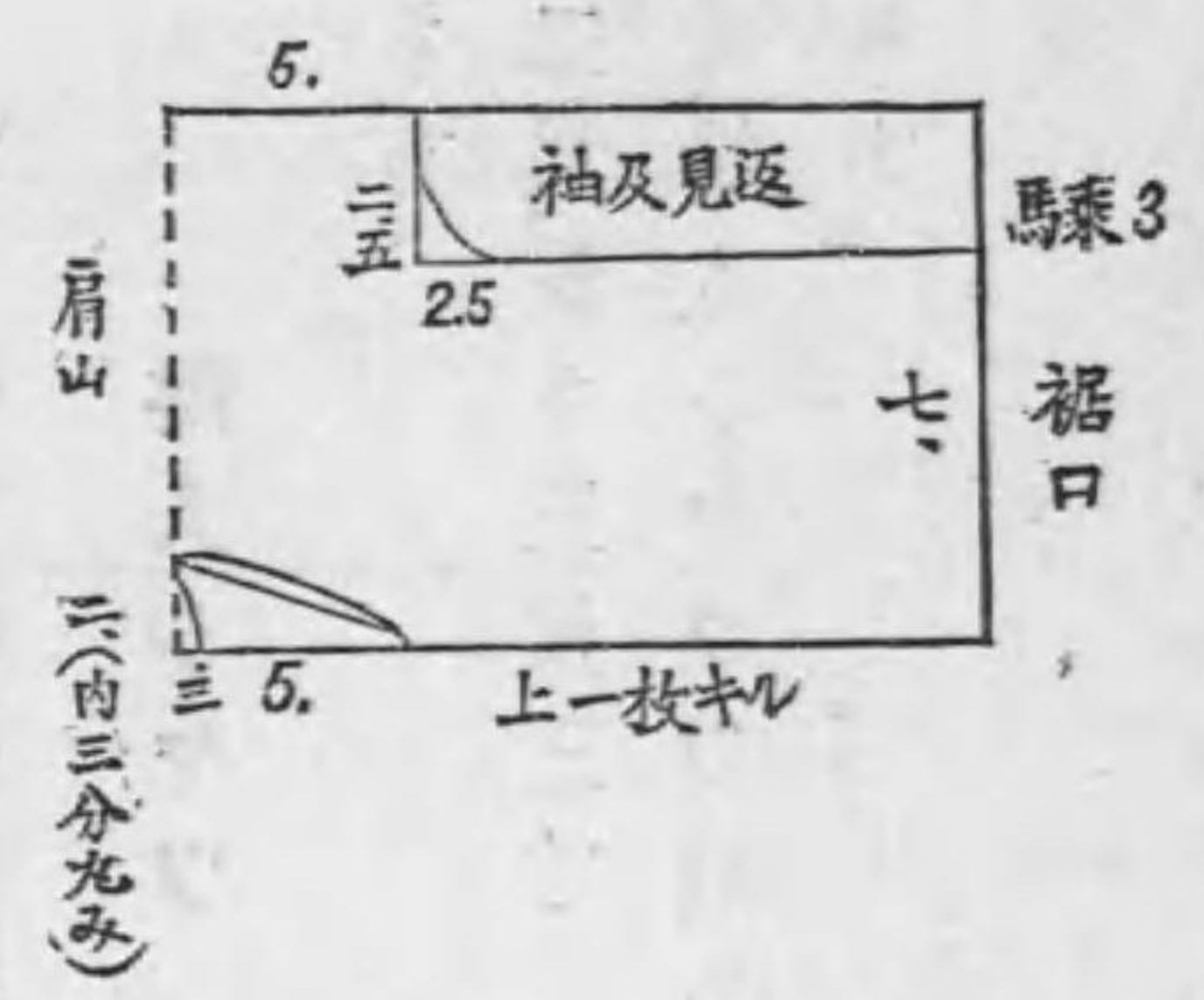
より前明き止まりまでを、三等分して二つ、穴を明け、穴騰りをして、下前に釦を附ける。
(ホ) 裾の馬乗りのこまりに、門止めをする。
注意 前裾は、裾口まで明けてもよい、その時は見返しは、小裁ちもの、様に附ける。

第三百九圖



見返布幅 1.2丈8 積り方 身丈×2=用布

第三百十圖



縫ひ方。

(一) 袖。

(イ) 袖口に、レースを縫ひ付ける。

(二) 裾。

(イ) 見返しの付け方は、小裁ちシャツに同じ。

同じ。

(ロ) 頸廻りの見返しの付け方、裾口袖付け袖下脇等の縫ひ方は、半袖シャツに同じ(但し袖下、脇の縫ひ込みの折

りは、前の方に返す)。

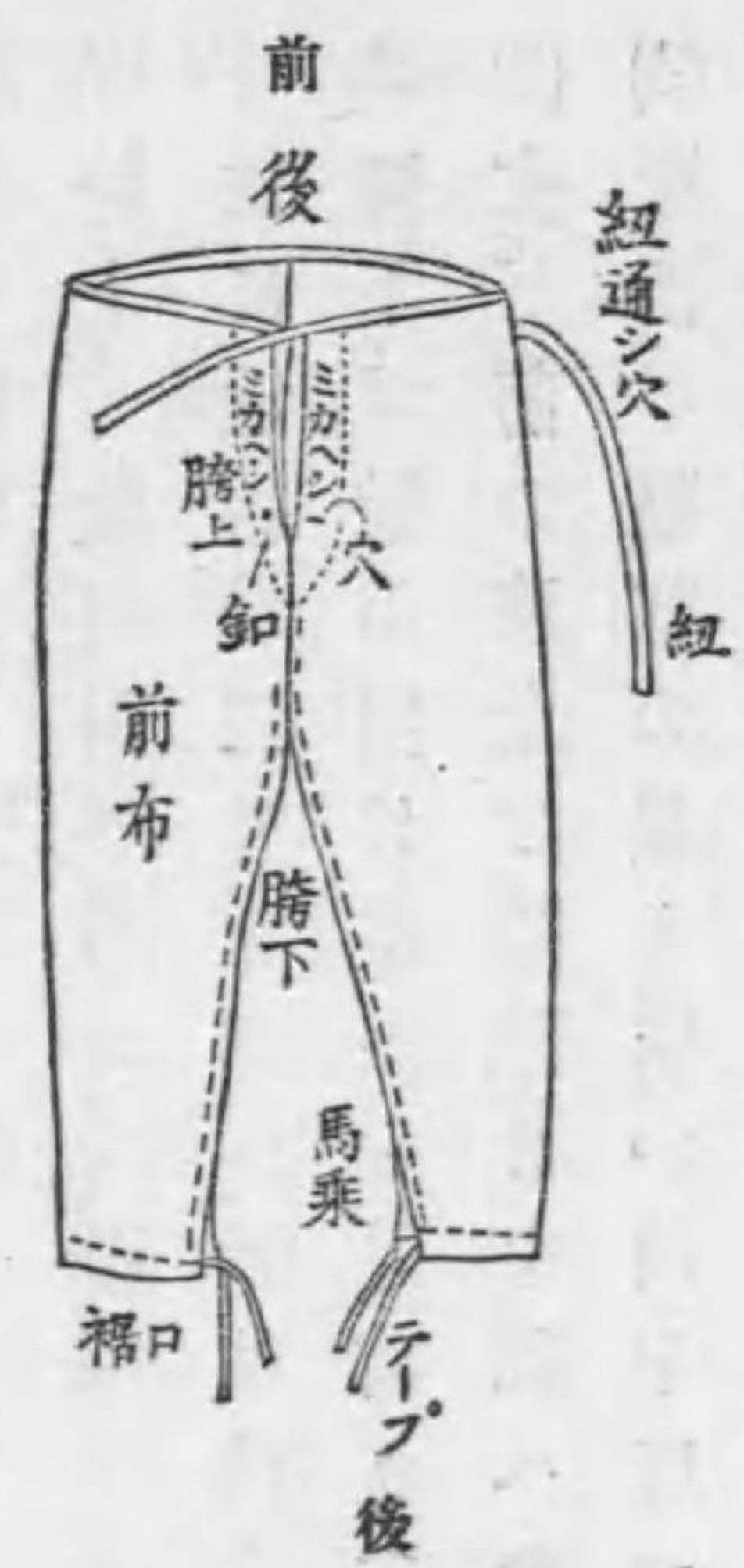
(ハ) 上前の衿の見返しに一つ、それより二寸五分位おきて二つ、都合三つ穴をあけ、穴膝りをして、下前には、それに合せて、鈕を附ける。

(ニ) 馬乗りに門止めをする。

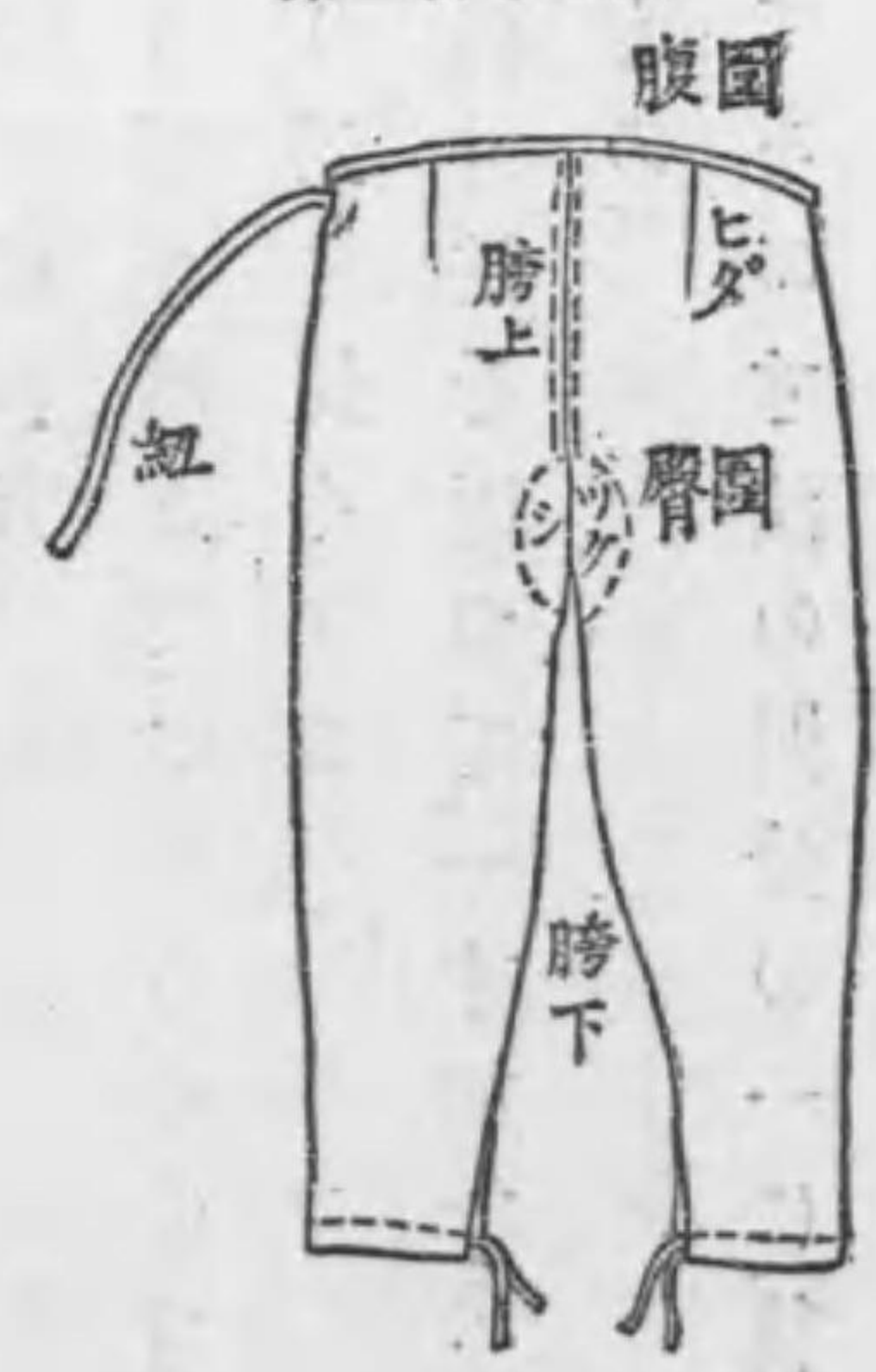
ズボン下

各部の名稱。

第三百十一圖



第三百十二圖



種類。

- (1) 紐付きズボン下
- (2) 腰廻り付きズボン下
- (3) 膝下股引仕

ズボン下

二八三

立てズボン下。
地質。前項シャツに同じ。

各部寸法の度り方及び裁ち切り寸法の定め方。

- (1) 胯上。股の付け根から、腹部の最も細き所までとする、その寸法に餘裕約二寸を加へ、後は前より二寸長くする。
- (2) 胯下。股の付け根から、足首までの寸法を度つて、一寸加へる。
- (3) 丈。前の胯上と、胯下とを加へたもの。
- (4) 腹圍。腹部の最も細い所を度つて、その寸法の四分の一に、後は二寸前は一寸を加へる。
- (5) 臀圍。臀圍の最も太い所を度つて、その寸法の四分の一に、後は四寸前は二寸を加へる。
- (6) 裾口。足首の周圍を度り、その寸法の二分の一に、後は一寸五分、前は一寸を加へる。

本裁ち紐付きズボン下

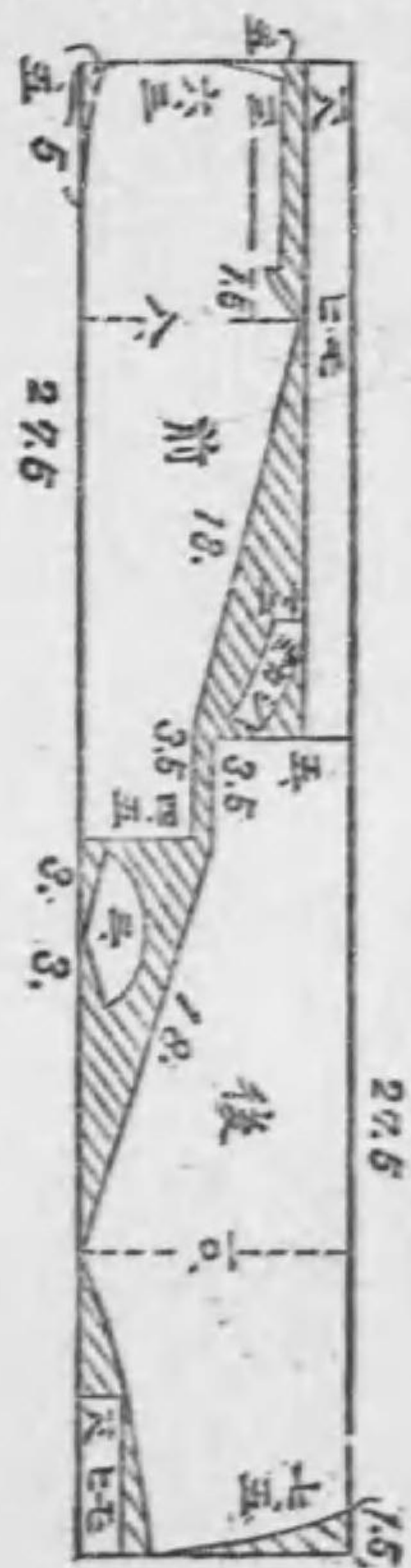
裁ち方、積り方。

幅二尺の布を以つて、本裁ち脇縫ひ目有り紐付きズボン下の裁ち方。附屬品、テープ、三尺五寸、釦、一箇。

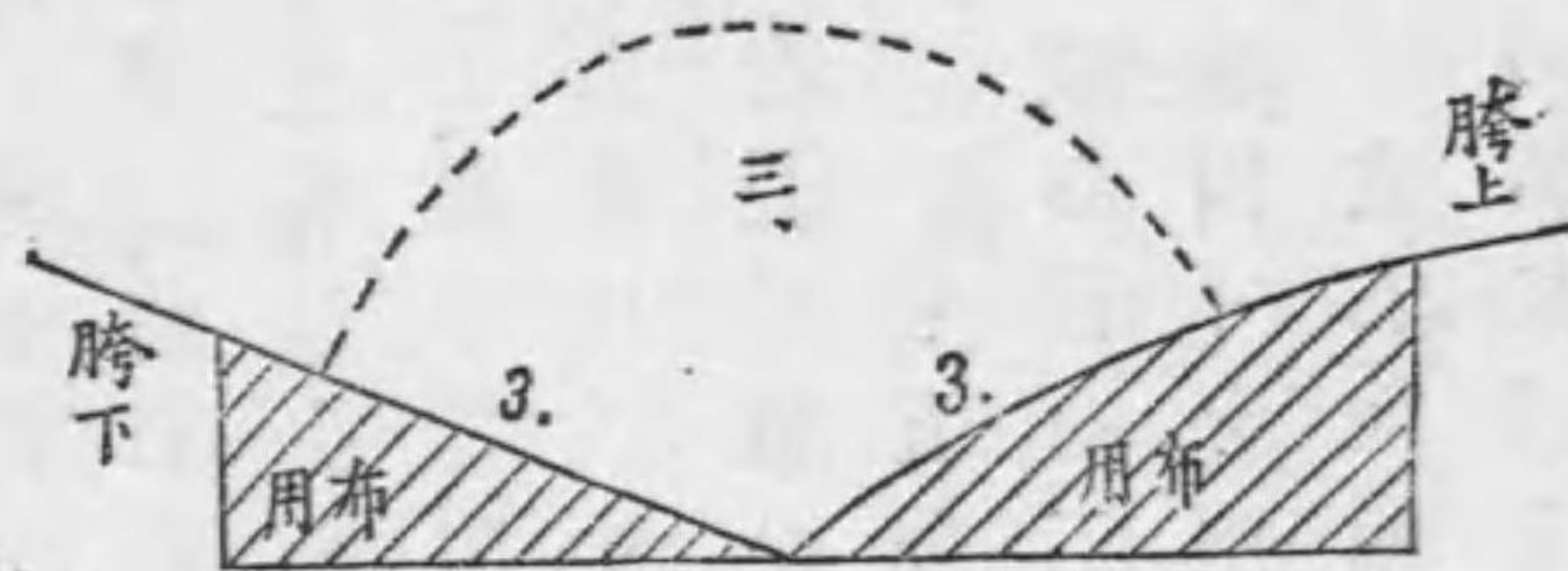
裁ち切り所要寸法。

胯上丈、後、一尺〇五分、前、九寸 胯下丈、一尺八寸、丈二尺七寸
 胯上幅、後、七寸五分、前、六寸三分 胯上止り幅、後、一尺、前、八寸。

第三百十三圖



シツクの取り方
第三百十六圖



見返の様に取り

- 縫ひ方(返し縫ひ、又はミシン縫ひ)。
- (イ) 前胯上。
- (1) 見返しに、足し布を接ぎ合せて縫ひ目を割る。
- (2) 前胯上の切り込み止まりから下を、左で右を挟んで四つ縫ひにする。
- (3) 見返し幅を、一寸に定め、裏に折り返し、飾りミシンをかける。
- (ロ) シツク。丸みの周囲を縫ひ縮めて、縫ひ代を裏に折り付け、胯上胯下の位置を合せて裏に當て、丸みの周囲をまつゝて置く。

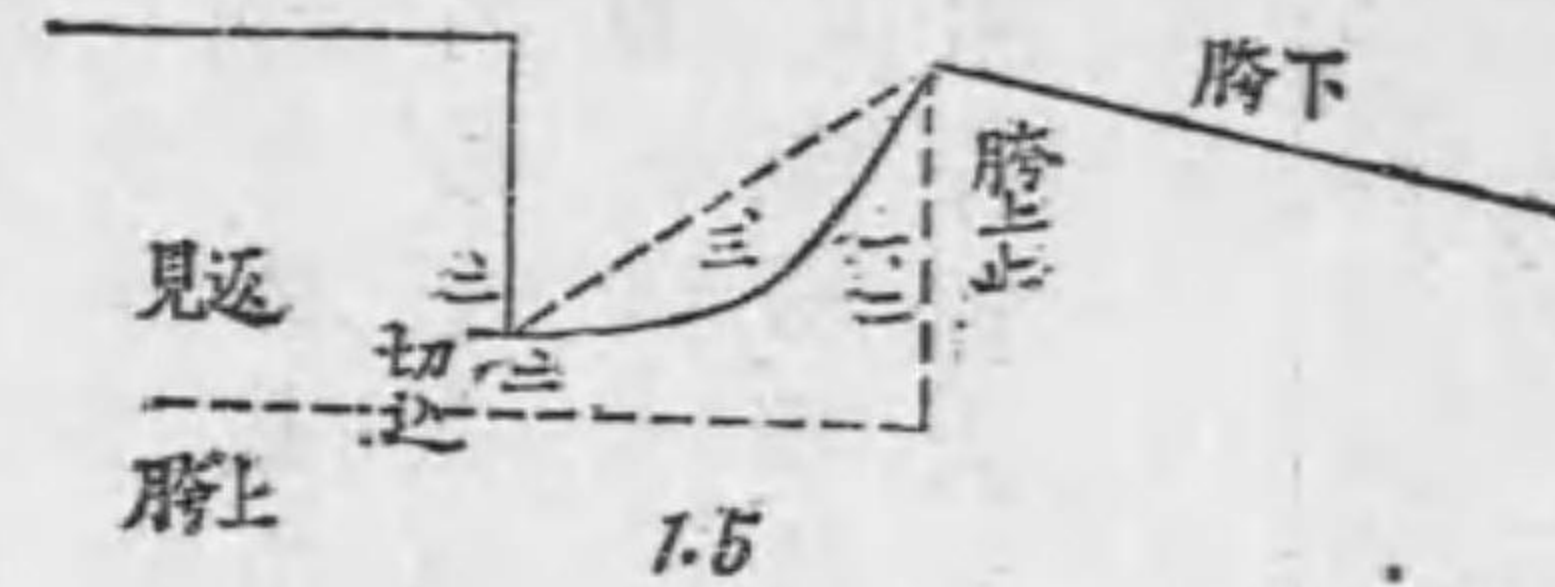
積り方公式 身丈×2+前後差-裁合=用布

同算式 27.5×2+1.5+4.5=52

分解圖

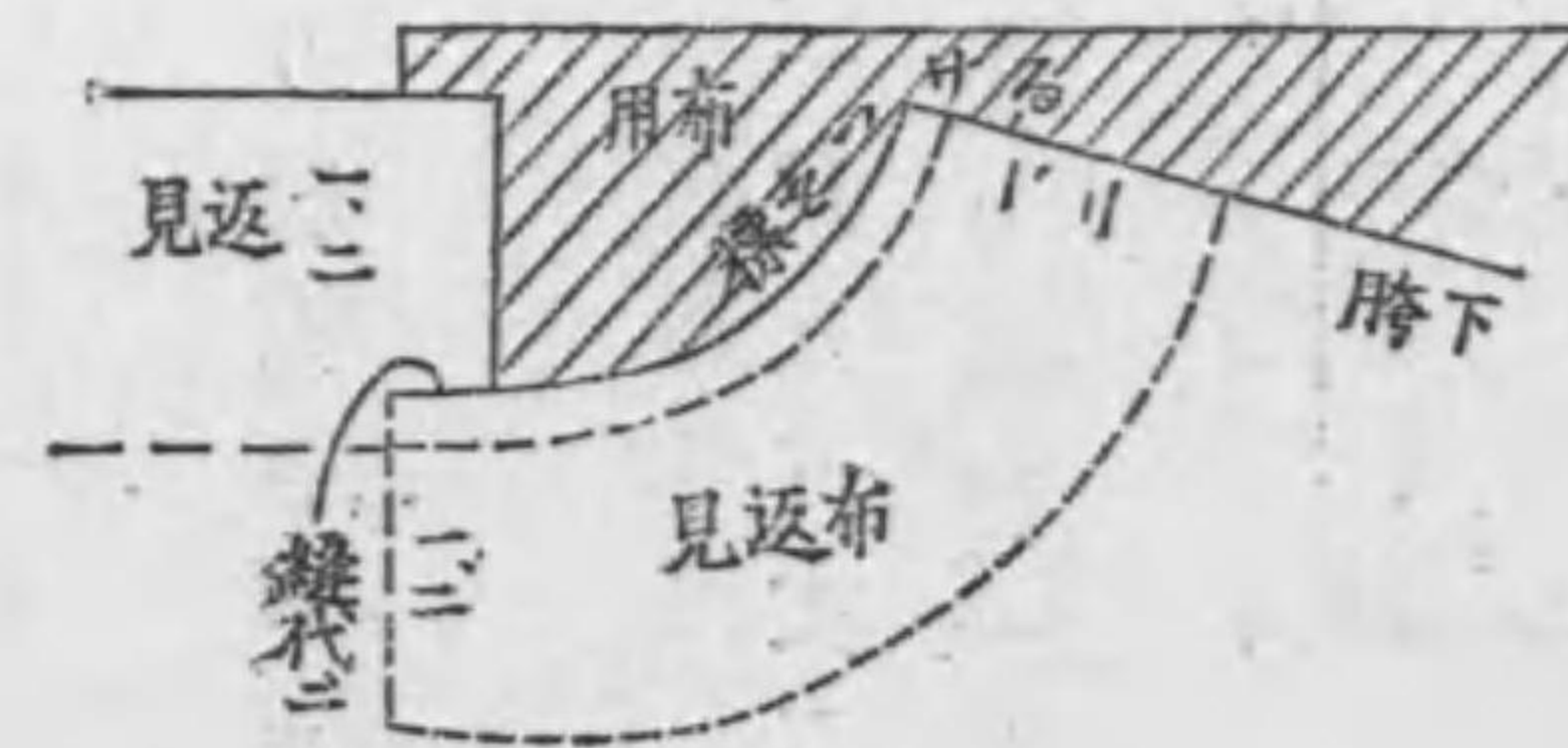
第三百十四圖

前胯上の裁ち方



見返布の取り方

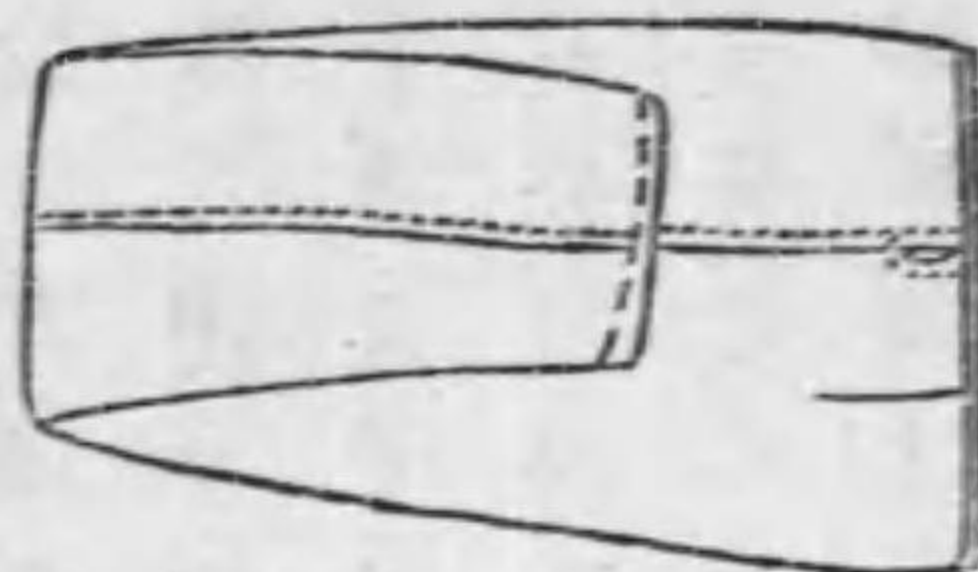
第三百十五圖



1. 用布の上に前布を重ねる
2. 胯下及び胯上を、前布にて合せて、標を付ける
3. 前布をどりのけ、圖の様に1.2幅に標をつけて、見返布を取る

- (ハ) 後脰上。左右を縫合せ、縫目を割り、三つ折りにし、纏りつける。
- (ニ) 脇縫ひ。後を二分前を一分の縫ひ代にして、後布の方から見て脇を縫ひ、前布の方に折りを付け、端を折つて纏りつける。但し左脇は上から一寸五分、縫ひ残して、縫ひ込みを前後に開いて、纏つて置く。
- (ホ) 脰下。馬乗り三寸五分を、縫ひ残して、縫ひ代、後二分、前一分にして、後を見て縫ひ、折りは前に返して纏り附ける。
- (ヘ) 馬乗り。三寸五分の所を、三つ折りにしてまつる。
- (ト) 裾口。裁ち目を二分裏に折り返し、更に四分の幅に折つて、テープの端四寸を両端に出し、其中に入れて纏りつける。
- (チ) 紐附け。左右後幅の中央に、襷を五分か六分取つて、表襷山を脇縫ひの方に返して、麩けて押へ、紐は左の方へ七寸出して附け、紐幅の上りを五分か六分にして、紵け附ける。

方 疊み
第三百十七圖



- (リ) 門止め。前脰上止まり、左右裾口の馬乗り止まり、紐通しの穴の上下に、門止めをする。
- (ヌ) 穴膝り。前脰上止まりから、一寸五分上つた所に、左に穴を明け、奥門にして、穴膝りをする。穴に合せて、右の方は釦を附ける。
- (ル) 仕上げ。糸屑を取り、霧を吹き、アイロン又は、鏡にて皺をのばし、脰下は、脇の縫ひ目をよく合せて、幅の中央に折りをつける。備考。各部の縫ひ目に、ミシンをかけてもよい。

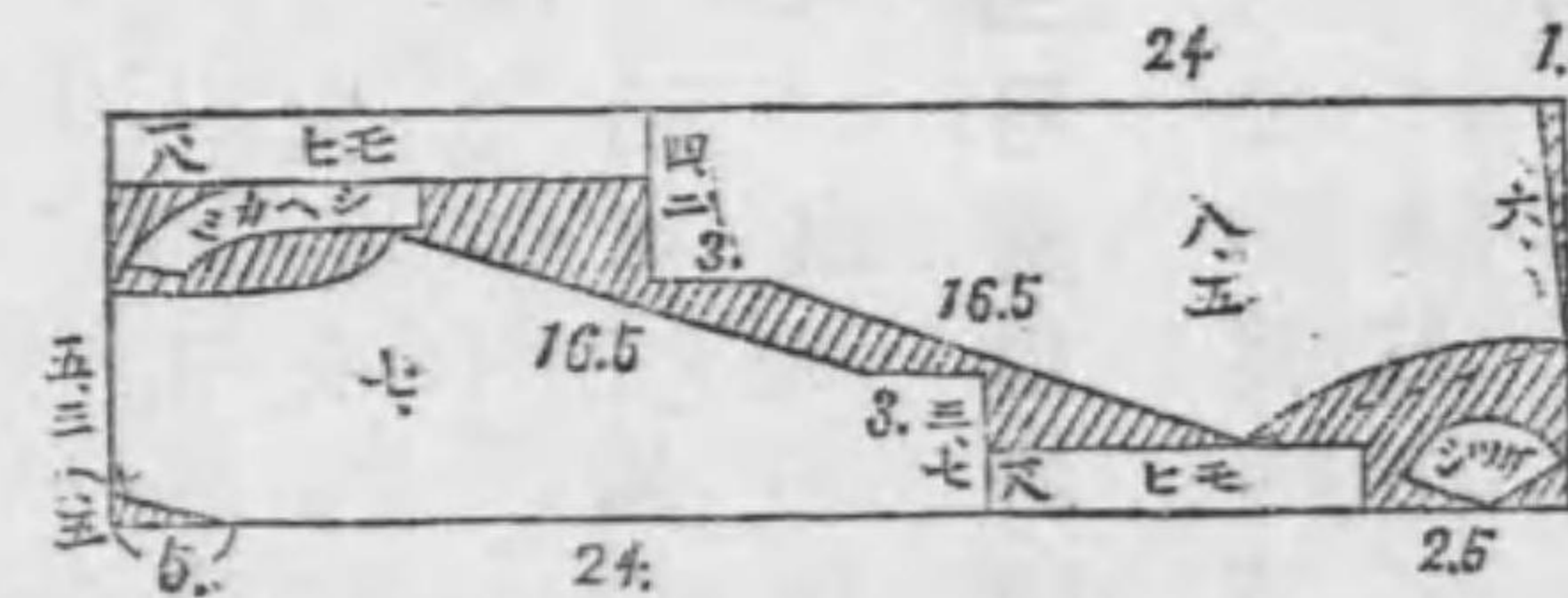
十三四歳用紐附きズボン下

各部の名稱寸法の度り方、裁ち切り寸法の定め方、地質等、總べて本裁ちに同じ。
裁ち方、積り方。
幅二尺の布を以つて、十三四歳用紐附きズボン

下の裁ち方、積り方。
所要裁ち切り寸法。

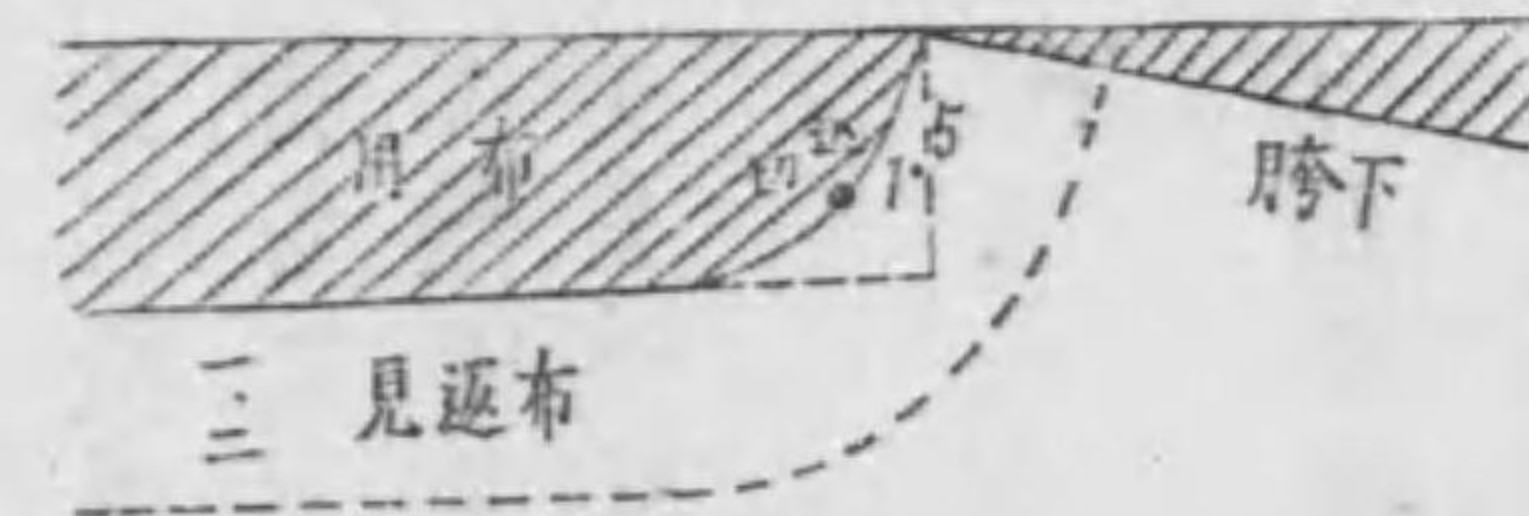
胯上、後八寸五分、前七寸五分
胯下、一尺六寸五分、丈二尺四寸
裾、後、四寸二分、前三寸五分
胯上止まり
幅、後、八寸五分、前七寸
胯上、後、六寸五分、前五寸
紐、丈五尺、幅一寸八分
シツク幅、二寸五分。

第三百十八圖



積り方公式 身丈×2+前後の差-裁合=用布
同算式 24×2+1-9=40

見返布の取り方
第三百十九圖



切込みより下 1.5を四縫にする

縫ひ方。

見返しが左右同じ形で、表につくのみで、他は本裁ちに同じ。

三四歳用紐付きズボン下

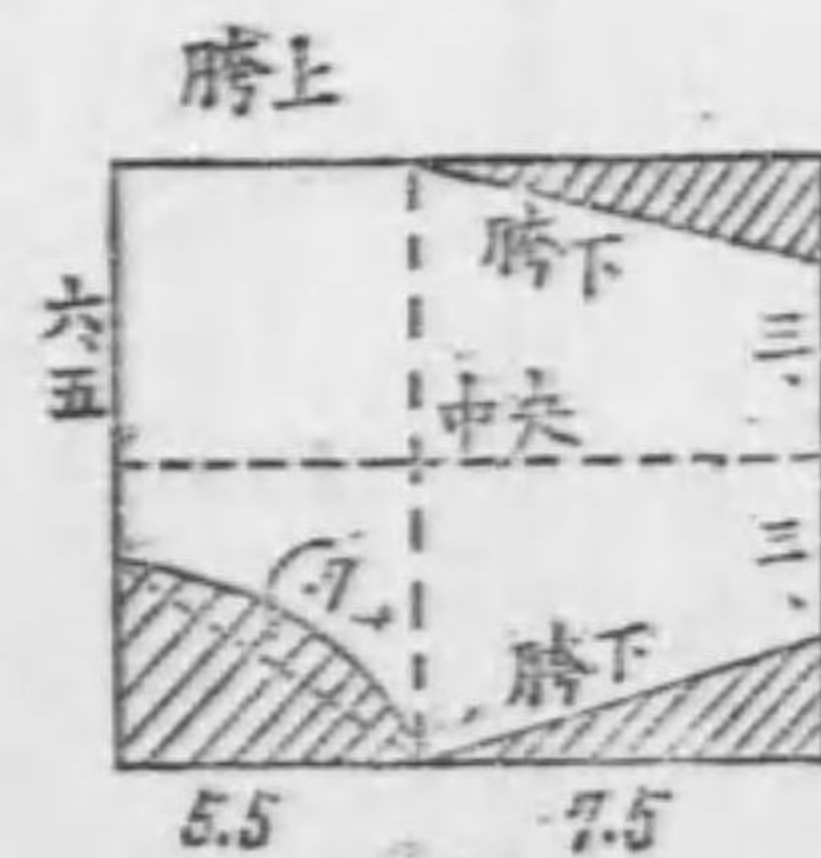
裁ち方、積り方。

幅一尺、丈二尺六寸の布を以つて、三四歳用、紐付きズボン下の裁ち方、積り方。

所要裁ち切り寸法。

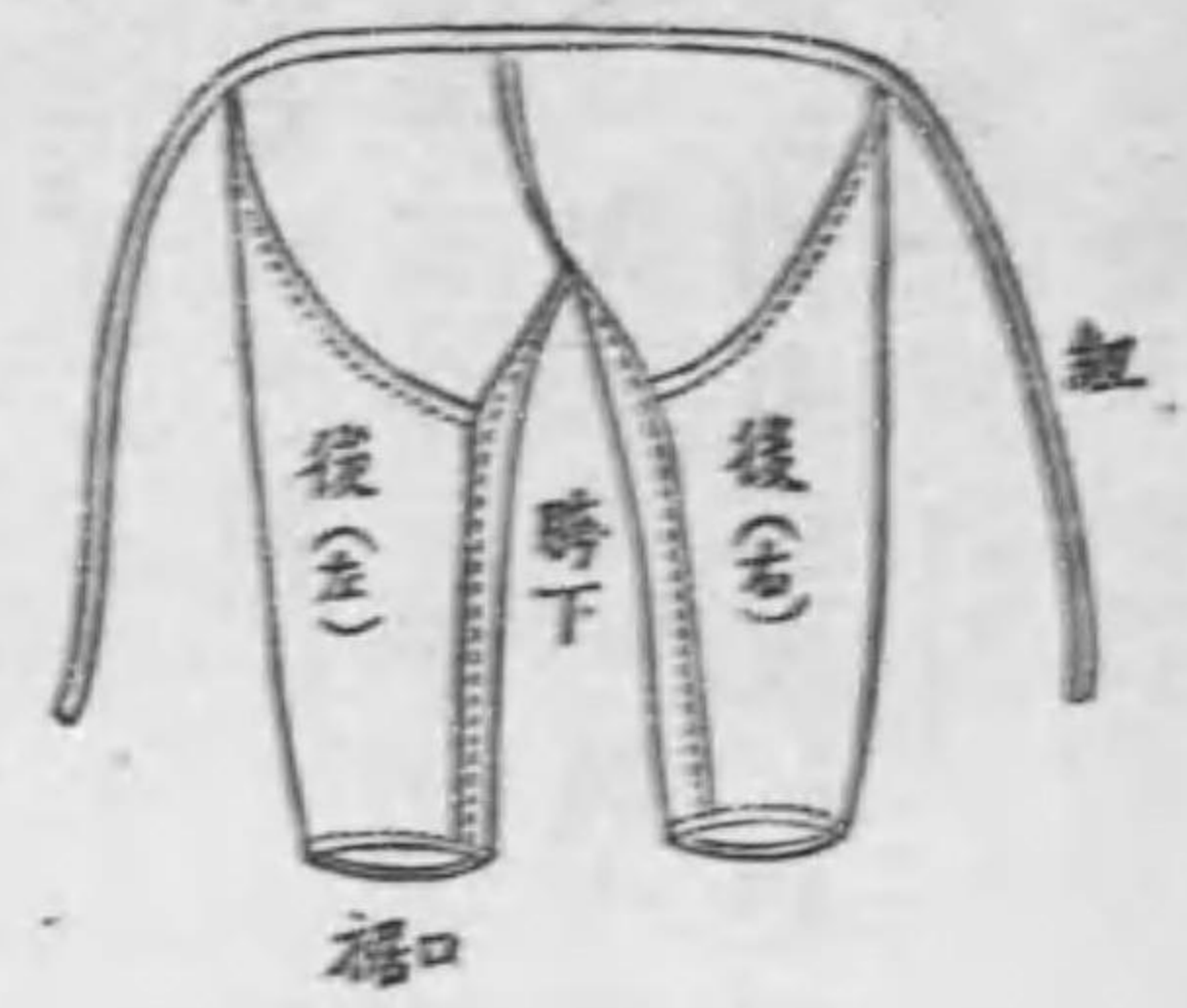
胯上、五寸五分
胯下、七寸五分
丈、一尺三寸
胯上幅、六寸五分
裾口、六寸
紐、丈、三尺五寸、幅、一寸五分。

第三百二十圖



積り方公式 身丈×2=用布
同算式 13×2=26

出来上りの圖
第三百二十一圖
後



第三百二十二圖
前



縫ひ方。

- (イ) 後膝上。一分の上りに、三つ折りにして纏る。
- (ロ) 膝下。前後の膝下を合せ、後二分、前一分の縫ひ代にして縫ひ、前の方に折り返し、縫ひ代を、くるんでまつる。
- (ハ) 前膝上。一分の上りに、三つ折りにしてまつる。
- (ニ) 裾口。一分の上りに、三つ折りにしてまつる。

(ホ) 紐付け。左足を、右足の上に五分重ねて、膝しておさへ置き、紐の中央と、五分重ねた中央とを合せて、縫ひ代を、二分か三分にして紐を付け、紐幅を、五分の上りにして、紐先の両端を縫つて、縮け附ける。

(ヘ) 仕上げ。

本裁ち腰廻り付きズボン下

各部の名稱。腰廻り布を附けるのみで、他は紐付きズボン下と同様。

各部寸法の度り方、裁ち切り寸法の定め方、用布の地質等は、紐付きズボン下と同様。

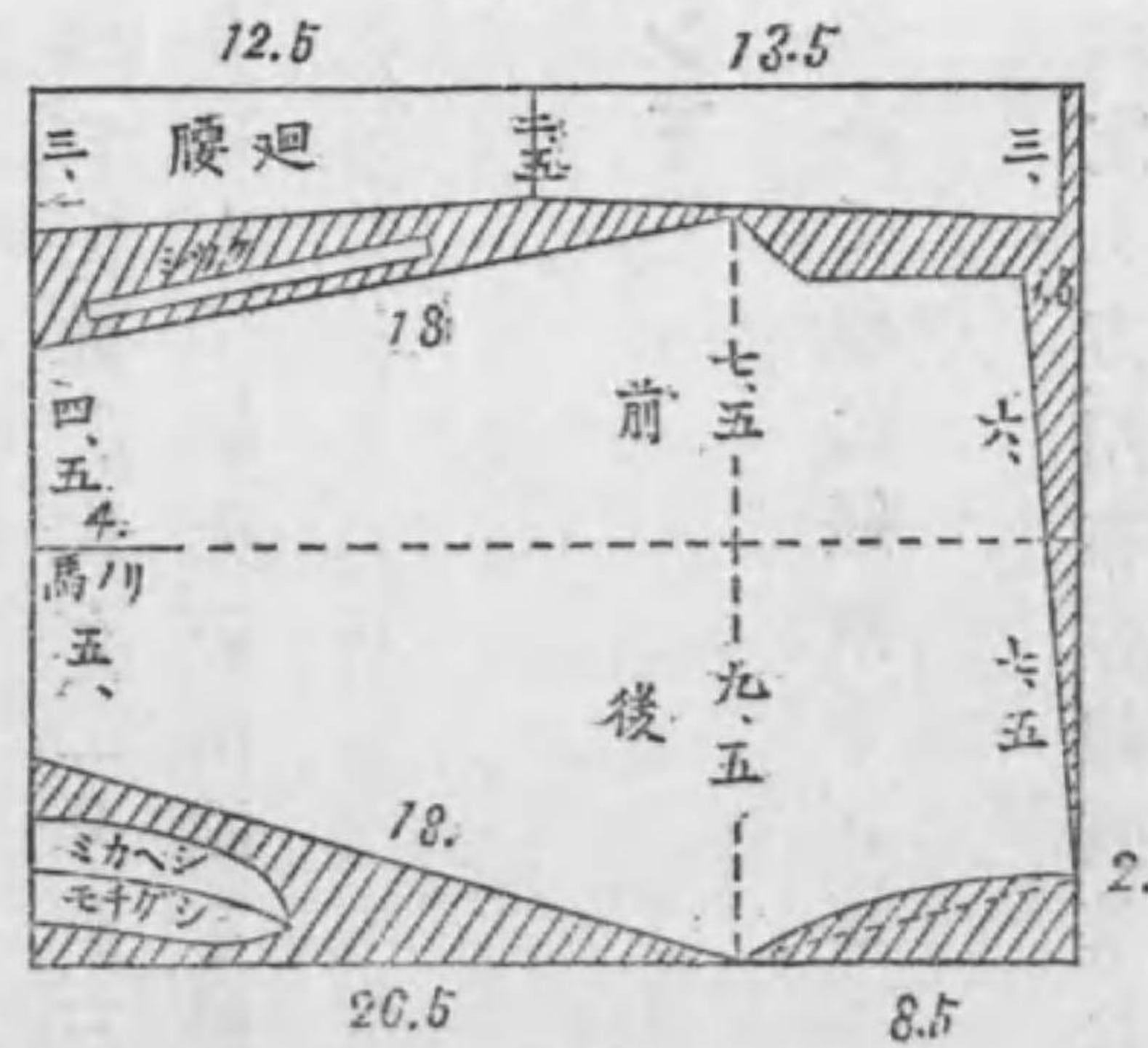
裁ち方積り方。

幅二尺の布を以つて、脇縫ひ目なし腰廻り付きズボン下の裁ち

方、積り方。 附屬品、テープ、五尺、ボタン五個。
所要裁ち切り寸法。

胯上、後、八寸五分、前、七寸 胯下、一尺八寸 丈、二尺六寸五分
胯上止まり幅、後、九寸五分、前、
七寸五分 胯上幅、後、七寸五
分前、六寸 裾口、後、五寸、前、四
寸五分 腰廻り丈、左足、一尺
二寸五分、右足、一尺三寸五分
腰廻り幅、後、五寸、前、三寸
馬乗り四寸。

第三百二十三圖

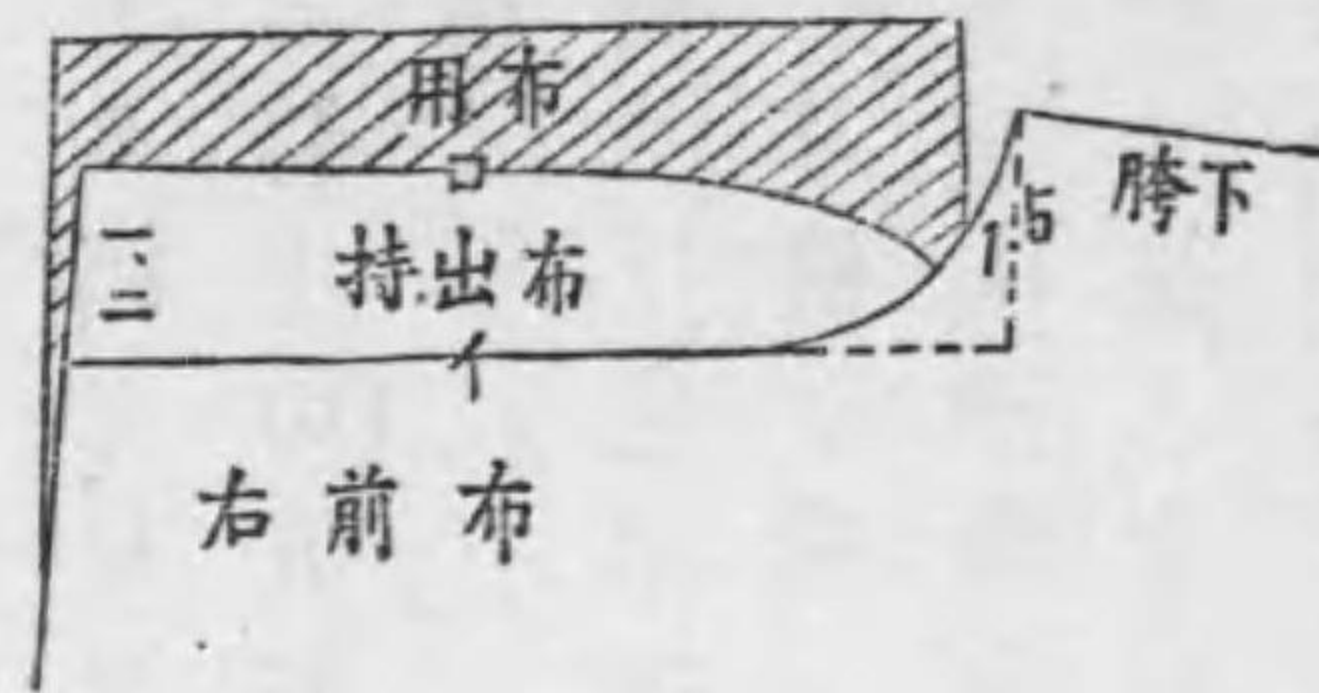


積り方公式 (後胯上+胯下)×2=用布

同算式 (8.5+18)×2=53

第三百二十四圖

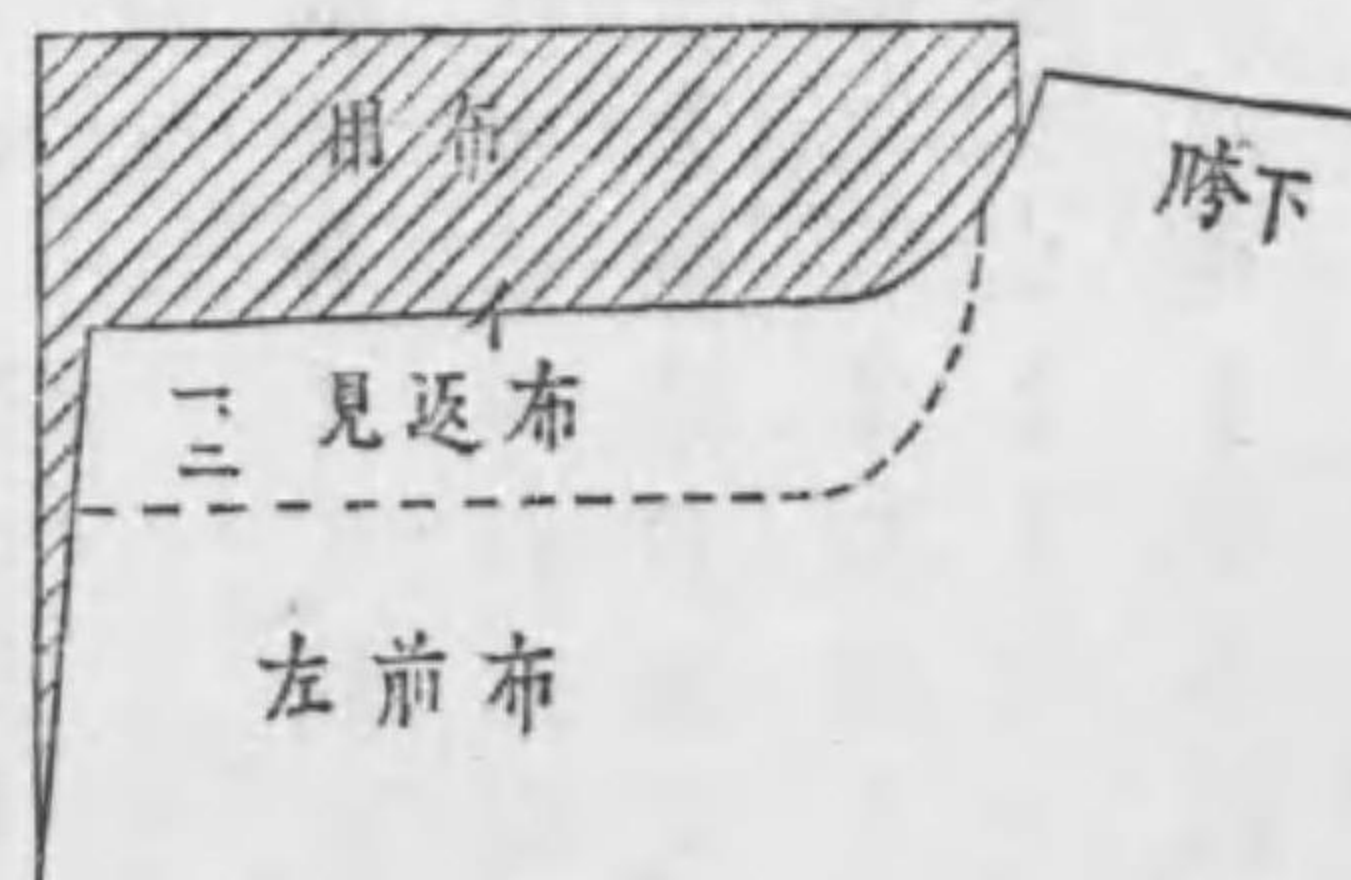
持出布の取り方



1. 用布の上に前布をのせる
2. (イ)の所に標を附ける
3. 1.2幅の圖の様な形に取る(ロ)

見返布の取り方

第三百二十五圖



1. 用布の上に前布をのせる
2. (イ)の所に標を附ける
2. 前布を取りて、1.2幅の圖の様な形に取る

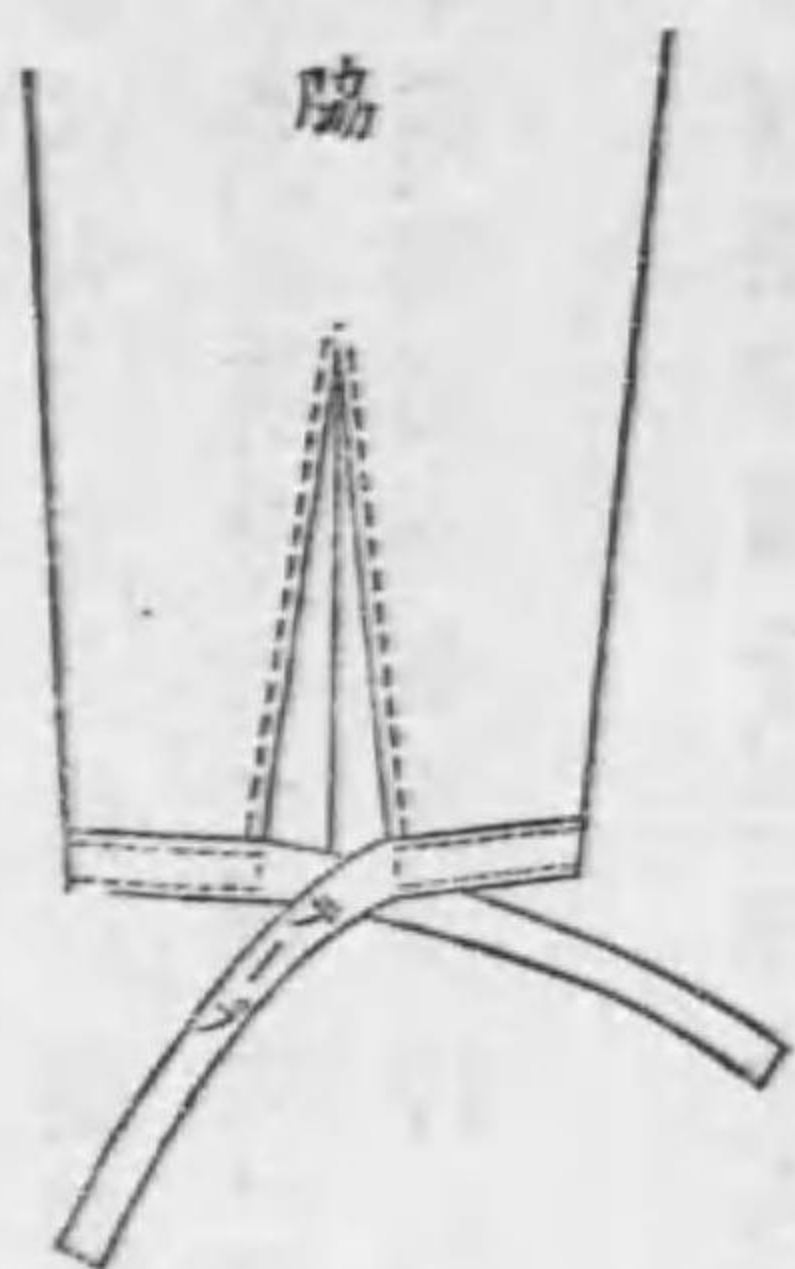
(イ) 縫ひ方。
前胯上。

(1) 前胯上の切り込みから裏に見返しの表を合せて縫ひ付け、
前胯上の方に折りを附け、見返しを表に返して、見返しの幅

- を八分にして、表から周圍に、飾りミシンを掛ける。
- (2) 持ち出し布の、表裏を、前の胯上につく方さ、上になる方さを残して縫ひ合せ、前胯上の、切り込みから上に、持ち出し布を中表にして縫ひ付け、折りを持ち出しの方に戻して、持ち出しの裏の縫ひ代を折り、表からミシンをかける、持ち出しの上り幅を見返しと同じにする。
- (3) 前胯上の左右を、切り込み以下、縫ひ合せて、縫ひ目を割つて置く。
- (ロ) 後胯上。上の方で、二寸残して胯上を縫ひ合せて、縫ひ目を割り、二寸縫ひ残した所を、三つ折りにしてまつる。
- (ハ) 胯下。(1) 前後の胯下を合せて、馬乗り止まりから、止まりまで、前一分後二分の縫ひ代で縫ひ、折りは前に返して、三つ折りにしてまつる。

裾口の圖

第三百二十六圖

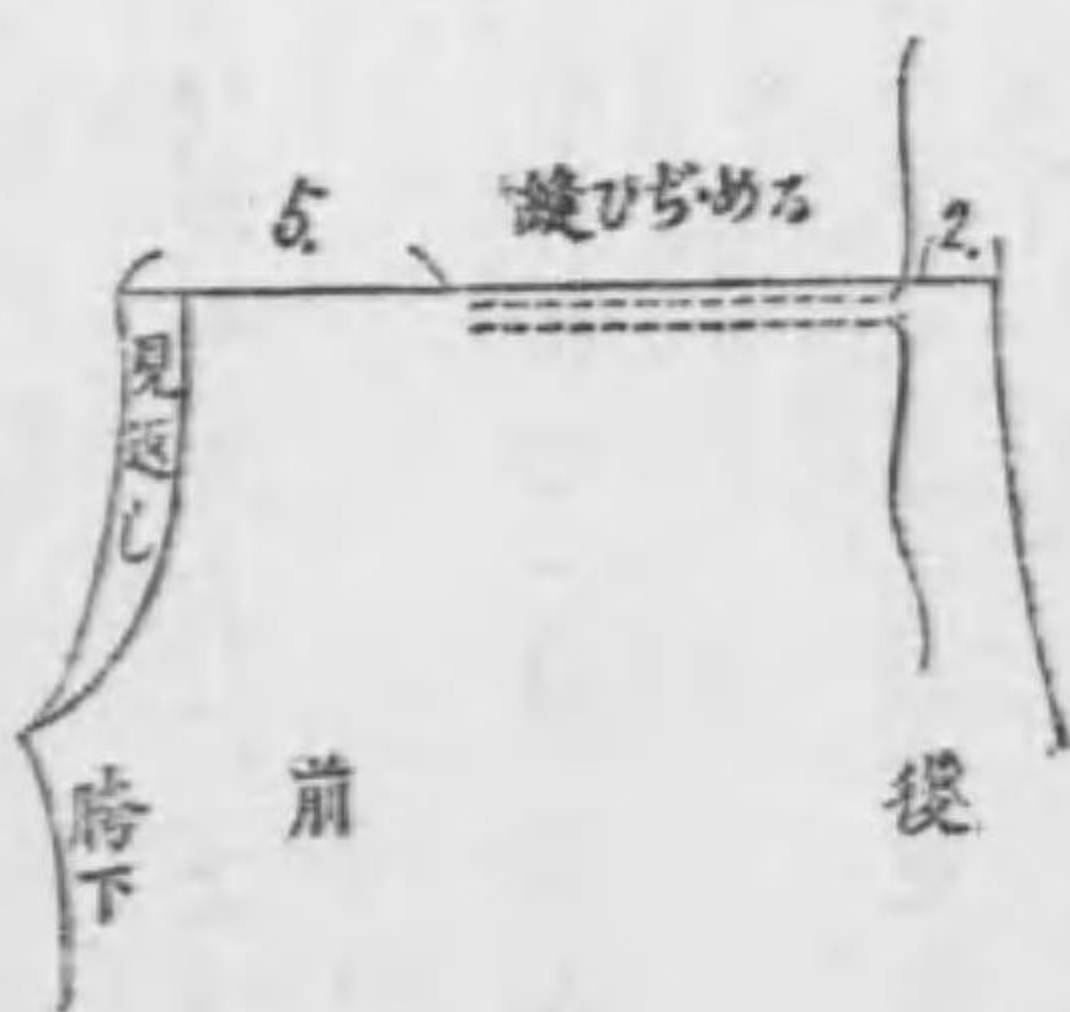


- (2) 馬乗り四寸の所を三つ折りにしてまつる。
- (ニ) 裾口。裁ち目を表に二分折り返して、テープを兩端へ四寸出し、その上にのせてミシンを掛ける。

- (ホ) 腰廻り。(1) 腰廻りの、斜の方を、残して、表裏を縫ひ合せる。
- (2) 左右胯上幅の、腰廻り丈より広い部分、を、圖に示す位

- 置に於いて、縫ひぢめる。
- (3) 腰廻り幅の、広い方を前に、狭い方を後にして、裾に縫ひ付け、折りは腰廻りの方に返して、裏の縫ひ代を折つ

第三百二十七圖

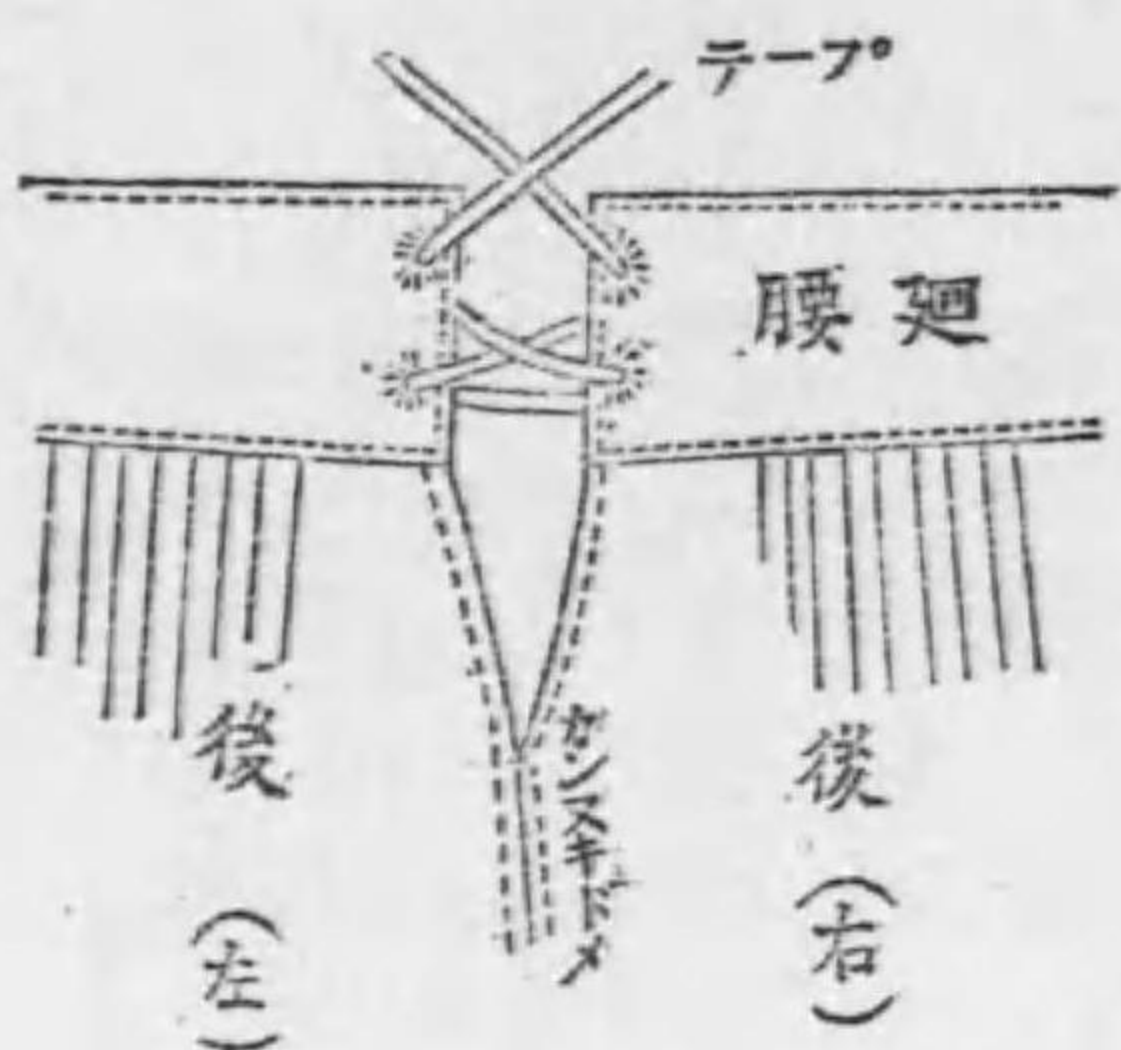


- (ヘ) シツク。胯上の縫ひ代をくるみ、端を劍形に折り、左右にまつり附ける。
- (ト) 門止め。後胯上の止まりと、左右の馬乗り止まりとに、門ごめをする。
- (チ) 釦及び穴。左上前の腰廻り幅を、四等分して横穴三個、又見返し丈を、三等分して、横穴二つをあけて、穴膝りをする。
- 右下前、腰廻り布、及び持ち出しには、上前の穴に合わせて、釦を附ける。
- 後の腰廻り幅を、三等分して、直径二分の菊座穴を二箇づ、開け、穴膝りをして、テープを千鳥に通す。
- (リ) 仕上げ。

てミシンを掛ける。

第三百二十八圖

テープの通し方



前

第三百二十九圖



各部の名稱。

本裁ち胯上股引仕立てズボン下

端を折りてまつり附ける。

(ロ) 胯下。馬乗りを四寸残して縫ひ、前布の方に折りを返し、端を折りて、まつり附ける。縫ひ代は前と同様。

(ハ) 馬乗り。後の止まりに切り込みを入れ、三つ折りにして左右をまつる。

(ニ) 裾口。裾口から二分裏に折り、四分の出来上り縮け代として、テープを半分に切り、その中に入れてまつる。

(ホ) 胴廻り布。真直な方を幅一分に出来上る様に、三つ折りにしてまつり附ける。

胴廻り布の幅の廣い方を後に、狭い方を前に合せて、胴廻りの方を一分、身の方を二分にして縫ひ、胴廻りの方に折りを返して、前と同じにまつる。

(ヘ) 紐附け。上前(左)を上、前胴廻りの布幅だけ重ね、縫ひ目は突

き合せになる様にして、縫い代をおさへて置く。

紐を上前に七寸出して附け、幅を五分の出来上りにして縮け附ける。

(ト) 門止め。裾口馬乗りに門止めをする。

(チ) 仕上げ。

十三四歳用股引き仕立てズボン下

寸法の定め方、地質等、本裁ちと同じ。

裁ち方、積り方。

幅二尺の布を以つて、十三四歳用股引き仕立てズボン下の裁ち方。

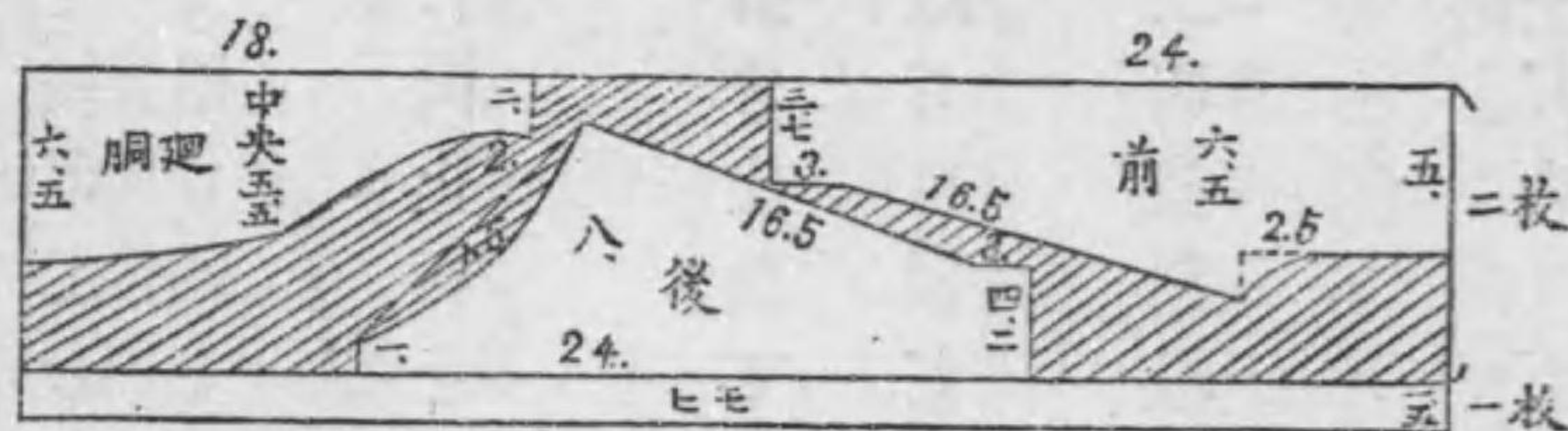
所要裁ち切り寸法。

胯上、七寸五分 胯下、一尺六寸五分 丈、二尺四寸 裾口、後四

寸二分、前三寸七分、
 分、胴廻り丈、一
 尺八寸、胴廻り
 幅、後につく方六
 寸五分、中央にて
 五寸五分、前に
 つく方二寸、胯
 上止まり幅、後八
 寸前六寸五分、
 胯上幅、後一寸、前
 五寸、紐布、丈四
 尺五寸、幅、一寸
 五分。

二尺の布幅から紐幅 1.5 取つて残りを二つ折りにする

第三百三十二圖

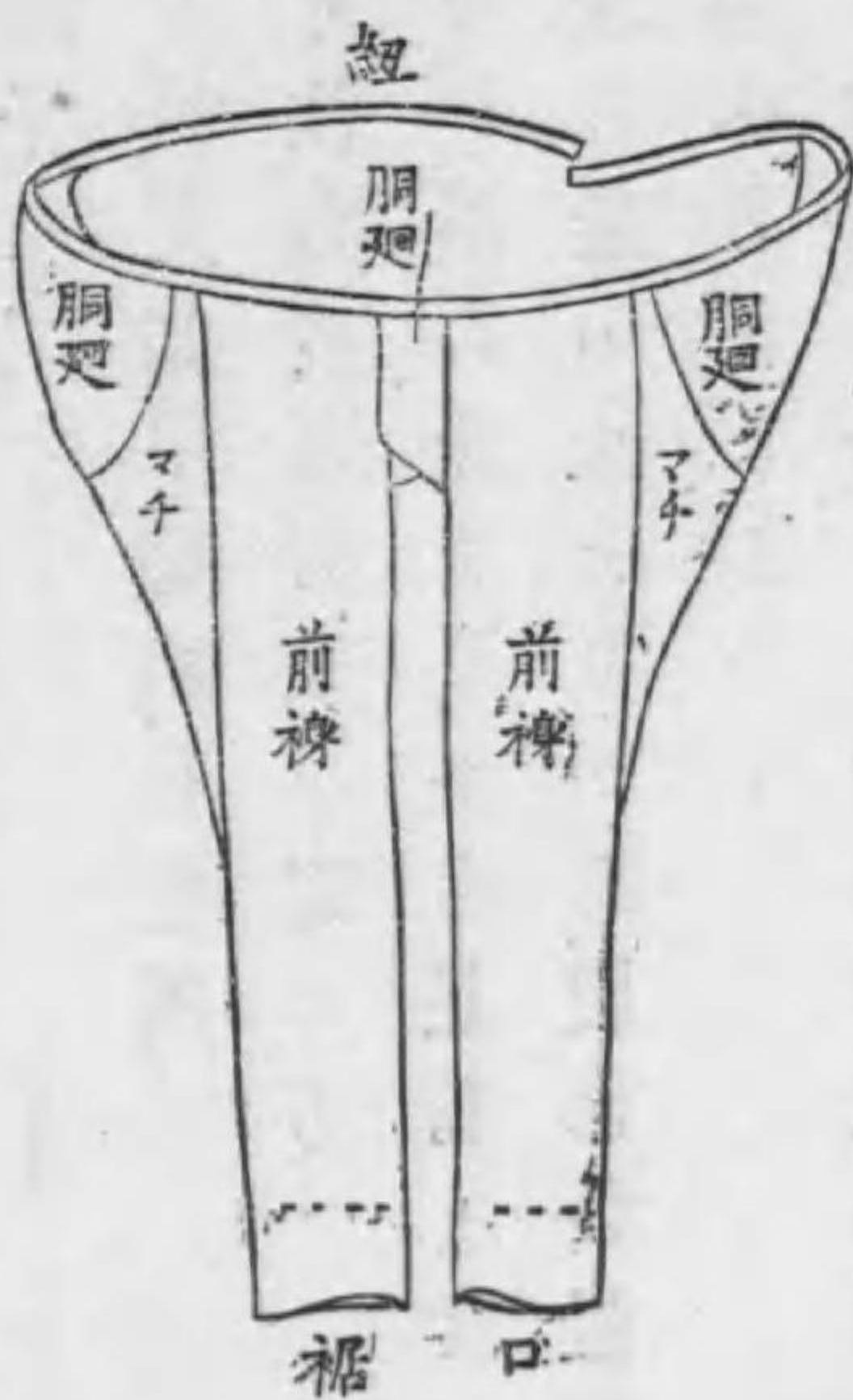


積り方公式 身丈×2+胴廻-裁合=用布

同算式 24×2+18-15=51

縫ひ方は、大人物に
 同じ。
 各部の名稱。
 股引

前
 第三百三十三圖



後
 第三百三十四圖



種類。(1)長股引。(2)半

股引。

長股引の種類。(1)袷股

引(2)單股引(3)綿入股

引(4)前通し股引(5)筒

裏股引(6)裾裏股引(7)

膝裏股引(8)皮並股引

(9)パツチ(10)婦人用股

引。

地質。

綿布、盲縞、藍色木綿、
 織色木綿、千草木綿、天
 竺木綿、金巾、縮、綿、木ル、

毛織子。

絹布 Ⅱ 秩父絹、甲斐絹、花色絹。

各部寸法の度り方、及び定め方。

胯下。股の止まりから足首までの寸法に、餘裕一寸を加へる。
胯上。股の止まりから腹部の最細き所の寸法に、餘裕約二寸を加へる。

丈。胯上と、胯下とを合せたもの。

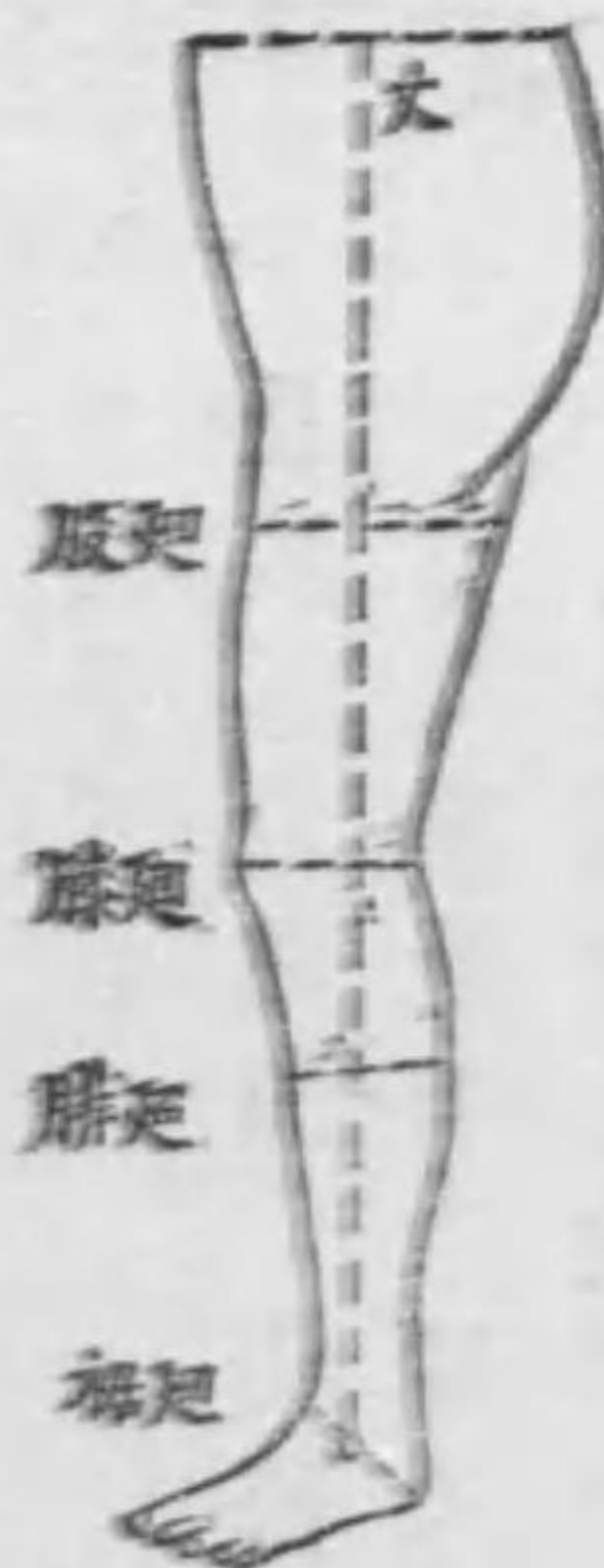
腿。度つた寸法に、縫ひ代八分と、ゆるみの三分を加へる。

膝。同上。

脛。同上。

裾口。甲から踵の方に斜に度つた寸法に、五分を加へる。

第三百三十五圖



緩み代の、附け方。

股引は、普通三分以上、五分の緩みを加へる。
パツチは、八分以上、一寸のゆるみを加へる。

裕股引

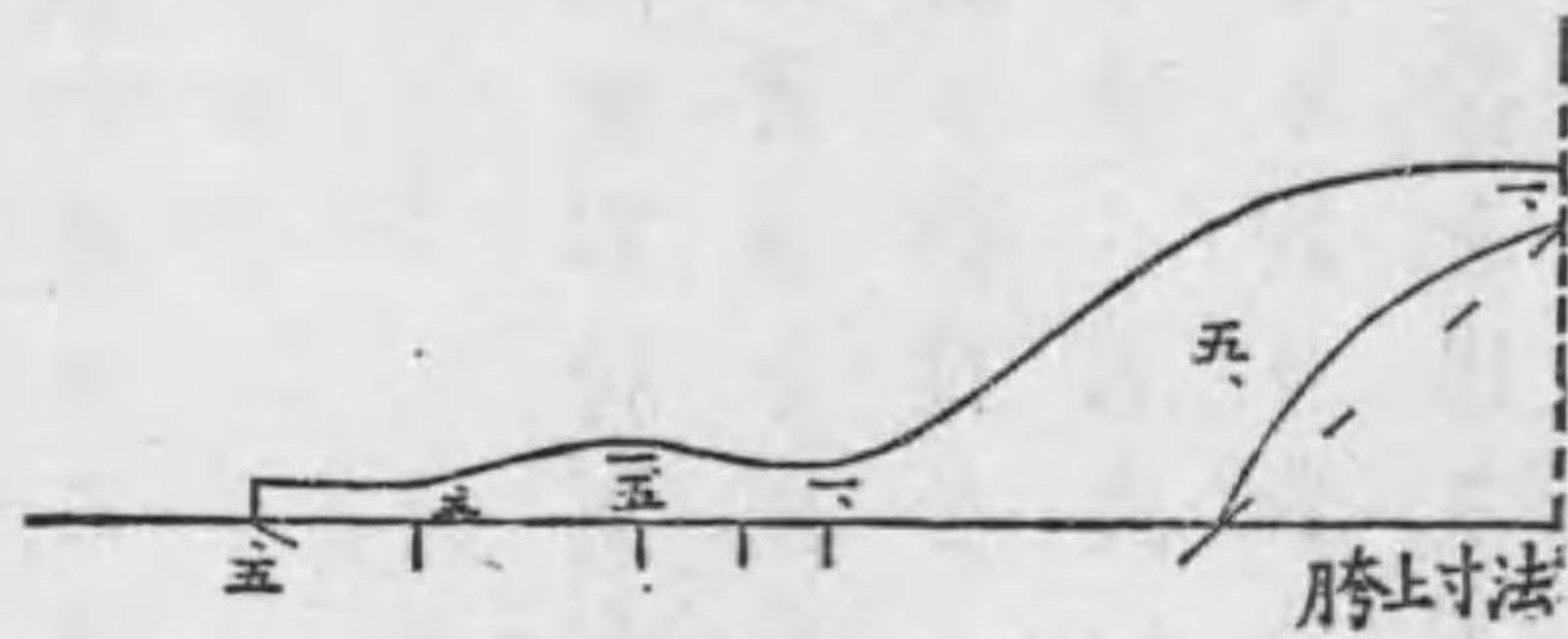
裁ち方、積り方。

常幅の布を以つて、本裁ち裕長股引の表の裁ち方。

所要裁ち切り寸法。

胴廻り、丈一尺九寸 幅八寸、六寸五分、三寸 襠丈、一尺八寸、二尺六寸(斜に度りて) 身丈、二尺六寸 裾口、八寸五分 胯上、八寸、胯下、一尺八寸。

第三百三十九圖
襠の裁ち方

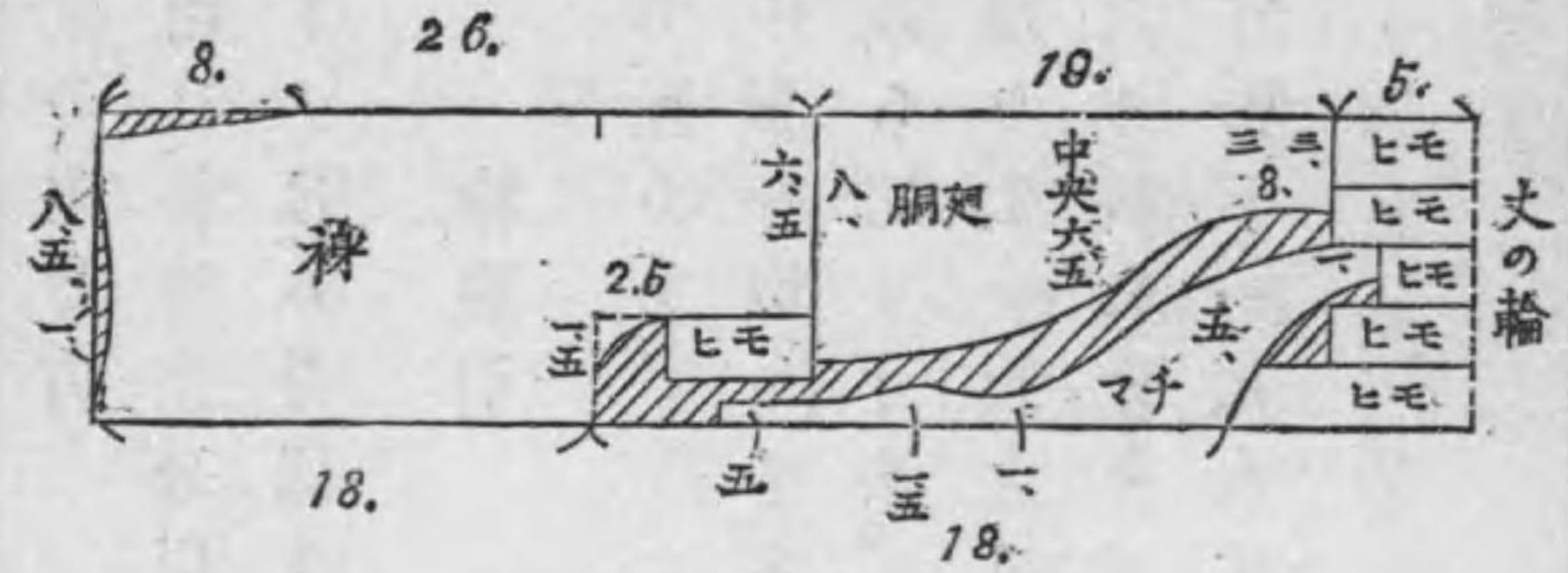


中央より一寸五分上りて膝
 膀の中央
 膝より裾口までの三分の一
 裾口より三寸の間五分幅

裏の裁ち方。紐を除く
 外すべて表に同じ。
 縫ひ方(縫ひ糸は、捻り糸
 を用ひ、且斜の箇所を縫
 ふ時は、三針縫つては、一
 針返す様に縫ふ)。

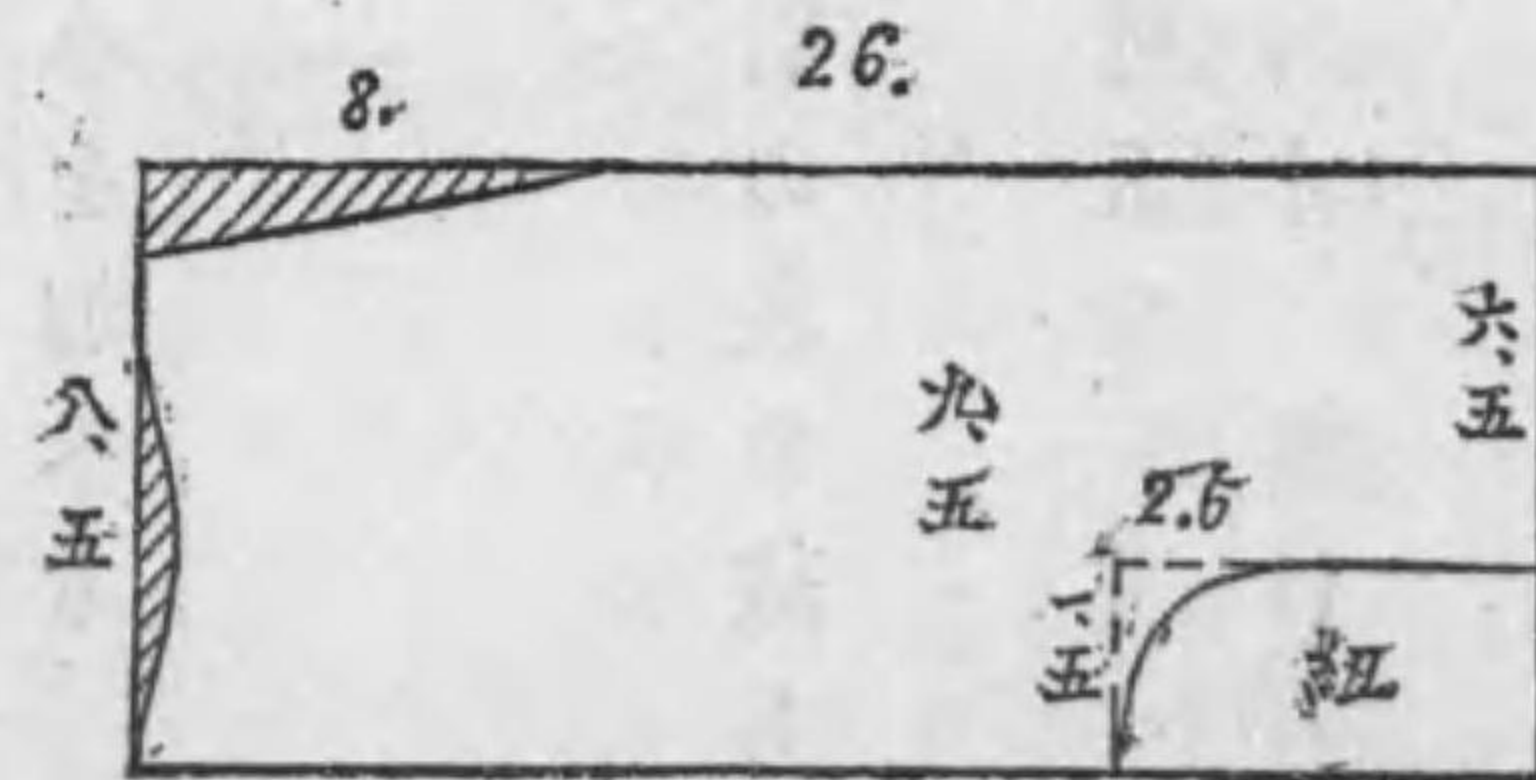
(1) 裾口。
 (1) 表と裏の襠の裾口
 を裏の方が、一分縫
 ひ込まれる様に重
 ねて縫ひ、折りを裏
 の方につけ、表に引
 き返して、表を五厘

第三百三十六圖
丈を二つに折る



積り方公式 (紐丈+襠丈+胴廻丈) × 2 = 用布
 $(5 + 26 + 19) \times 2 = 100$

第三百三十七圖
分解圖
襠の裁ち方



第三百三十八圖
胴廻



裏に折り返す。

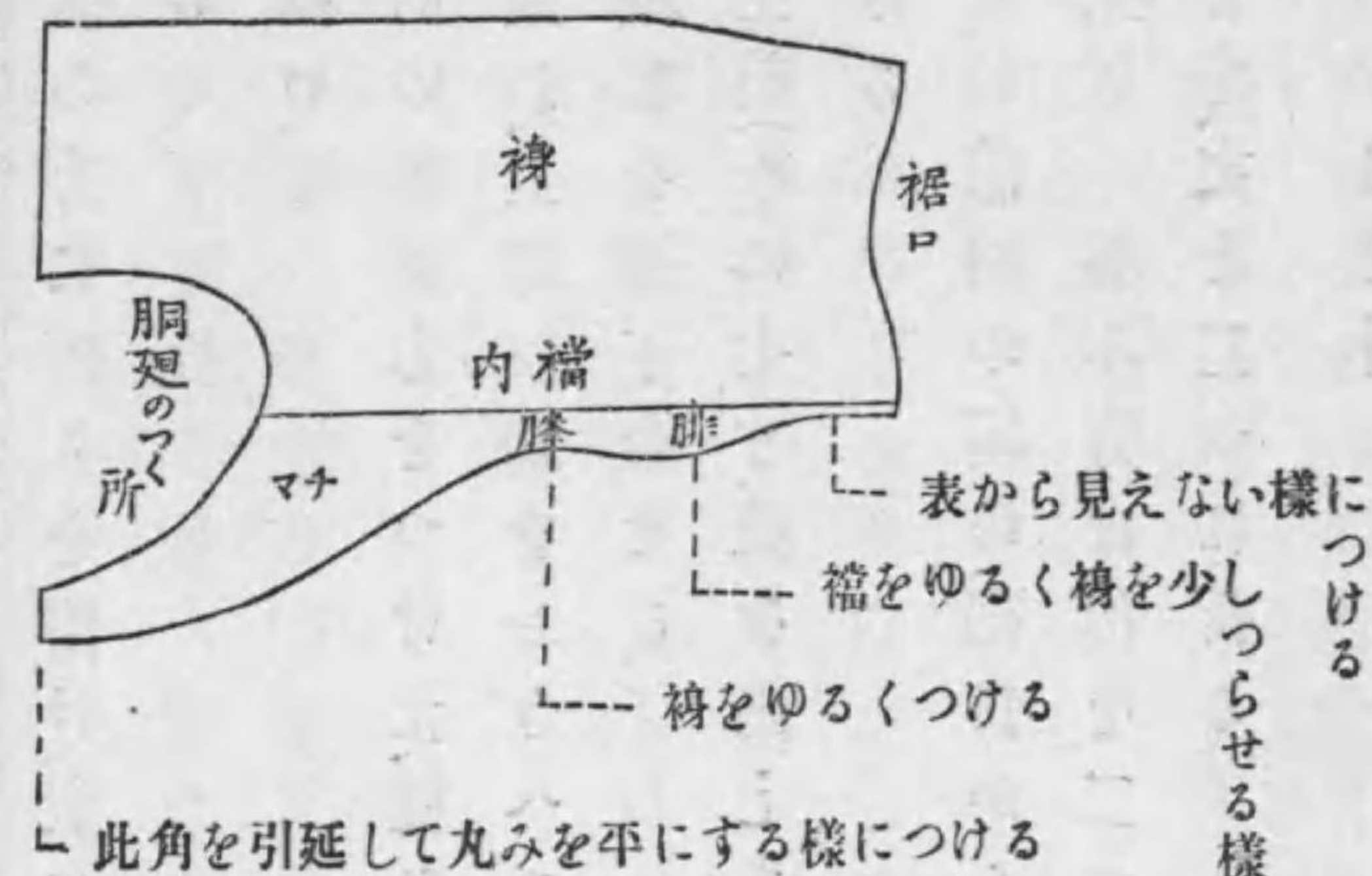
(2) 袴の裾口も、襠と同様に縫ふ(但し裾に形がつけてあるから、形の通りに縫ひ、縫ひこみの引きつれぬ様に、切りこみを入れる)。

(ロ) 襠付け。

(1) 内襠、即胯下を四つ縫ひにする、その縫ひ方は、袴の表裏で、襠の表裏を挟んで、裾口の縫ひ目をよく合せ、胯上止まりまで縫ふ(裾口をよくとめる)。

(2) 外襠。表裏の袴で、襠を挟んで、裾口から上まで四つ縫ひにする、釣り合ひの取り方は、裾口から三寸の間は、糸襠と云つて、襠を出さず、釣り合ひは平にさる。腓は袴を釣れ加減にする。膝は襠をつらせて、袴を緩めにする。

第三百四十圖
襠の釣合の取り方



それより上は、丸みを自然にのばして、平に附ける。

(ハ) 胴廻り。

(1) 胴廻りの幅の狭い方を前の胯上に、廣い方を、後の胯上に合せ、形のついた方を、袴につく様に、して、胴廻りの裏表で、袴を挟んで、前の胯上から、後の胯上まで、四つ縫ひにする。

(2) 胴廻り布の眞直な所を、裏を一分多く縫ひ込む様に、して、表裏縫ひ合せ、

股引

裏の方に折りを付け、表に返し、裏を五厘ひかへて、膝掛けを掛ける。

(二) 紐付け。

(1) 前の胴廻しをつけた縫ひ目を突き合せにして、左足を上に重ね、上部の端をおさへて置く。

(2) 紐布を接ぎ合わせる。

(3) 上前(左)に七寸、紐を出して、紐付きズボン下と同様に、紐を附ける。

(ホ) 綴ち。前裓の幅の裾口から三寸上を、より糸で小針に縫ふ。

(ヘ) 仕上げ。畳み方は、襷を二つに折つて、裓も自然に折り、兩足を合せて、丈を二つに折る。

單股引

各部の名稱、地質寸法の度り方、定め方、ゆるみの附け方、裁ち方、及び積り方は、すべて袴股引に同じ。

縫ひ方(縫ひ糸は捻り糸を用ひる、斜の所は三針位縫つて、一針返す)。

(イ) 襷付け。

(1) 内襷、即胯下を、裾口から縫ひ、折りは身の方に返し、裁ち目を折つて、細かく伏せ縫ひにする。

(2) 外襷を縫ひ付け、裁ち目を折つて、伏せ縫ひにする、釣り合ひは、袴股引に同じ。

(ロ) 裾口。三つ折りにして、細かく伏せ縫ひにする。

(ハ) 胴廻り布。眞直な方を、三つ折りにして縫ひ、幅の廣い方を後に、狭い方を前に縫ひ付け、胴廻り布の方に折りて、伏せ縫ひをする。

(二) 紐附け。袴股引に同じ。
(ホ) 仕上げ。

その他の各種長股引に就いての説明。

(1) 綿入股引。主に秩父絹、甲斐絹、花色絹等に、裏を附ける。

縫ひ方は、袴股引と同じ様に、四つ縫ひにする、綿は表に返す時に入れる。

襠には、綿を入れず、只襠と胴廻りともに、真綿を入れる。

(2) 前通し股引。襠と襠を袴にして、胴廻りを単にする。

縫ひ方は、胴廻りは、単になる故、見返し布で縫ひ代をくるんで、まつり附ける。

(3) 筒裏股引。裾口から膝頭まで袴にして、それから上の方、及び襠は単にする、縫ひ方は、単になる所は、縫ひこみを三つ折りにして伏せる、其他は袴股引に同じ。

(4) 裾裏股引。口裏股引とも云ふ、裾口から上、三寸五分位、襠にのみ裏をつけ、摺れて布の損じるを防ぐ、この時は、裾口の綴りはしない。

(5) 膝裏股引。膝の所にのみ、半幅五寸の布を當て、縫ひ附ける。これは、膝の部分の損じ易いのを防ぐため、主に労働に従事する人が用ひる。

(6) 皮並股引。穿く人の足の形に合わせて作る、従つて緩みの少ないものである。

(7) バツチ。皮並股引に反して、ゆるみを一寸以上取る、これは主に、座つてゐる人が用ひるからである、多く長着の下に穿くから、滑りよき様、表は甲斐絹、秩父絹、花色絹等にして、裏はネル金巾等をつける。

十三四歳用股引

各部の名稱。寸法の度り方、裁ち切り寸法の定め方、地質等總へて本裁ちに同じ。

裁ち方、積り方。

常幅の布を以つて、十三四歳用股引の裁ち方。

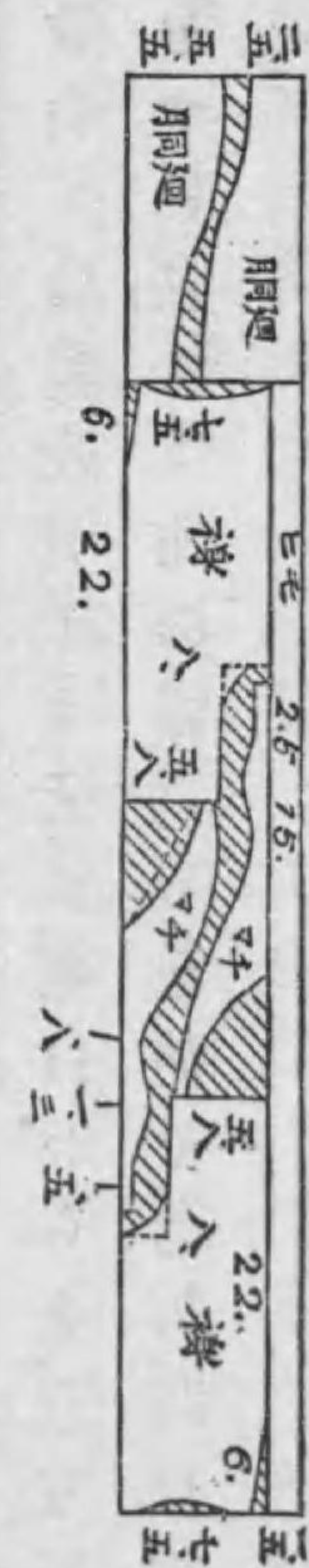
所要裁ち切り寸法。

胯上、七寸 胯下、一尺五寸 丈、二尺二寸 胯上幅、五寸八分

胯上止まり幅、八寸 裾口、七寸五分 胴廻り丈、一尺六寸 胴

廻り幅、二寸五分、五寸五分 紐布幅、一寸五分、丈五尺。

第三十四圖



積り方公式 袴×3-裁合+胴廻り-用布

同算式 22.×3-6.+16.=76.

第三百四十二圖

襠の裁ち方



胯下÷2+1=膝の高さ 膝の高さ× $\frac{2}{3}$ -5腓の高さ

縫ひ方。本裁ちに同じ

半股引

地質。單股引と同様。

各部寸法の取り方、及び裁ち切り寸法の定め方は、胯下四寸五分にするのみで、その他は單股引と同様。

裁ち方、積り方。

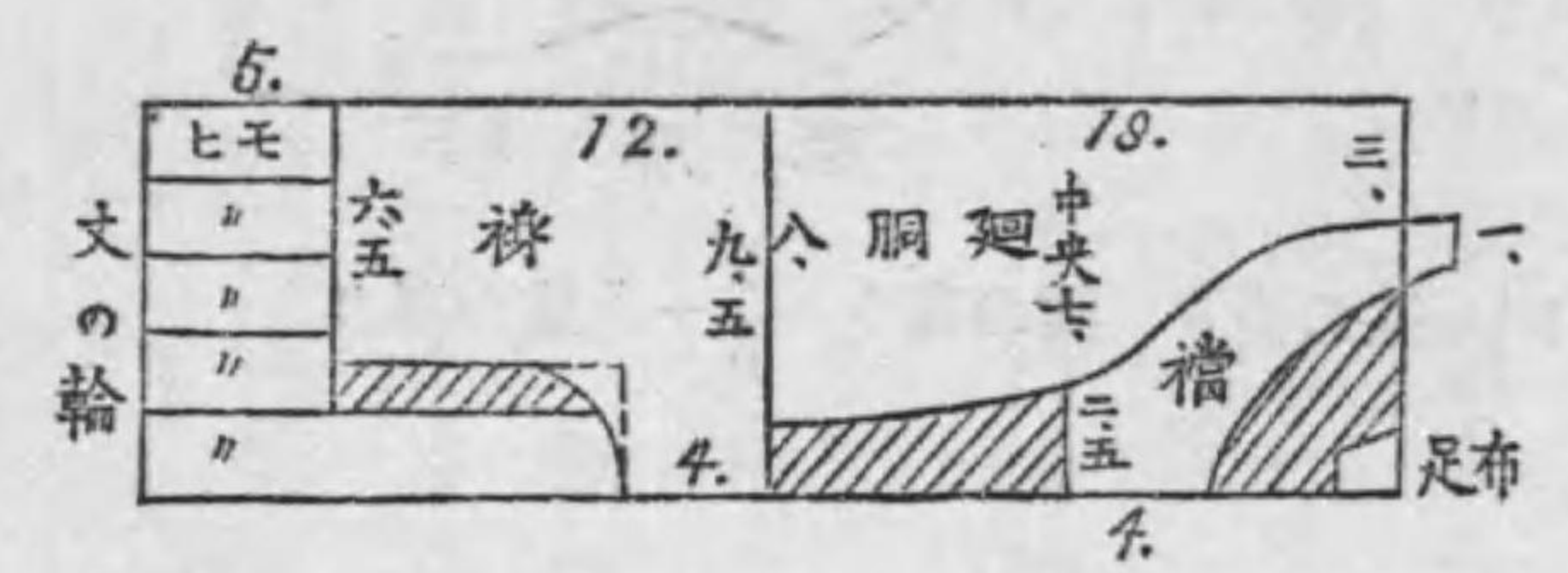
常幅、長さ七尺二寸の用布を以つて半股引の裁ち方、積り方。

所要裁ち切り寸法。

身丈、一尺二寸 袴の裾口幅、九寸五分 胯上幅、六寸五分 胯下、四

寸 胴廻り丈、一尺九寸
 方、三寸
 紐丈、五尺
 襠の裾
 口幅、二寸
 五分 襠
 の上の方
 の幅、一寸
 襠丈一
 尺。

第三百四十三圖



積り方公式 (身丈+胴廻り+紐)×2=用布
 同算式 (12+19+5)×2=72

- 胴廻り幅、廣い所、八寸、中央、七寸、狭い
 縫ひ方(捻り糸を用ひ斜の所
 は、三針目位に一針返す事、
 單股引に同じ)。
- (イ) 襠のたし布。襠のたし布
 を、返し縫ひに接ぎ合せる。
- (ロ) 襠の付け方。
- (1) 内襠を一分先に出して
 襠に縫ひ付け、其縫ひ目
 は身の方に返し、縫ひこ
 みの端を折つて、縫ひ附
 ける。
- (2) 外襠を、内襠同様、一分先

- に出して襠に縫ひ付け、縫ひこみの端を折つて、縫ひ附ける。
- (ハ) 裾口。裾口を三つ折りにして縫ふ。
- (ニ) 胴廻り布、及び紐の付け方は、單股引に同じ。
- (ホ) 仕上げ。

大人男猿袴

各部の名稱。

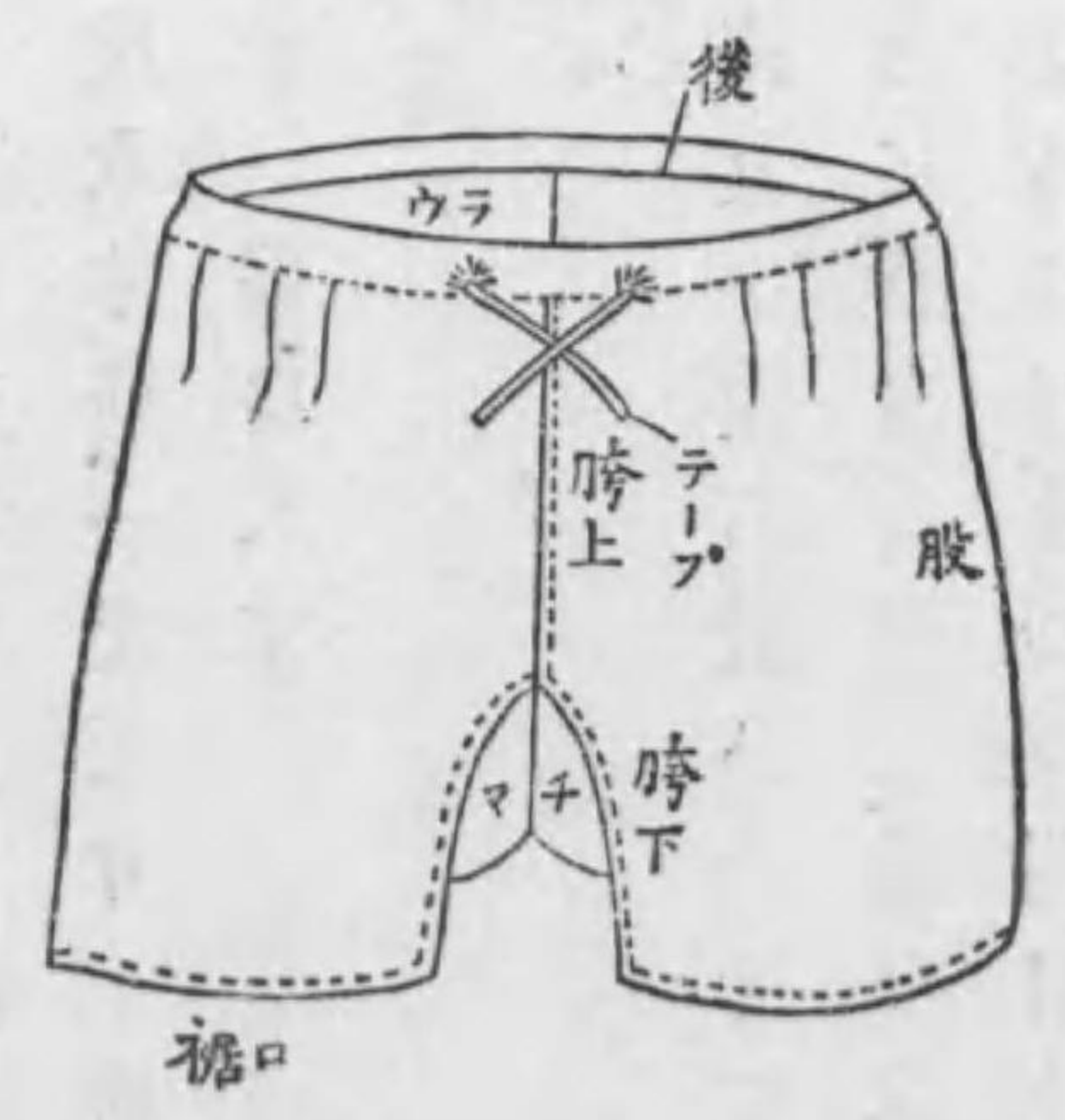
地質。ネル、キヤラコ、縮、天竺木綿。

裁ち方、積り方。

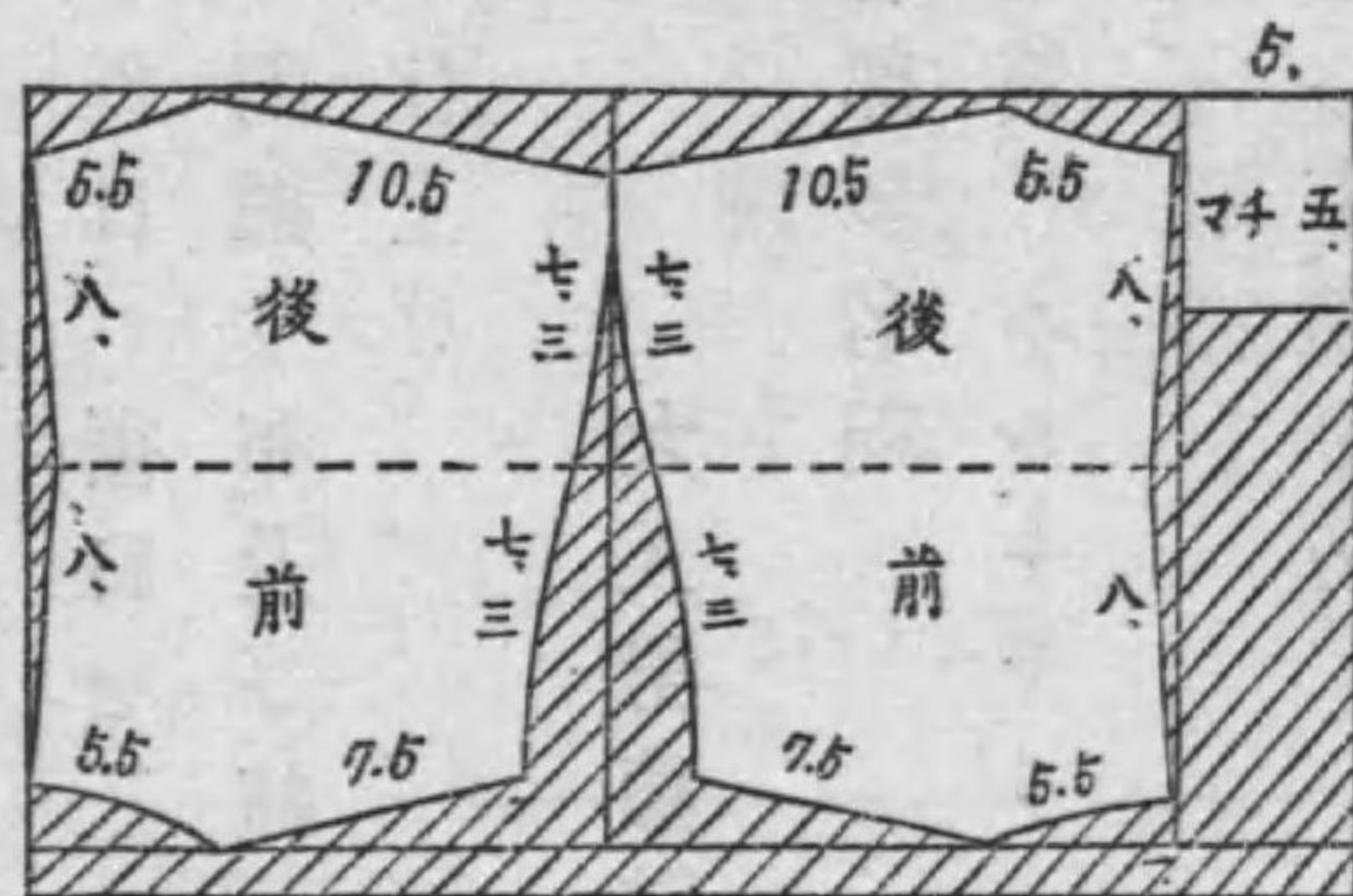
幅二尺、長さ三尺七寸の布を以つて、大人男猿袴の裁ち方を以つて、大人男猿袴の裁ち方。

所要裁ち切り寸法。

第三百四十四圖



第三百四十五圖



積り方公式 後丈×2+襠丈=用布

同算式 16×2+5=37

後胯上、一尺五分 前胯上、七寸五分 胯下、五寸五分 胯上幅
 七寸三分 襠丈、幅共、五寸 丈、後、一尺六寸、前、一尺三寸 胯上
 幅、七寸三分 胯上止まり幅、九寸五分 裾口、八寸。

(イ) 縫ひ方。
胯上。

(1) 前の胯上を、左右縫ひ合せて、左
足の方に折りを返し、縫ひ込み
の端を折つて、まつり附ける。

(2) 後の胯上も、前の胯上と同じ様
に縫ひ、折りも前と同様、左足の
方に返し、縫ひ込みを折りてま
つる。

(ロ) 胯下。

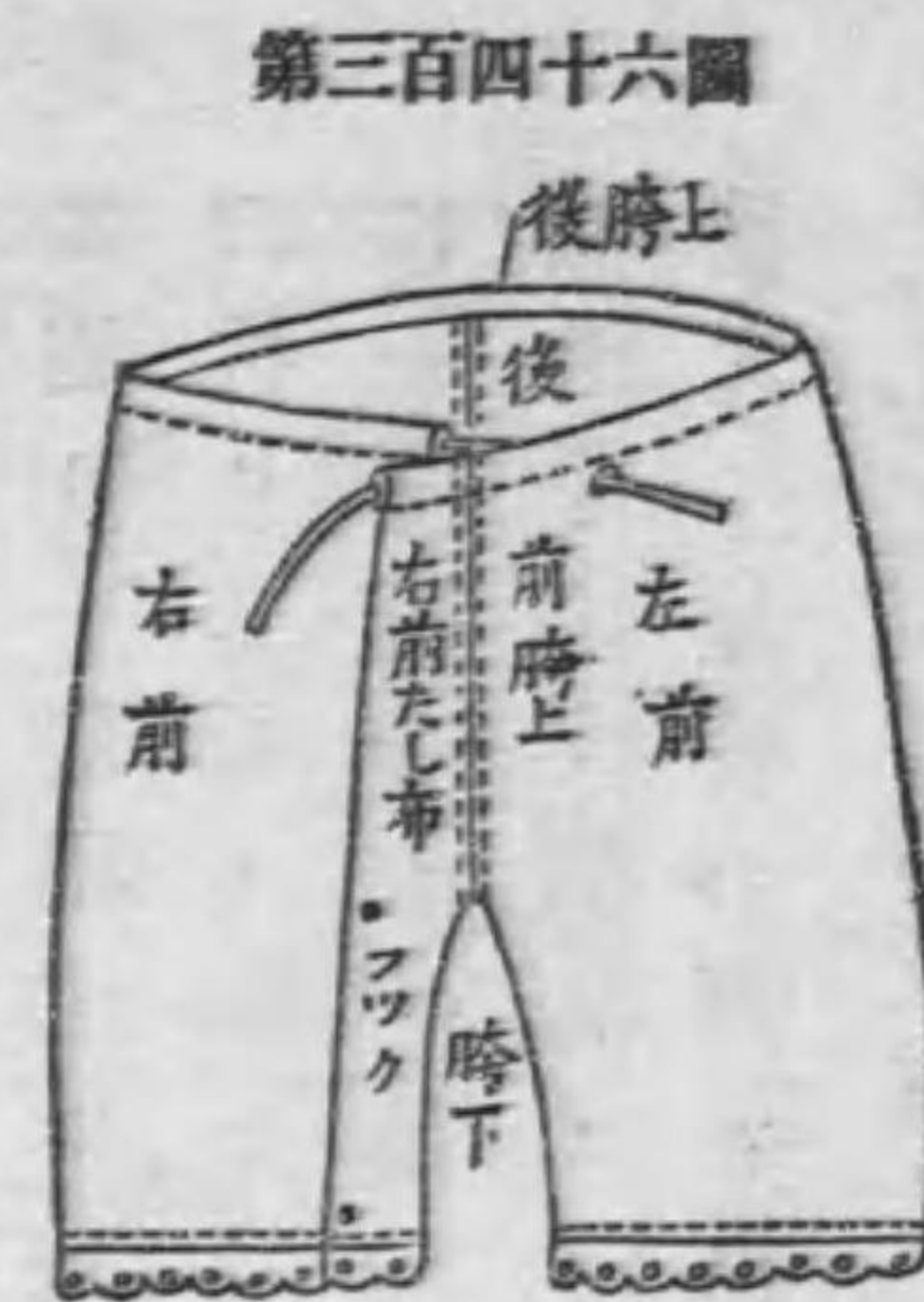
- (1) 後の胯下に、襠の二方を縫ひ附け、身の方に折りを返して、縫ひ込みの端を折つて、まつり附ける。
- (2) 前の胯下に、襠の残りの二方を縫ひ合せ、折りは身の方に返し、縫ひ込みの端を折つて、まつり附ける。
- (3) 胯下の残りを、左右各々縫ひ合せ、縫ひ込みを前に折つて、まつり附ける。

(ハ) 腰廻り。腰廻りの裁ち目を、裏の方に二分折り返し、次に四分に折り、其折り山から二分下つて、前の胯上の縫ひ目から左右に、一寸五分づつ、脇の方によつた所、二分の菊座穴をあけ、穴膝りをして、穴からテープを通して、裏でまつり附ける。

備考 地質の厚い時は、前後の縫ひ目を割つて、纏り附ける。

婦人用下穿き

各部の名稱。



第三百四十六圖

五分長くする。

- (口) 膝下。度りたる寸法に、縫ひ代を加へる。
- (ハ) 丈。前膝上と、膝下とを加へたるもの。
- (ニ) 腹圍。度りたる寸法の二分の一に、三寸乃至四寸を加へる。
- (ホ) 臀圍。度りたる寸法の二分の一に、四寸乃至六寸を加へる。
- (ヘ) 裾口。度りたる寸法に、二寸五分を加へる。

地質。縮、天竺木綿、キヤリコ、綿ネル、富士絹。

寸法の度り方は、男股引に同じ。

ゆるみの加へ方。

(イ) 膝上。度りたる寸法に、餘裕約三寸を加へる、後は前より一寸

第三百四十七圖

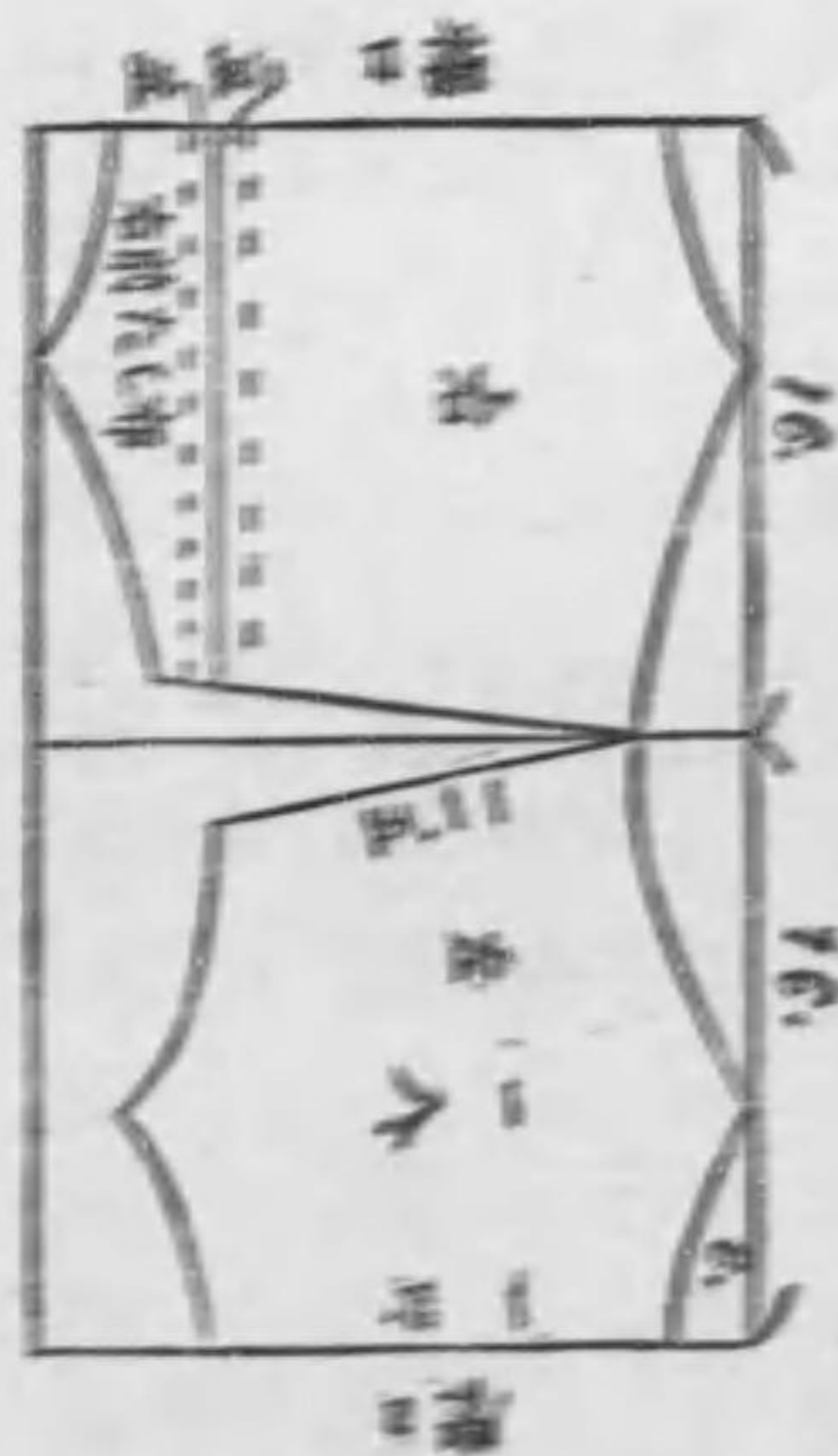
両面物



積り方公式

$$(後膝上 + 膝下) \times 2 - 縫ち込み = 用布$$

$$同算式 (10 + 6) \times 2 - 1 = 31$$



第三百四十八圖
片面物の場合

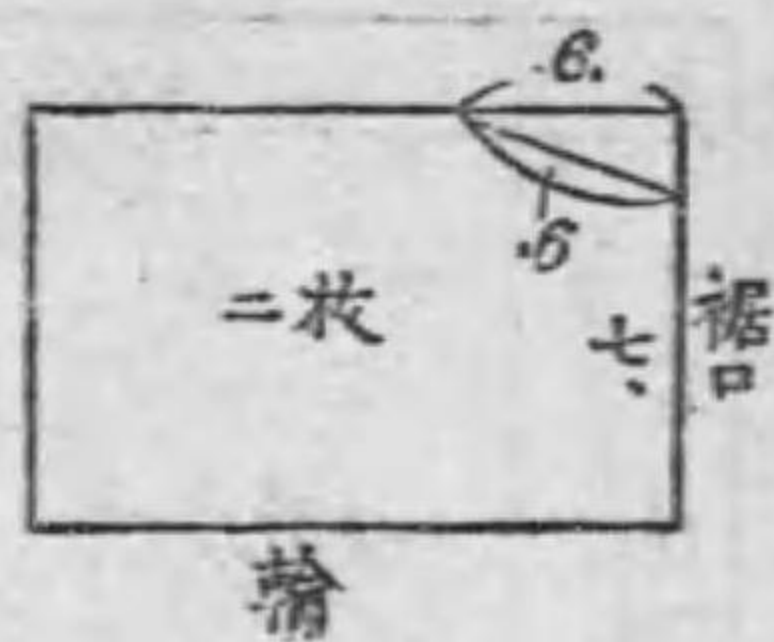
幅二尺の布を以つて、女下穿きの裁ち方、積り方。

普通裁ち切り寸法。

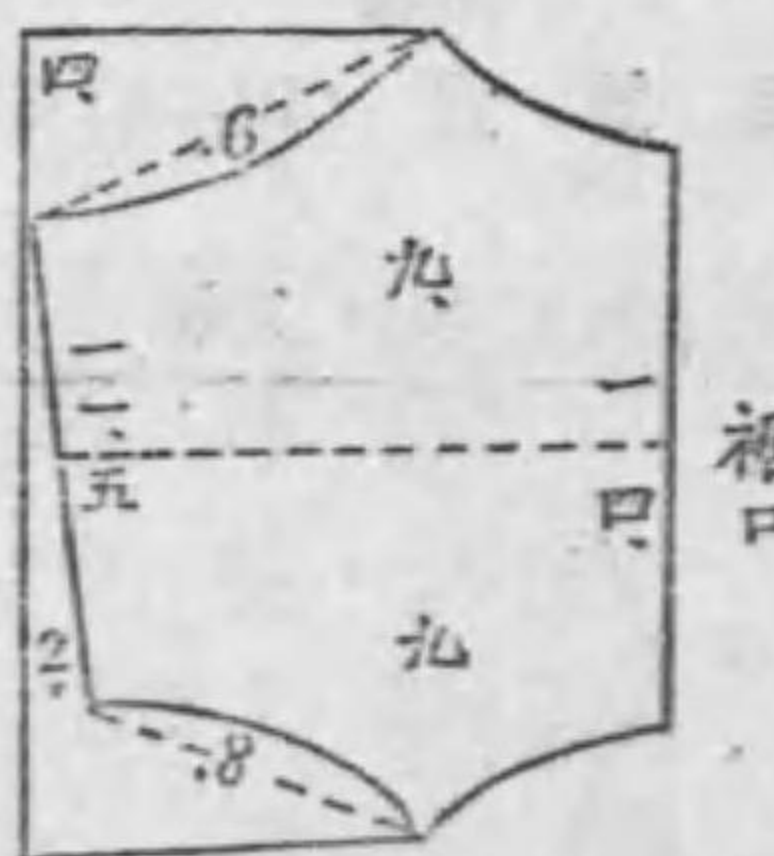
膝上、一尺 膝下、六寸 丈、一尺六寸 臀圍、一尺八寸 腹廻り

幅、一尺一寸五分 裾口幅、一尺四寸

第三百四十九圖
分解裁ち方圖



第三百五十圖



左肢を先に裁ち
右肢は左肢に重なりを加へ
て裁つ

縫ひ方。

- (イ) 前明きの幅の狭い方の布を始めに二分、次に四分裏に折り返して、まつり附ける。
- (ロ) 後の胯上を左右縫ひ合せ、縫ひ目を割り、縫ひ込みの端を折つて、まつり附ける。
- (ハ) 前の胯上も、後と同様に縫ひ合せる。
- (ニ) 前後の胯下を縫ひ、前の方に折りを返してまつる。

(ホ) 裾口を三つ折りにしてまつる。

(ヘ) 腰廻りを二分裏に折り、更に四分折り返し、その中にテープを通して纏るか、又はミシンを掛ける。

(ト) 紐通しの穴を作る、其拵へ方は、上前(左)の幅の中央の裏に、一寸角の力布をまつり附けて、テープの寸法に、縦に穴を明けて、穴際りする。

(チ) 見返しの裏に、裾口に一つ、四寸程上つた所に一つ、フツクを附ける、これに合せて、下布の方の裏には、力布をまつり附けて、表の方に、フツクの座をつける。

注意 裾口に、レースを附ける時、又はゴムテープを通す場合ひもある。

レースを附ける時は、第一にレースの幅をさだめ、身の裾口ご合せて縫ひ、身の方に折りを附け、レースの端を折りて裏

にて纏る。

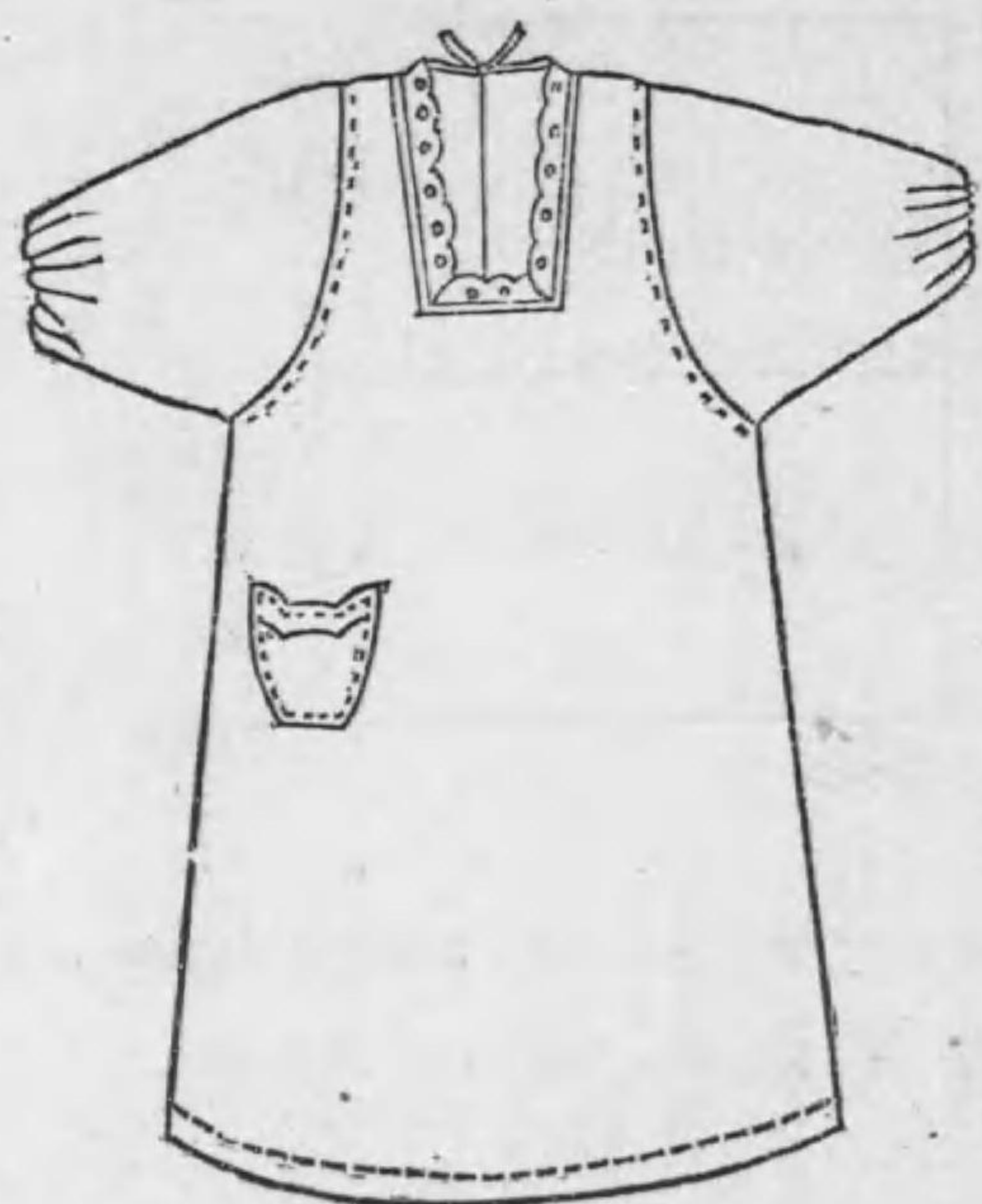
レースの幅のせまき時は、裏には見返しを付ける。
縫ひ方は前と同様にする。

割烹服

地質。キヤリコ、天竺、夏の洋服地(ギンガム、文化織等)。
仕立て上げ寸法。

袖丈、八寸五分内外 身丈、着丈より二寸位短く、(普通三尺内外)
袖付け、袖丈に同じ 衿肩明き、着物より一分多く、(二寸四分位)
顎を丸く切る時顎刳、二寸四分 前を三角に切る時、前明き
衿下りに同じ、(六寸位)、前を角形にする時、下部の幅は、衿肩明き
より一寸三分位狭くする。

第三百五十一圖
出来上り圖



裁ち方。

附屬品。エンブロイダ

リー(ネンスツク、ロー
ン等の、薄地の木綿、又
は半麻、麻等に種々の
模様を刺繡したもの)
レースのエツヂング
(片耳レース)幅八分位、
丈は顎を度りて定む
ゴムテープ、幅二分位、
丈五寸五分二本。

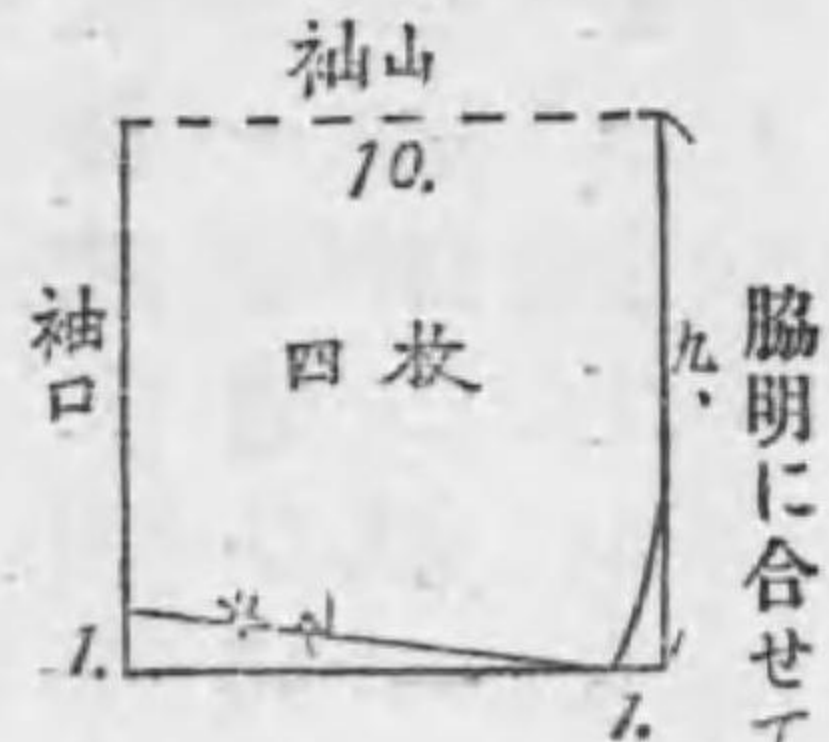
注意 衿肩の上り 2.4 前明きの上り 6 下の幅 1.6

但し、前明に、レースを附けるために、レースの上り幅だけ多く裁ち切る、今レースの上り幅を、五分と定めて寸法を記入する

第三百五十四圖

袖

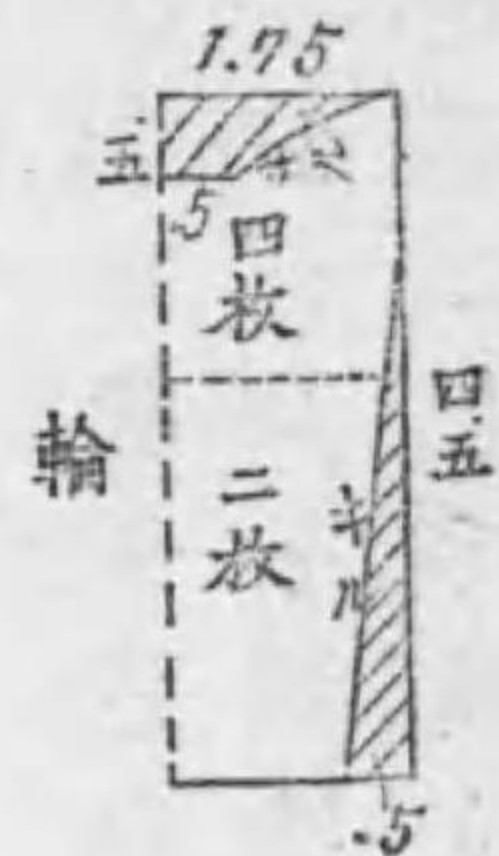
中表に二枚重ねて袖山を折る



脇明に合せて裁つ

第三百五十五圖

ポケット及び口布



ポケット及び口布を幅二つに折り口布をポケットの上部に重ねる

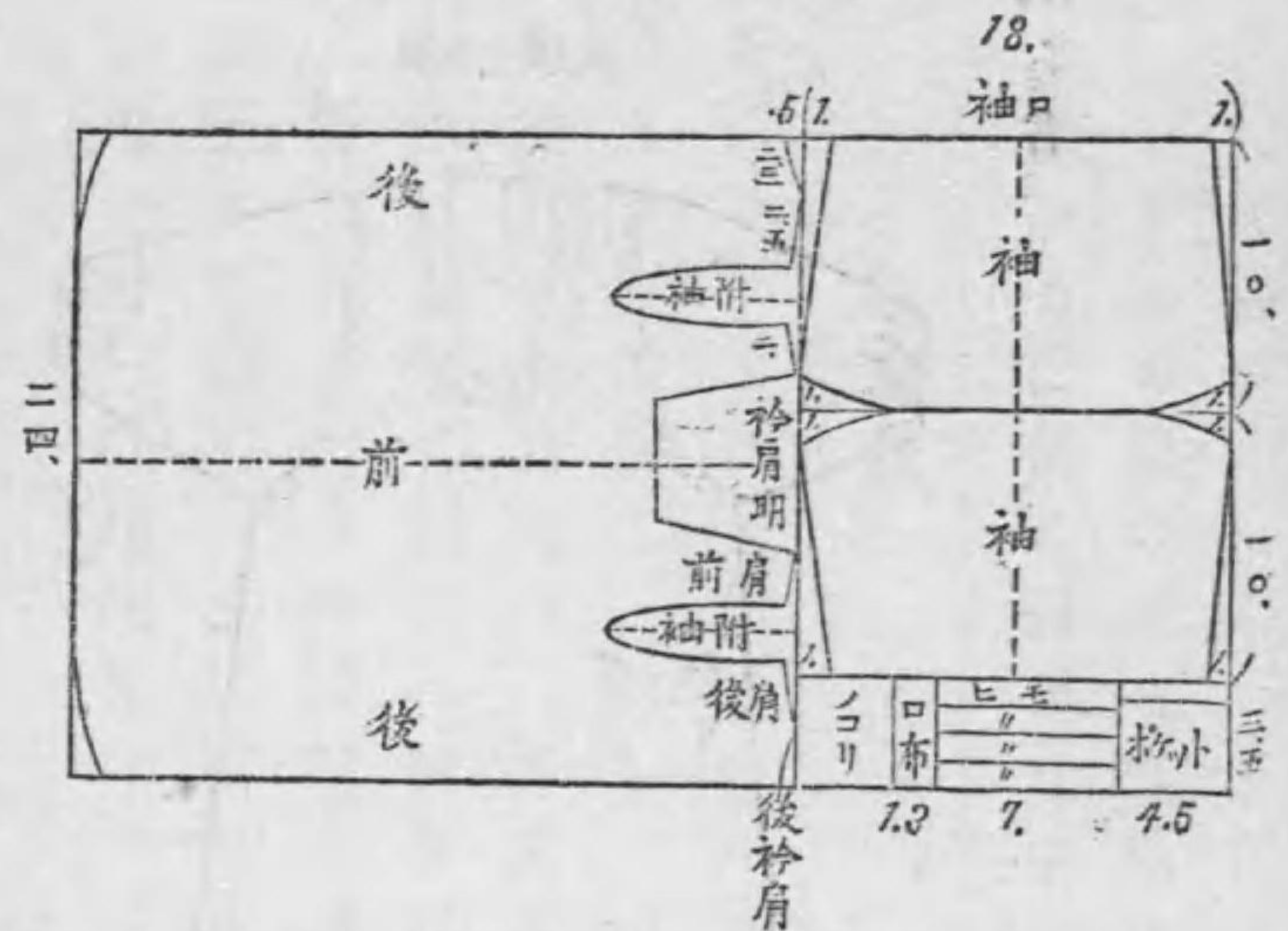
第三百五十六圖



仕立て方。

五十番のミシン糸で、全部縫ひ目は半返し縫ひにし、きせを極少しかけ、縫ひ代を折つて纏り縫ひにする、又ミシンを使用しても宜い。
(イ) 袖下を縫ひ縫ひ代を後袖の方に折り返し、

第三百五十二圖



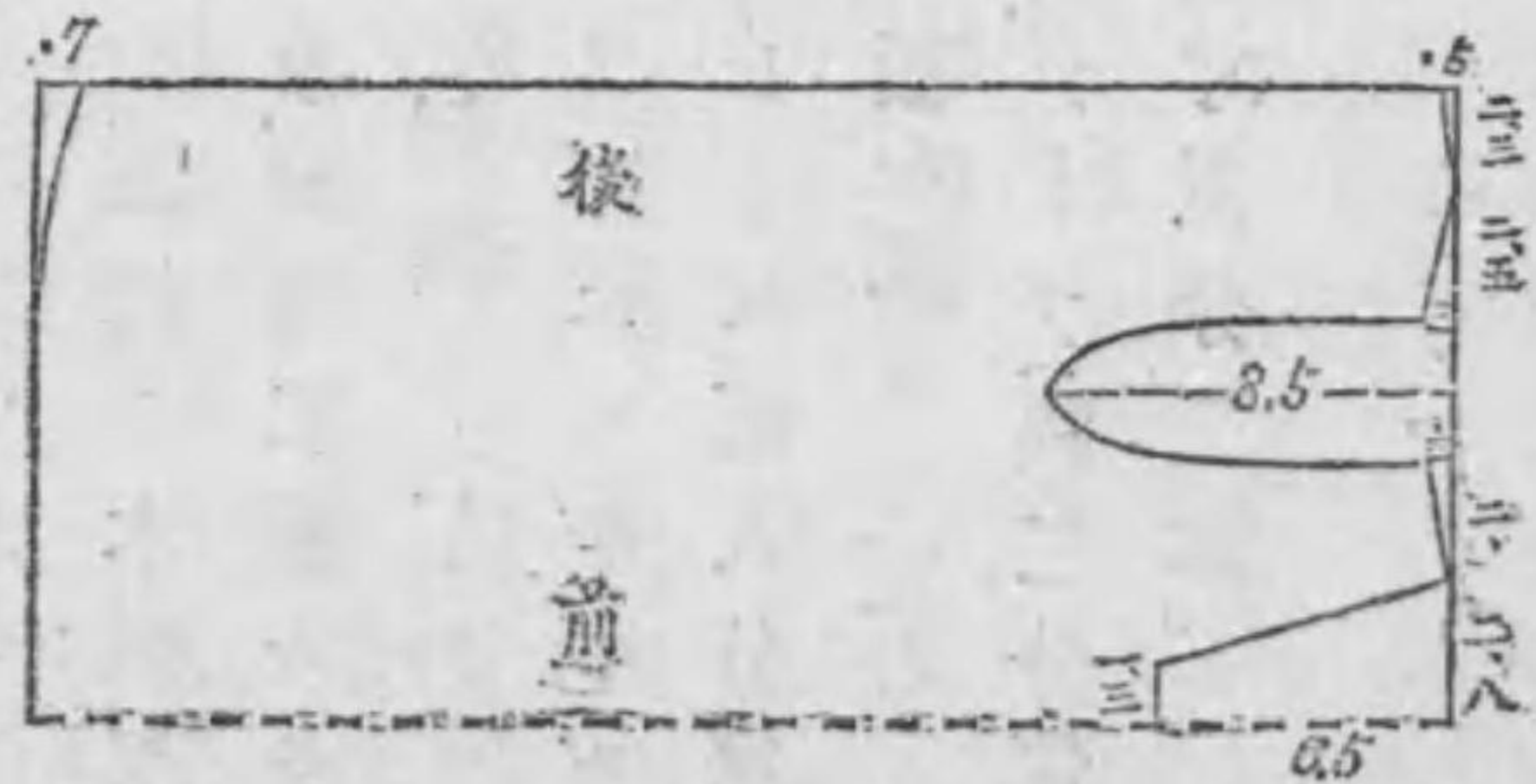
積り方公式 上り身丈+裾新伏及び肩縫代+裁切袖丈×2=用布
同算式 29+17+9×2=38.7

第三百五十三圖

分解圖

襟

中表に幅を二つに折る



縫ひ込みの裁ち目を折つて纏る。

- (ロ) 袖口の裁ち目を二分、次に四分折つて纏り、ゴムテープを通す
 (又袖下を、袖口から一寸縫ひ残して、その裁ち目を三つ折りに纏つて馬乗りとし、袖口に丈一尺三寸のテープを入れて、三つ折りにして纏り置き、着てからテープを引き締めて、結んでも宜い)。

- (ハ) 前明きの裁ち目に、二分の縫ひ代で、レースを縫ひつけ、襷の方に返し、表より飾りミシン縫ひをなし、下の方の角は、レースのゆるみを、額縁に縫つて置く。

- (ニ) 前後の肩を縫ひ合せ、縫ひ込みを後に返し、縫ひ込みの裁ち目を折つて、表からミシンをかけるか、又は纏りつける。

- (ホ) 後衿肩を三つ折りにして纏る。

- (ヘ) 裾を二分、次に八分折つて纏る。

- (ト) 袖を付け、折りを襷の方に返し、縫ひ込みを纏り附ける。

- (チ) 紐の丈の一方を縫ひ、上り幅三分にして、四本とも衿後、衿肩の上部に、それより八寸下つた所に、丈の裁ち目を折つて裏に當て、ちきり止めに、飾りミシン縫ひをする。

- (リ) ポケット。随意的の形に裁ち、口の所は丈夫なやうに、口布を附けるか、又は三つ折りにして、ミシン縫ひをなし、三方は裁ち目を裏に折り、襷の袖付け止まりから、一寸五分か二寸下つた所で、脇の折り目から五分前によつて、ポケットを置き、周囲をミシン縫ひでおさへ、口止まりに冑止めをする。

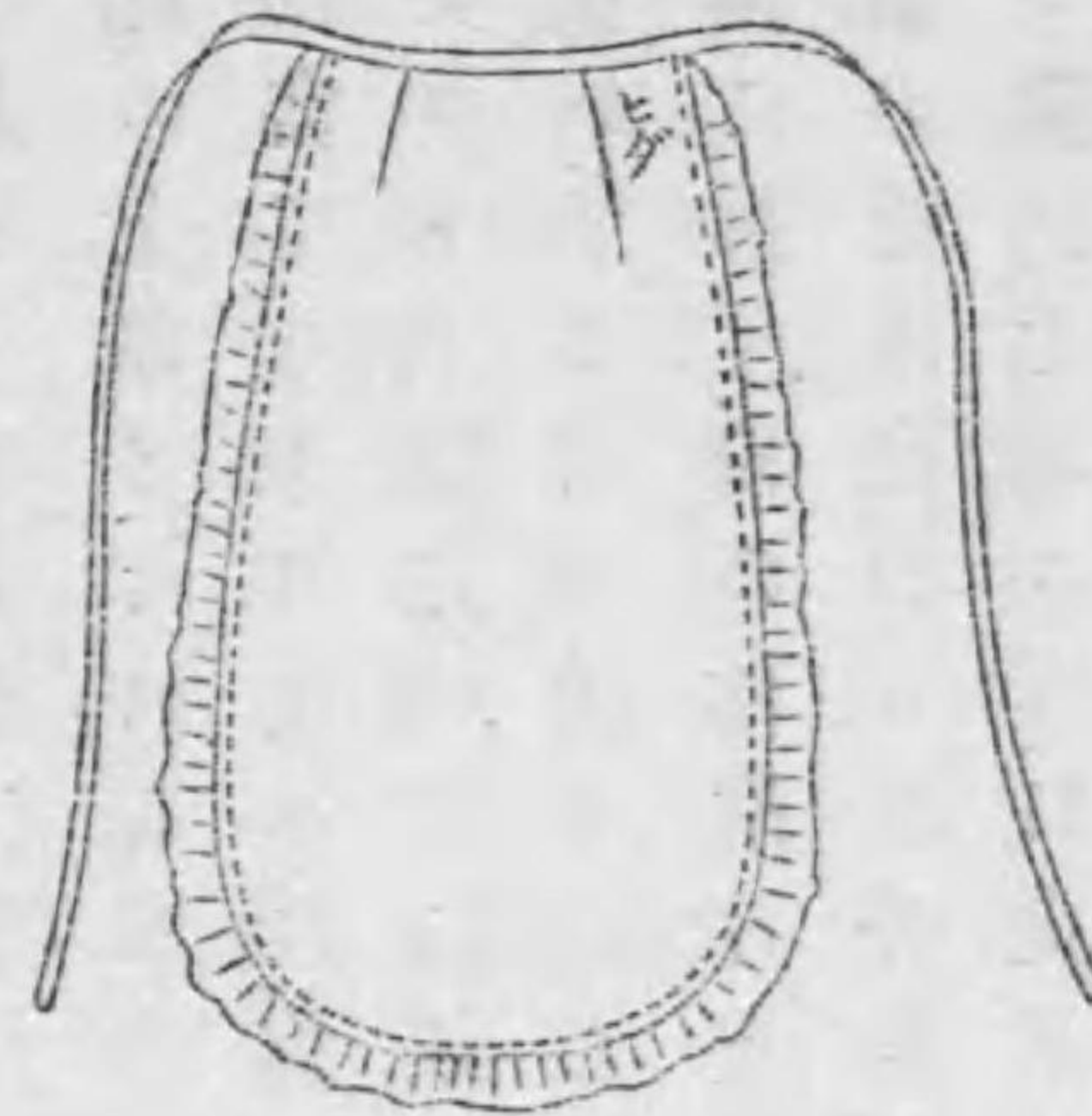
- (ヌ) 仕上げ。全體に霧を吹き、裏からアイロンをかける。

大人西洋前掛

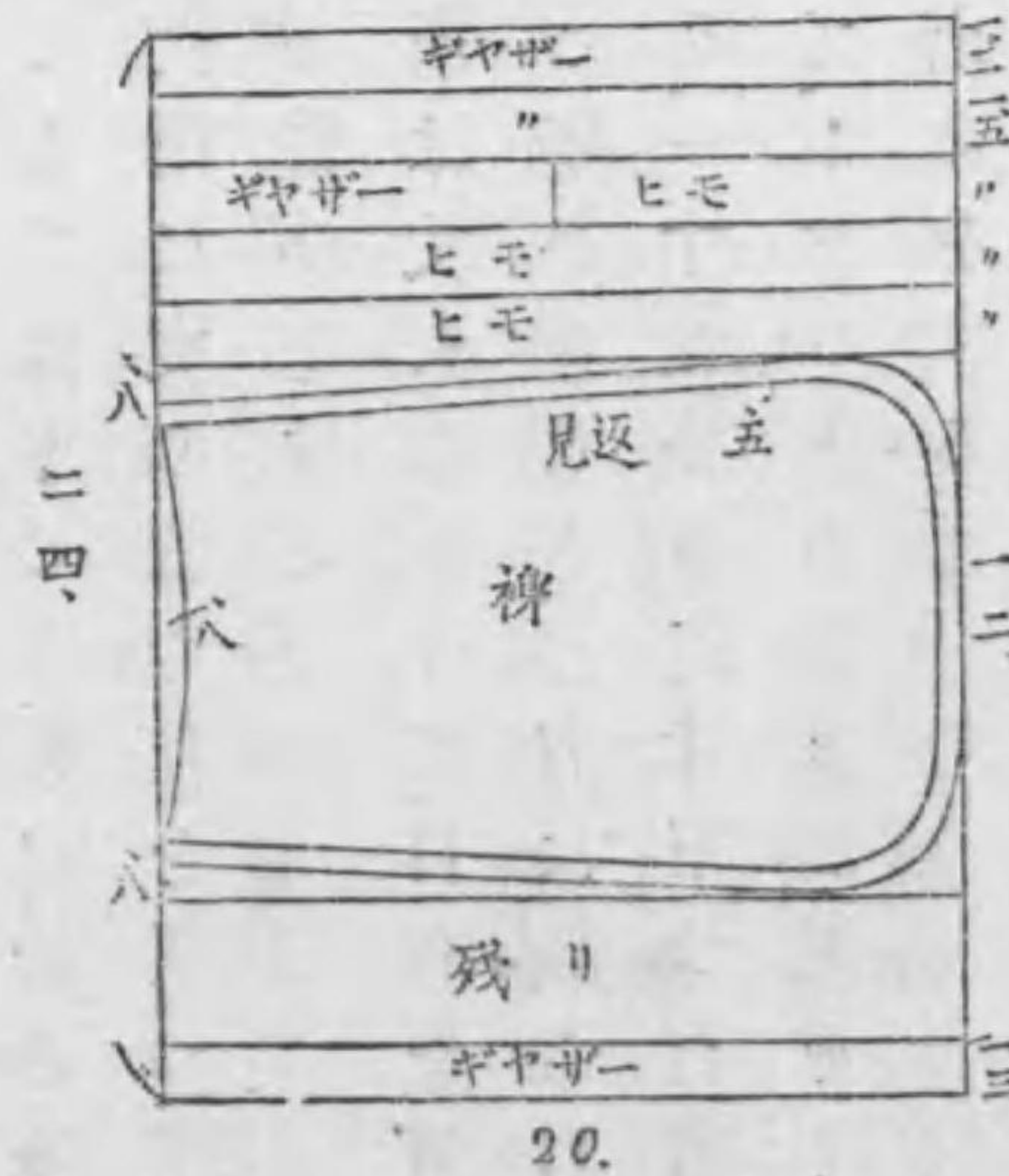
地質。キヤリコ、天竺木綿、夏洋服地等。

用布。キヤリコ幅二尺四寸二尺一寸又は二尺幅二尺か二尺一寸位。

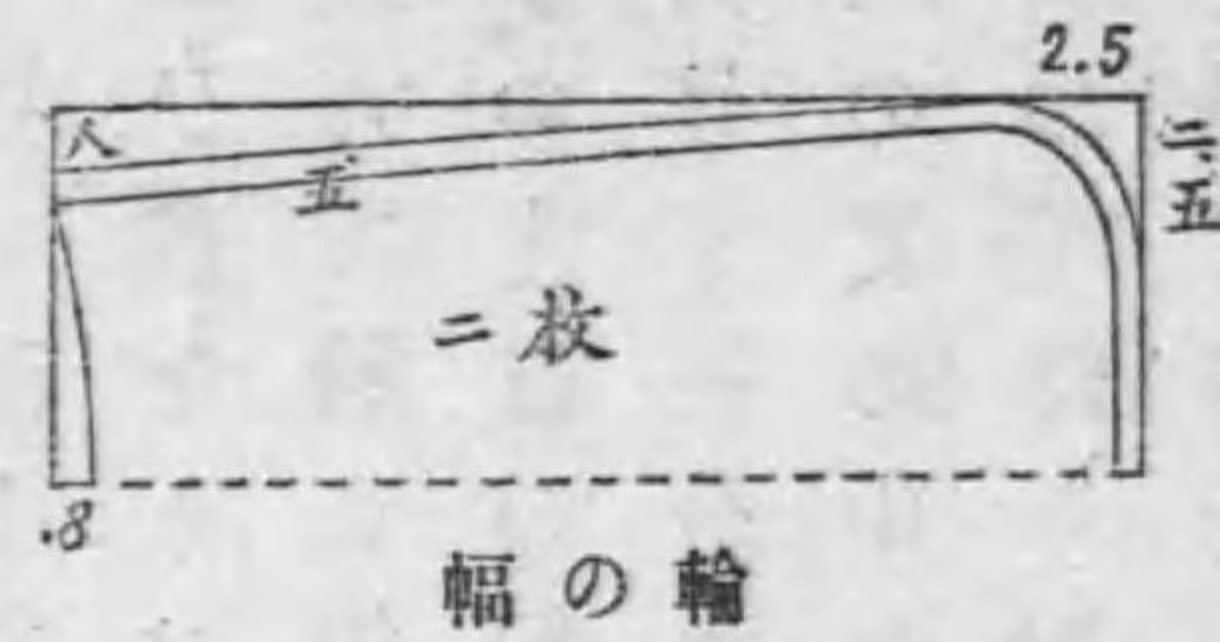
第三百五十七圖
出来上り圖



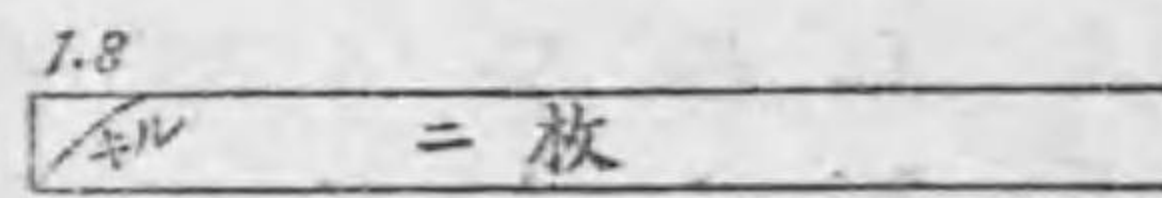
第三百五十八圖
裁ち方總合圖



第三百五十九圖
裨の裁ち方



第三百六十圖
ギヤザー 裁ち目



縫ひ方。

(イ) 紐を三本掛け接ぎにして、上り幅四分に締め、丈の中央を一尺二寸位締め残して置く。

(ロ) ギヤザーの耳の無いのは、幅の一方を、極細く三つ折りにして纏り、四本丈を接ぎ合せ、接ぎ目を割り、縫ひ込みの端を折つて纏る、次に丈の両端は、縫ひ附ける方を、少し丸みを付けて裁ち落すこと、圖の通りである。

(ハ) ギヤザーの縫ひ附ける方を、裁ち目から五厘入つた所を、二度細かくグシ縫ひにし、ギヤザーの丈の中央に、糸標をして、其標と裨の下部の幅の中央を合せて、待ち

- 針を打ち、裨の上部に二分五厘の縫ひ代を残し、其間に合せて、グシ縫ひの糸を引き締めてちゞめる。
- (ニ) ギヤザ一の襷を、下の方の丸みの所には、少し多くよせ、其他は平等によせ、裨の表にギヤザ一の表を合せて、待ち針でこめ、ギヤザ一の裏の上に、見返し布の外側の裁ち目を合せて、待ち針を打ち直し、縫ひ代一分五厘で半返しに縫ふ。
- (ホ) 縫ひ代を、きせを掛けずに、裨の方に返し、見返して縫ひ込みを包んで、裨に振れぬやうに、纏りつける。
- (ヘ) 裨の上部の幅を四等分し、其左右の等分點に、外側に折り山を向けて、三分の深さに襷を取る。
- (ト) 紐の丈の中央と、上部身幅の中央とを合せ、紐を縫ひつけ、裏を折つて纏り附ける。
- (チ) 全體に霧を吹き、ギヤザ一の所も襷も、平に伸ばしてアイロン

を掛ける。

尙ギヤザ一の兩端は、丸みをつけず、眞直にして置いて、其上に身から續けて、紐をつけてもよい。

子供西洋前掛

用途。衣類の汚れを防ぐ爲に、二歳位から七八歳位までの男女兒共に用ひる。

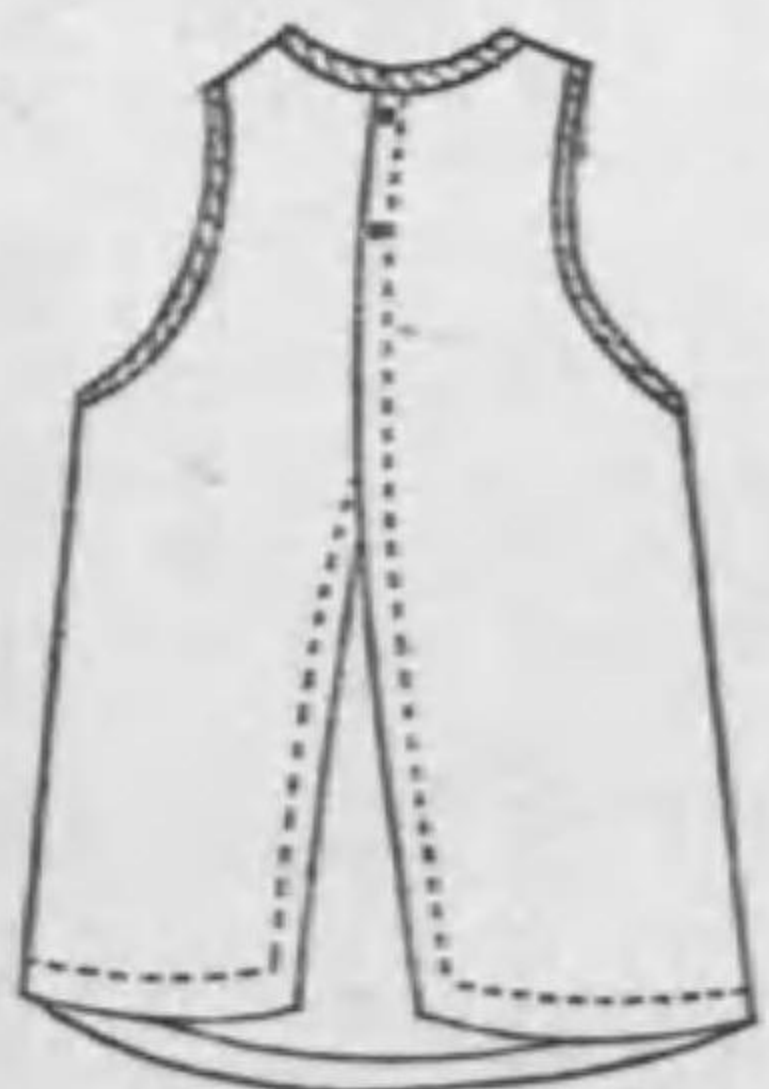
地質。キヤリコ、天竺木綿、フランネル、其他夏洋服地。

三四歳小兒用前掛(男女共通の型)

第三百六十一圖
出来上りの圖
前

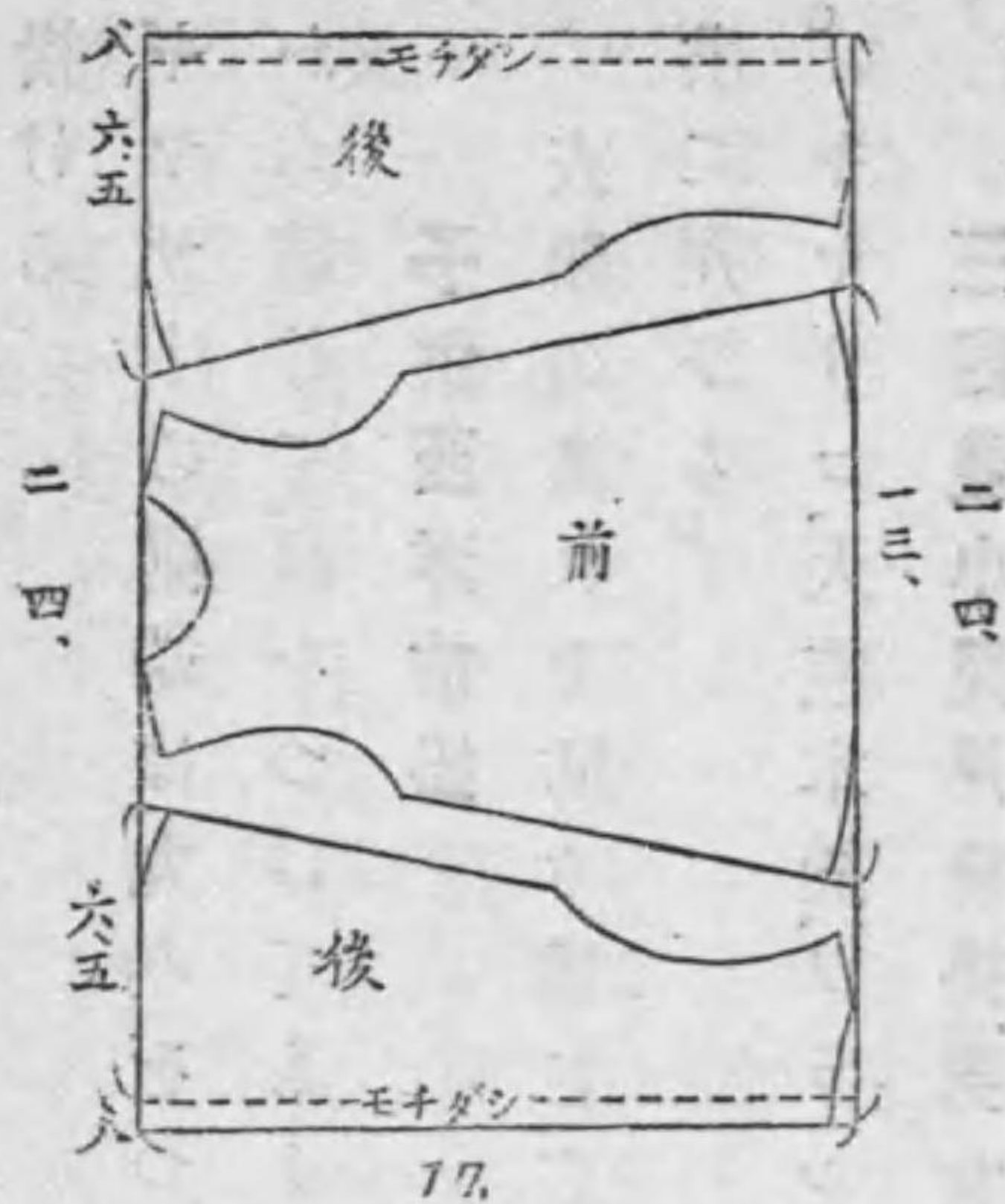


第三百六十二圖
後

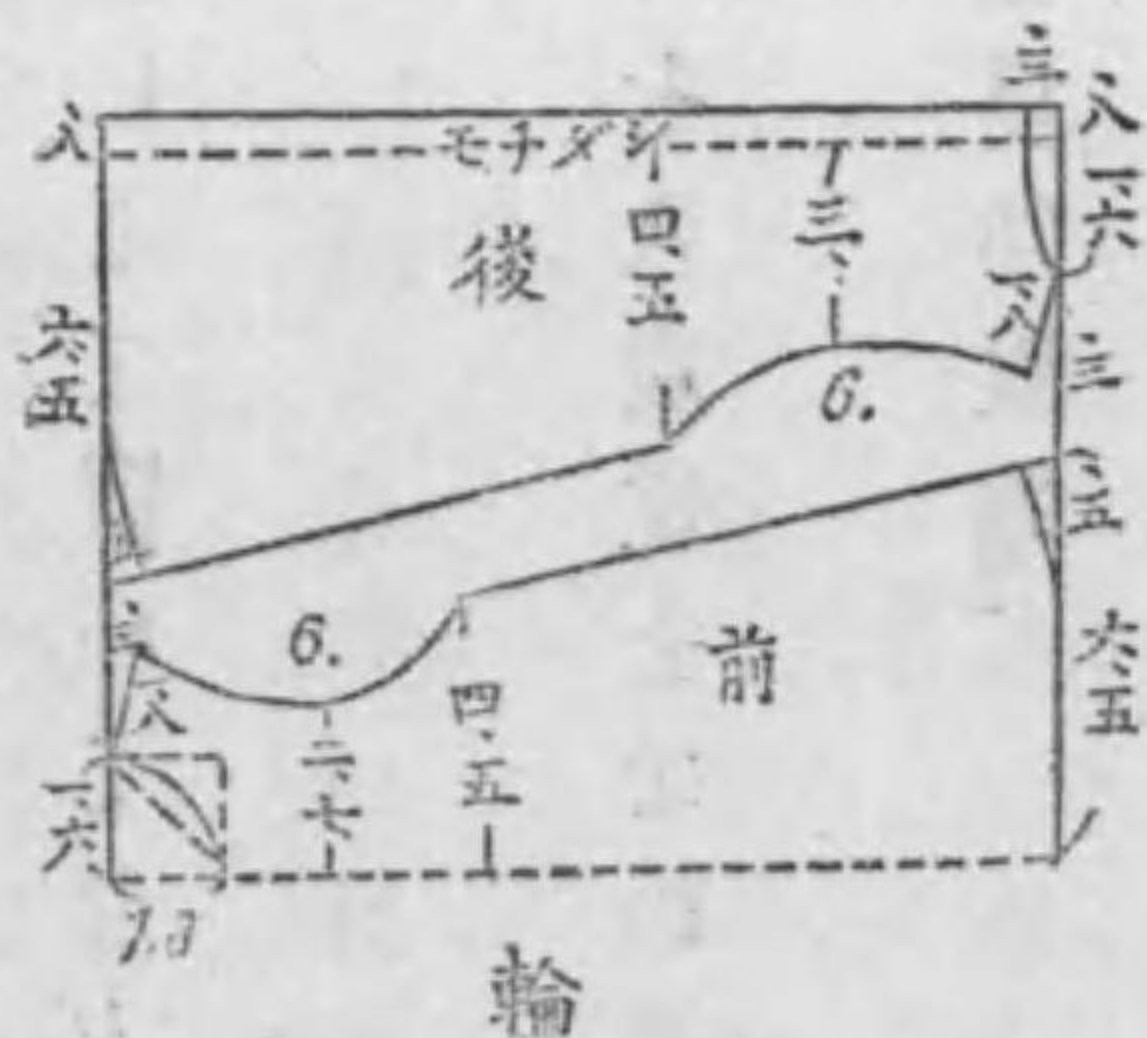


用布。キヤリコ、丈一尺七寸(子供の着丈に應じて斟酌する)縁布
 (ゼツフアーボフリン、ギンガム等)斜布で幅五分。
 衿肩、顎、脇明き、ポケットの口、又は周圍に附けるので、丈凡四尺
 より五尺二寸位。
 裁ち方。

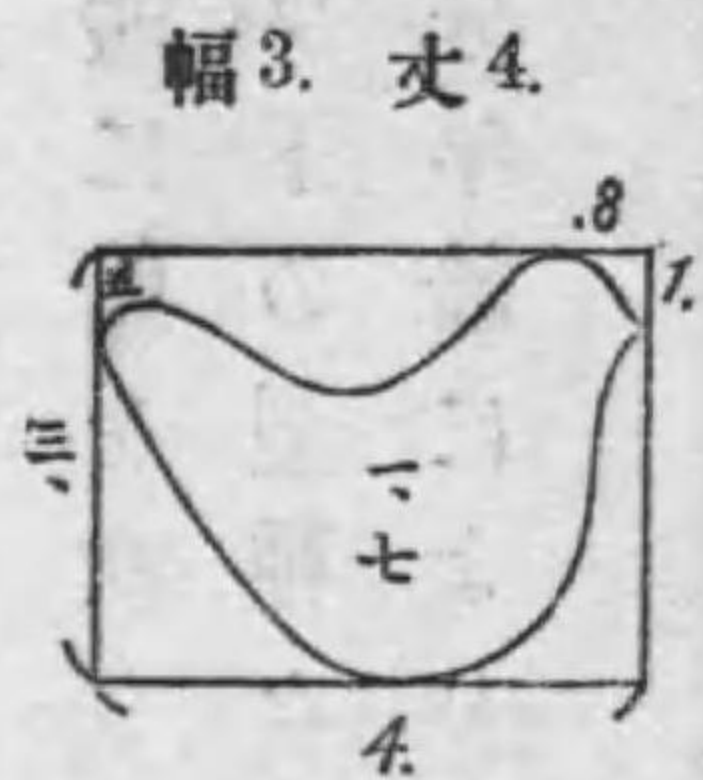
第三百六十三圖
 總合圖



第三百六十四圖
 衿の裁ち方
 (幅二つ折)



残布でポケットを裁つ
 第三百六十五圖



て、まつり附ける。

(イ) 縫ひ方。
 (イ) 左右の後の耳を五分裏に折り返し、表か
 らミシン縫ひをする(裁ち目の時は、裁ち
 目を折つて纏る)。
 (ロ) 肩を前後縫ひ合せ、縫ひこみを後に折つ

- (ハ) 縁布を衿肩の端から、前顎に續けて、縫ひ代一分五厘で縫ひ附
 け、縁布を上り幅、一分五厘にして、裏に折り返し、裁ち目を折つ
 て、縫ひ目にまつり附ける。
- (ニ) 前後の脇を縫ひ合せ、折りを後に返し、縫ひ込みの端を折つて
 まつる。
- (ホ) 脇明きも、衿同様縁を附ける。
- (ハ) 裾の裁ち目を、裏に二分折り、次に五分折つて、纏りつける。

(ト) ポケツトの口、及び周圍に、五厘の上り幅に縁をつけ、襦の脇明
 きから五分下り、五分前に寄つて、ポケツトを置き、上部を口明
 き三寸残し、他を襦に、縁の縫ひ目の際を、ミシン縫ひで附け、口
 の止まりに門止めをする。

(チ) 女兒ならば、右後の衿肩から、一分五厘下つて一つ、それより二
 寸五分下つて一つ、幅の端から一分入つて、穴を横に釦の直径
 と同寸に開け、穴膝りをなし、左後を下に五分重ね、穴に合せて
 釦を附ける。

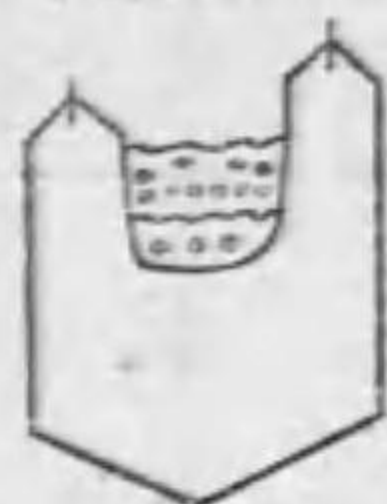
男兒は、左後に穴を開ける。

(リ) 全體に霧を吹き、裏からアイロンをかける。

ポケツトの型種々。凡の大きさ、丈三寸から四寸、幅三寸から三
 寸五分(年齢によりて多少斟酌する)。

第三百六十六圖

出来上り



第三百六十七圖



第三百六十八圖



第三百六十九圖



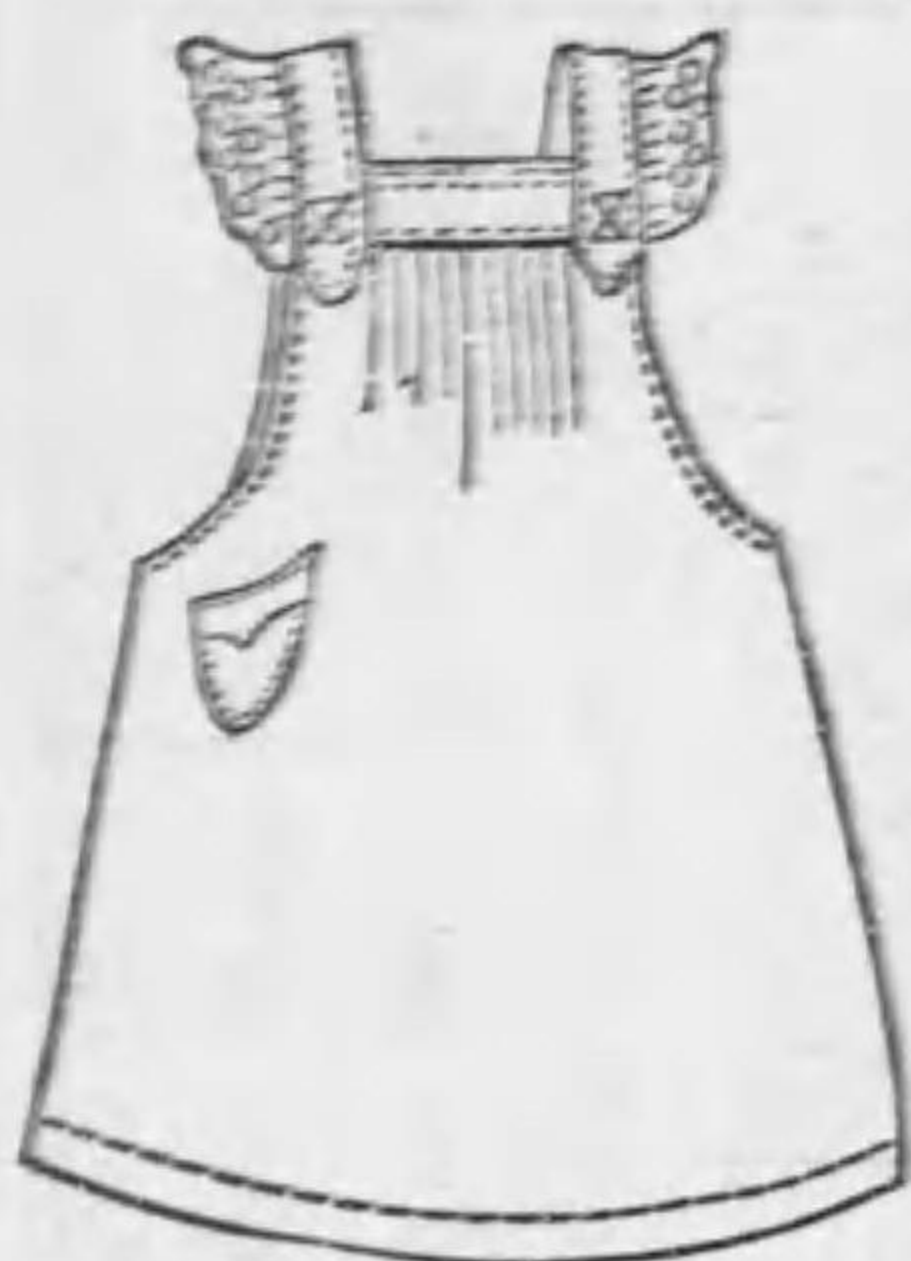
六七歳女兒用劍形西洋前掛

用布。キヤリコ、一尺二寸 片身レース、丈は肩布丈の一倍半、幅
 は、一寸二枚 釦、直径二分五厘位のもの一個。

第三百七十圖

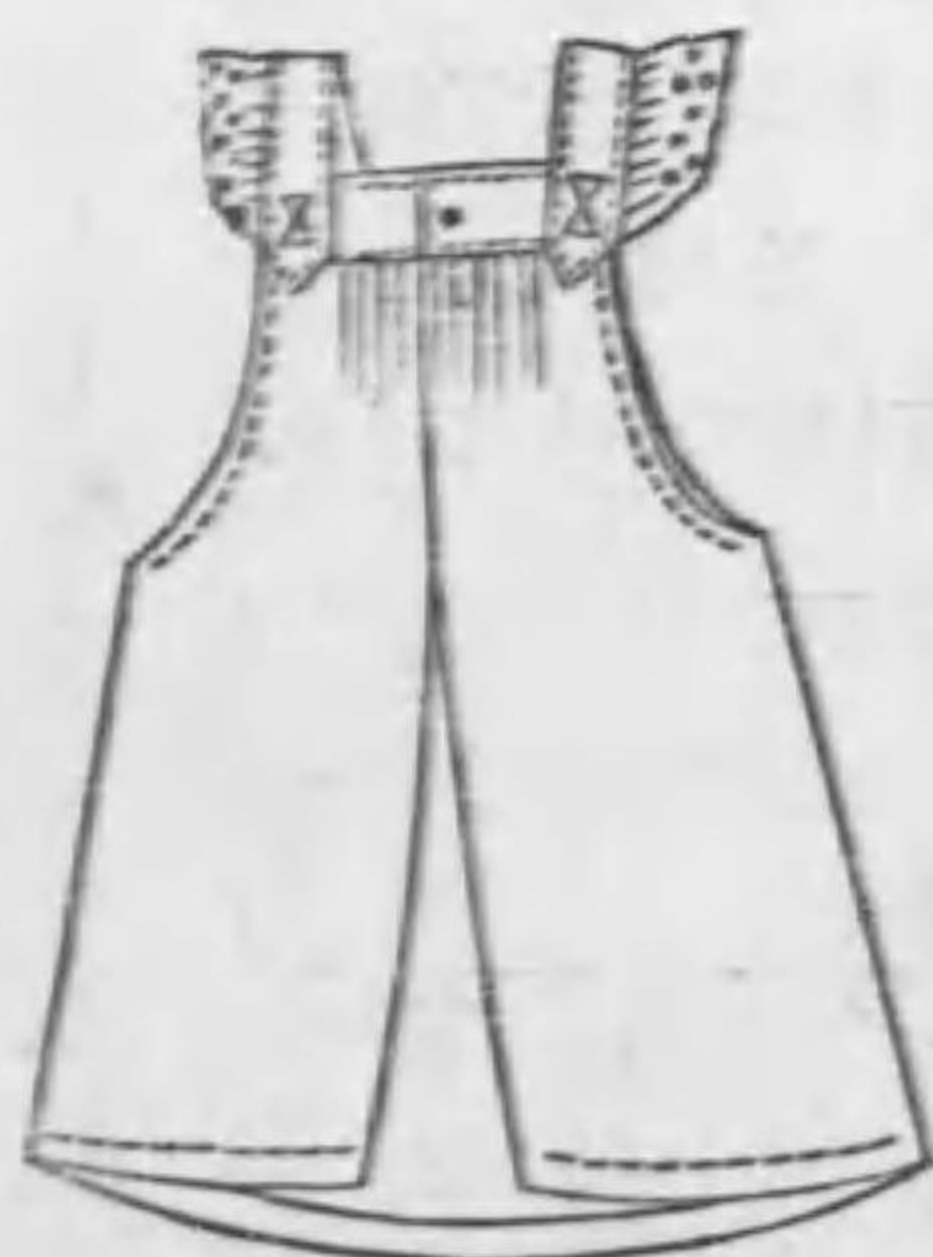
出来上りの圖

前

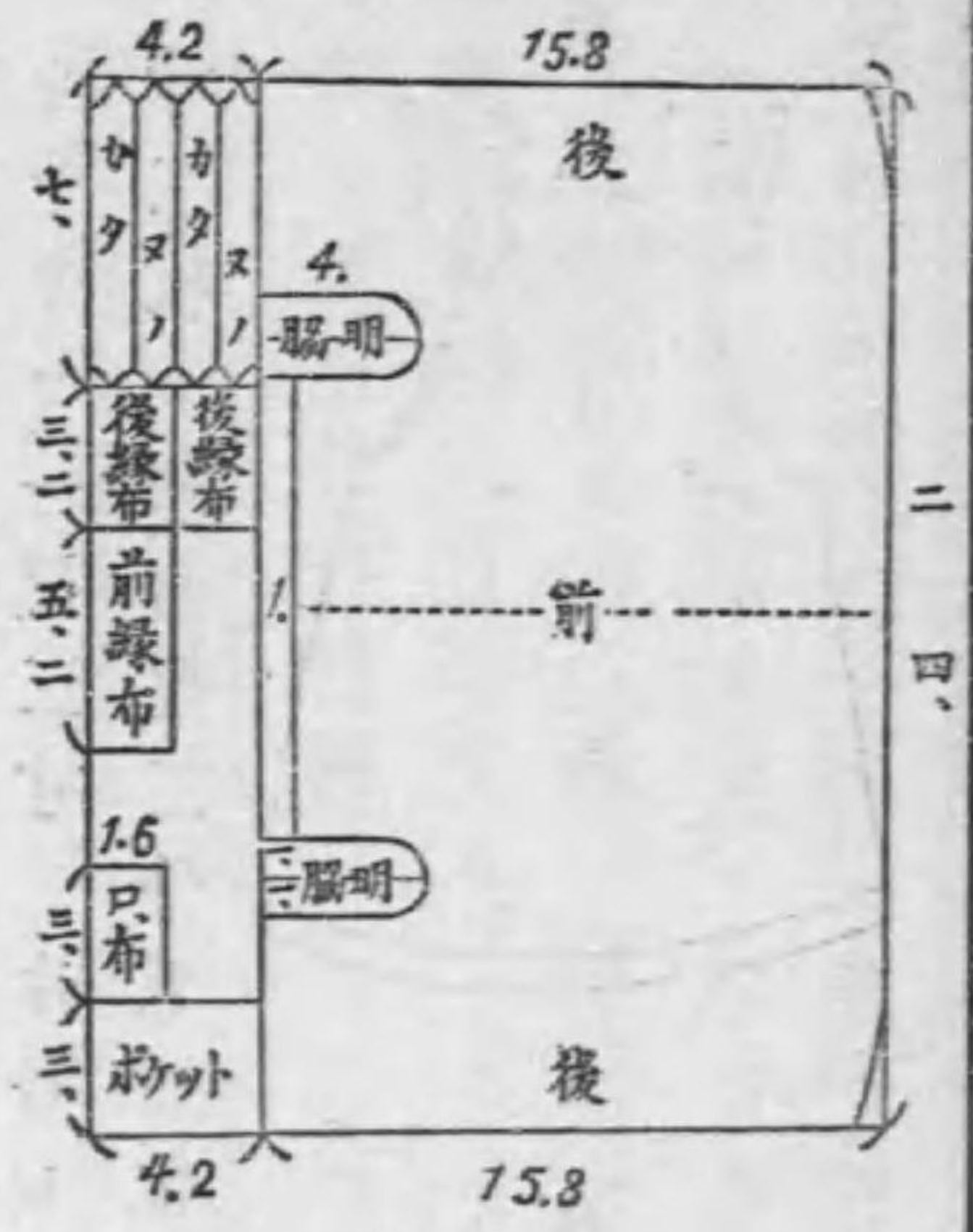


後

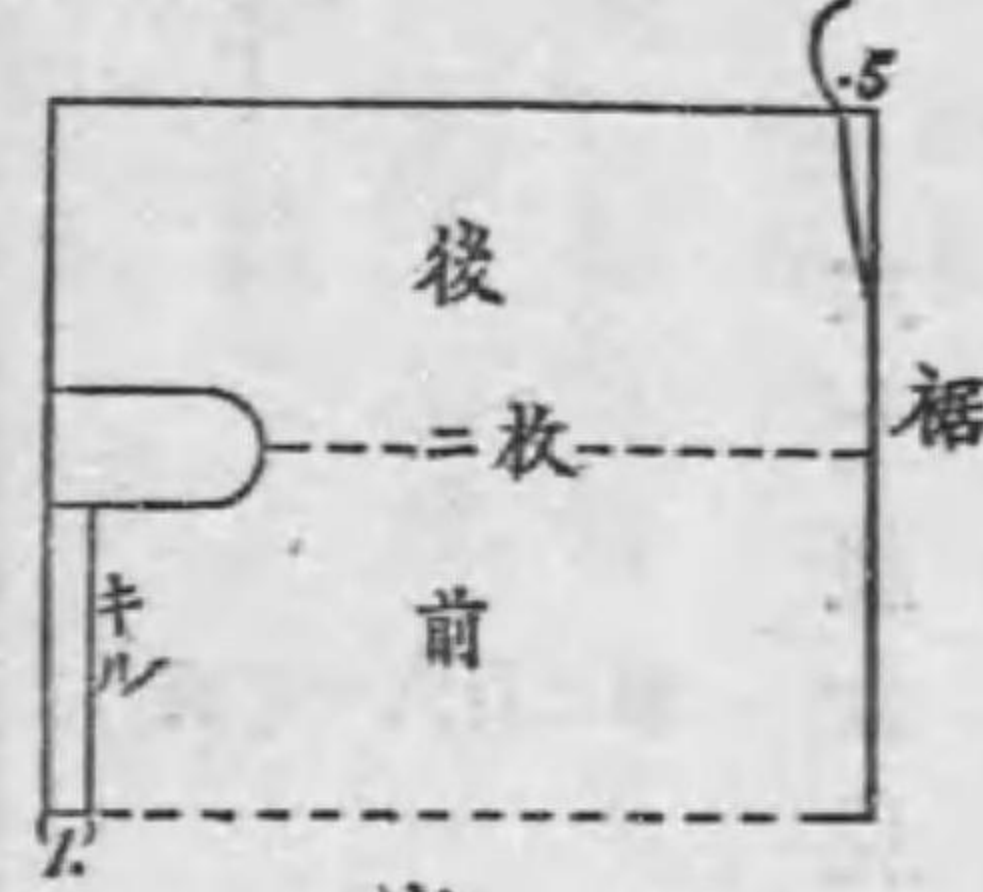
第三百七十一圖



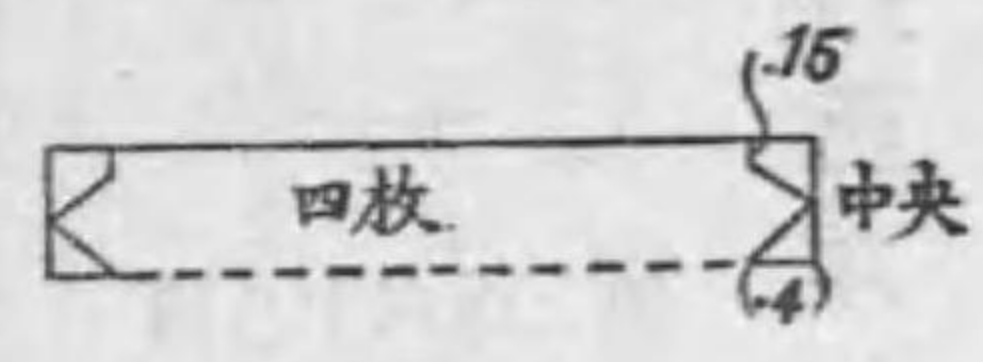
第三百七十二圖
裁ち方総合圖



第三百七十四圖



第三百七十五圖
肩布 幅を二つに折る



第三百七十三圖
袴の裁ち方

(幅を四つ折りにす)



(イ) 縫ひ方。

のリースを、大人西洋前掛の裁ち目を二度縫つて、肩布の丈(剣型を除く)に

合せて縮め、肩布の裁ち目一枚に縫ひ付け折りを肩布の方に返す。

裏を縫ひ目に折り付け、剣型の所も、裁ち目を折つて、表裏毛抜き合せにし、周圍全體にミシン縫ひをする。

(ロ) 袴の裾を二分折り、次に五分折つて纏り付ける。

(ハ) 袴の脇明きに見返しを縫ひ付け、丸みの所は、縫ひ込みに切り込みを入れ、見返しを、表より少し控へ目にして、裏に折り返し、見返して縫ひ込みを包んで、纏り付ける(又テープで挟んでもよい)。

(ニ) 左右の後の上の方、及び前の上の方の裁ち目を、二度グシ縫ひにして、前は四寸五分、後は左右とも、二寸五分に縮め、各々縁布を縫ひ付け、折りを縁布の方に返し、縁布の丈の兩端を縫ひ、表に返し、裏を縫ひ目に折り付け、表から縁布の周圍に、ミシン縫

ひをする。

(ホ) 肩布を、前後各縁布の上へのせ、出来上り圖の様に、ちきり止め
に、ミシン縫ひをする。

(ヘ) ポケット。随意の形に裁ち、脇明きから五分下り、又五分前に
よせて置き、周囲をミシン縫ひでおさへ、口止まりに門ごめを
する。

(ト) 右後に、縁布の端から二分入つて横に、釦と同じ大きに穴を開
け穴騰りをなし、左後を五分重ねて、穴に合せて釦を附ける。

附言 肩布を、片耳のレースにして、袖のレースを省きても宜
い、又前縁布を、片耳のレースにかへても宜い。

下巻終

大正十五年十二月一日印刷
大正十五年十二月六日出版

定價各冊全壹圓五拾錢

不許複製

編輯者兼
發行者

東京市本郷區湯島六丁目十番地

財團法人渡邊女學校出版部

代表者 渡邊 滋

印刷者

東京市本郷區本郷四丁目三十九番地

富谷 元吉 郎

印刷所

東京市本郷區本郷四丁目三十九番地

二原 堂 印刷所

發行所

東京市本郷區湯島六丁目十番地

渡邊女學校出版部

振替貯金口座東京一九八二〇番
電話小石川三七五八・七三六八番

發行圖書目錄

| 書名 | 冊數 | 定價 | 內容說明 |
|----------------|----|---------|---|
| 裁縫全書部 單衣の部 | 一 | 貳圓 | 單衣に關する語原沿革より全般の裁ち方縫ひ方等の一切を擧げて専門教育の資料とするに絶好の書である家庭の主婦の手引としても亦無上の好伴侶 |
| 同 袷綿入の部 | 一 | 貳圓 | 單衣に次いで袷綿入に關する全部の知識を網羅し詳細無比の書、教科書としても、参考書としても、共に適切なものである |
| 同 肌着帯の部 | 一 | 貳圓五拾錢 | 肌着と云ふ肌着、帯と名のつく帯は悉く擧げてある一讀手に取るやうに分る教科書として、學生の参考書としても、最良の書なるのみならず又教師の必携ふべき良書である |
| 同 羽織袴の部 | 一 | 貳圓五拾錢 | 上の三書にこの羽織袴を加へて和服一通りの裁縫書が完備します、これを修了すれば専門教師としても恥かしい所なく主婦としての知識も十二分である |
| 同 兒童の洋服部 | 一 | 四圓 | 小兒を洋裝にすることの可否は最早問題ではなく實行の域に入つて居る本書は最新型の内容を以て満たされたもので幾多洋服書中最第一のものとの定評 |
| 同 高等裁縫及雜の部 | 一 | 參圓五拾錢 | 前に掲げた四つの和服書に盡せない和服類と普通和服以外に世に用ひられる數多の特種品の裁縫に就いて詳説したもので、高等和服研究家の種本である |
| 同 束帯の五衣の部 | 一 | 貳圓 | 束帯五衣は昔の衣服では無い今日でも宮中には用ひられる本邦特有の文化の表現物である日本人の眞の大禮服である畫家も風俗研究家も常に參考して居る唯一のものである |
| 裁縫全書部 男洋服の部 | 一 | 貳圓 | 内地の仕入れ洋服書とは全く撰を異にし著者が多年米國にあり、根本から研究したもので解剖學上からの割出しに依つて學問的に説明したものであるから他に類のないことは勿論である |
| 中等教育 新裁縫教科書 | 三 | 各冊貳圓五拾錢 | 中等教育用として繁簡中を得且最新研究の結晶であつて勿論メートルを本位とした絶好の教科書今後の裁縫は本書に依らなくては何一つ出来ないと云つてもよい位である |
| 裁縫科 新教授法 | 一 | 貳圓 | 裁縫科教授の面倒なものはない又此位良教授法書の少い科もない著者吉村氏は多年その研究に従事せられ世に名を聞えた人であるから本書の内容に就ては論ずるまでもないことである |
| 裁縫科 教授改善資料 | 一 | 貳圓 | 著者池邊氏獨得の裁縫論あり詳細緻密の研究あり教員諸子に對する親切なる指導あり故に教授者たる者一度は必ず讀むべき書である |

310
451

| | | | |
|------------------------------------|------------------------------|-------------|--|
| 文部省教員検査 定試験家裁集 種科問題解答集 | 一 | 五 圓 | 家事裁縫の女検を受けるのに本書を讀まないのは航海に羅針盤を持たない一般である合格を望む方は是非本書を一讀せられよ |
| 同上増補 (十二年度) (十三年度) (十四年度) | 一 一 一 | 各冊 壹 圓 | 上の増補で爾後年々續刊します、十五年度の分も最近に出來ます |
| 渡邊裁縫新書 | 二 | 各冊壹圓 五拾錢 | 本校の移轉新築落成記念の爲社會奉仕的安價を以て發行せる書にして普通和服全般に就て平易懇切に圖解せる新書で總て鯨尺を用ひ家庭獨習用としては勿論教科書参考書としても最新の良書である |
| 綜合的 新教育大意 | 一 | 二 圓 | 土屋清一氏著文檢教育大意受験用として著述した最平易で最新しい書物最近までの試験問題が分類して載せてある |
| 月刊裁縫と家事 | 一月 50郵税 0.02 六月 3.00郵税 不要 | | 裁縫家事に関する論說研究等を滿載してある教師の参考してもよい又文檢受験者の必讀雜誌である |

以上の各書は郵送料一冊ならば金拾貳錢(東京市内は金八錢)二冊以上及滿、鮮、台、樺、
は目方に依つて違ひます

東京市本郷區湯島六丁目

渡邊女學校出版部

電話小石川三七五八番・七三六八番・七三六九番
振替口座東京一九八二〇番

終

